

鳥羽商船高等専門学校紀要

第44号

令和4年3月

鳥羽商船高等専門学校

令和4年3月

タ イ ト ル	頁
練習船鳥羽丸のトンガ海底火山噴火による影響について 齊 心 俊 憲 小 島 智 恵	1
A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period..... 鈴 木 聡	5
書評 見坊行徳・稲川智樹共著『辞典語辞典』(誠文堂新光社) 鈴 木 聡	19
翻訳 キャサリン・マンスフィールド作『園遊会』 鈴 木 聡	28
COVID-19への感染症予防を踏まえた大学体育実技授業の実践研究 平 川 武 仁 大 庭 恵 一 山 田 英 生	46
Isoroku Yamamoto's military strategy in the outbreak of the Pacific War 栢 山 剛	60
研究活動記録	75

練習船鳥羽丸のトンガ海底火山噴火による影響について

齊心 俊憲 * 小島 智恵 *

キーワード(Key words) : 練習船「鳥羽丸」(Training ship “TOBA MARU”)・津波 (Tsunami)

1. はじめに

鳥羽商船高等専門学校の練習船鳥羽丸は、1916年に建造された練習帆船「あまき」から始まり6代目の校内練習船であり、「鳥羽丸」としては3代目となる。

現在の3代目鳥羽丸は、1993年12月13日に三井造船株式会社玉野事業所にて起工され、1994年5月24日に進水、1994年8月19日に竣工となった。本年度で27年を経過した現在も校内練習船として日々運航を続けている。

2022年1月15日13時頃(日本時間)に南太平洋のトンガ王国で大規模な海底火山が噴火した。この噴火は、数十年に一度の規模と言われており、遠く離れた日本でも少なからず影響を受けた。そこで、トンガ海底火山噴火による練習船鳥羽丸が受けた影響について報告する。

湾の最奥部に設置されている。「A 函(練習船棧橋)」及び「B 函(カッター棧橋)」で構成されている。「A 函」は、現在の3代目鳥羽丸の大きさに合わせて設計し、平成12年に建設された。(図1)



図1 練習船鳥羽丸と棧橋

2. 練習船鳥羽丸の主要目

鳥羽丸の主要目は以下の通りである。

航行区域：近海区域（非国際航海）

資格：第4種船

総トン数：244トン

全長：40.00m

垂線間長：35.00m

幅：8.00m

満載喫水：2.80m

試運転最大速力：13.80ノット

航続距離：約2,300海里

主機関：4サイクルディーゼル1,300PS×370rpm

推進器：4翼可変ピッチプロペラ

バウスラスタ：1.2t (70kw)

定員：56名(乗組員9名・教官3名・学生44名)

「B 函」は、南側に設置され、陸岸と連絡橋で結ばれている。主にカッターの係留に使用されている。全長30m・幅8m・水面からの高さ約0.8mとなっており、カッターの乗艇・上陸に適した高さとなっている。

「A 函」は、北側に設置され、「B 函」と連絡橋で結ばれている。東側に鳥羽丸、西側にあさまを係留している。全長60m・幅8m・水面からの高さ約1.5mとなっている。冬期強風時でも棧橋上にほとんど波が打ち上がることなく、安全に鳥羽丸に乗船・下船出来るようになっている。

4. トンガ海底火山噴火による影響

4. 1 トンガ海底火山の噴火について

トンガ王国は日本から約8,000km離れているところに位置し、時差は日本時間より4時間進んでいる。

トンガ王国の海底火山「フンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ」が2022年1月15日13時頃(日本時間)に大規模噴火した。報道各社の放送される気象衛星「ひまわり」の噴火観測の映像は衝撃的であった。

3. 練習船鳥羽丸の係留

鳥羽丸の係留する棧橋は、三重県鳥羽市にある池の浦

4. 2 津波に関する情報について

鳥羽商船は、鳥羽地区台風・地震津波対策委員会の委員となっており、台風接近時や津波などの場合、鳥羽地区台風・地震津波対策委員会（事務局：鳥羽海上保安部交通課）より、メール等にて連絡が入る。

鳥羽丸の係留する桟橋は、池の浦湾に位置しており、港則法適用港ではない。

同委員会の「鳥羽地区台風等対策基準」では、「その他の港（漁港）の在船船舶は、適用港の勧告に準ずる」とされている。

今回の津波では、鳥羽地区台風・地震津波対策委員会の事務局である鳥羽海上保安部交通課よりメールにて下記連絡があった。

- ① 「津波注意報発表 避難準備の勧告・要請 2022 年 01 月 16 日 00 時 50 分発令（日本時間）」
- ② 「勧告・要請の解除 2022 年 01 月 16 日 14 時 00 分解除（日本時間）」

鳥羽丸は、この時季は北風が強く吹くこと、20 日間程度運航が予定されていないことから、係留索の増し取りを行い、長期係留状態としていた。発令時は、深夜であり鳥羽丸に在船者はいなかった。

※ 気象庁の三重県南部・伊勢・三河湾の津波注意報は、2022 年 1 月 16 日 00 時 15 分に発表。（日本時間）

4. 3 津波注意報発令時の行動について

津波注意報発令時、鳥羽丸に在船者はいないため、不用意に海に近づかないこととした。

日出後、鳥羽丸及び艇庫地区に設置されているネットワークカメラを使用し、遠隔で確認を行った。

休日であったため、鳥羽丸はジャイロコンパス及び冷蔵庫など一部を除いて、電源供給をしていないため、前方監視カメラ（船橋設置ネットワークカメラ BB-SC384B）の静止画のみ確認することが出来た。（図 2）



図 2 練習船鳥羽丸の前方監視カメラ映像

この映像から、船首係留状態に異常がない事が確認出

来たが、船尾方向はネットワークカメラがなく、確認することが出来なかった。桟橋が無事であること、鳥羽丸が漂流していないこと、ネットワークがつながっていること、以上を確認することが出来た。

4. 4 鳥羽丸周辺の潮位の変化

気象庁地震火山部の 2022 年 1 月 16 日 02 時 00 分報道発表「令和 4 年 1 月 15 日 13 時頃のトンガ諸島付近のフンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ火山の大規模噴火に伴う潮位変化について」で、鳥羽で第 1 波到達時刻 1 月 15 日 21 時 52 分（押し）これまでの最大波 40 cm の津波が観測されたとの発表があった。（図 3）

2022 年 1 月 16 日 14 時 00 分報道発表「令和 4 年 1 月 15 日 13 時頃のトンガ諸島付近のフンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ火山の大規模噴火に伴う潮位変化について（第 2 報）」では、鳥羽においては 1 月 16 日 01 時 45 分にこれまでに最大波 60cm の津波が観測されたとの発表があった。（図 3）

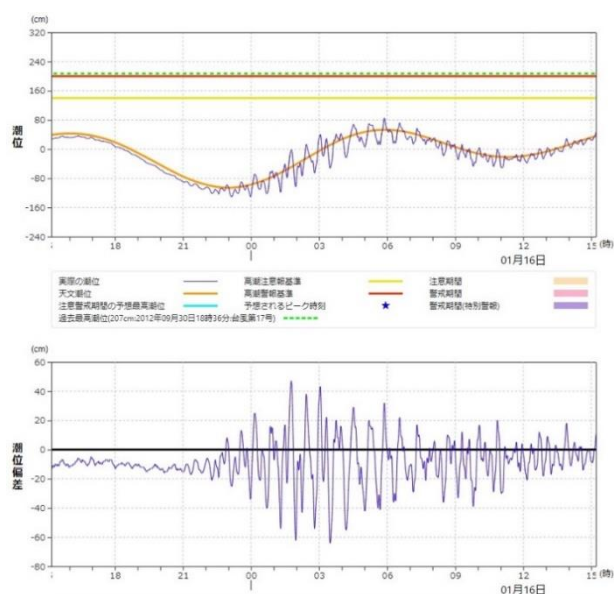


図 3 1 月 15 日鳥羽検潮所データ（気象庁 HP）

検潮所データでは、1 月 15 日 21 時 00 分過ぎから潮位偏差が次第に大きくなり、最大波が観測されたとされる 1 月 16 日 01 時 45 分付近では潮位偏差が最も大きくなっている。

鳥羽の潮位を観測している鳥羽検潮所は、練習船桟橋基部に設置されていることから、桟橋でも同時刻に同じ影響を受けていたこととなる。（図 4）



図 4 鳥羽検潮所と栈橋

4. 5 鳥羽丸周辺の気圧の変化

栈橋周辺の艇庫地区には、株式会社ウェザーニューズの「ソラテナ」が設置されている。(図 5) これは高性能気象 IoT センサーで気温、湿度、気圧、雨量、風速、風向、照度、紫外線を 1 分毎に観測する。その観測データはクラウド連携されるため、離れた場所からでもインターネット経由で観測データを見ることが出来る。



図 5 艇庫地区に設置されたソラテナと鳥羽丸

このシステムは、鳥羽丸が実証実験中の「ローカル 5G を活用した操船支援情報の提供および映像監視による港湾内安全管理の取組み」で使用されるものである。(2022 年 1 月現在) ※1

艇庫地区に設置されている「ソラテナ」で観測された気象データは以下のとおりである。

2022 年 1 月 15 日 20 時 00 分 (日本時間) では、気圧 1020.5hPa が観測され、20 時 32 分に気圧 1022.3hPa が観測されている。30 分で 1.8hPa の気圧変化が生じていた。(図 6)

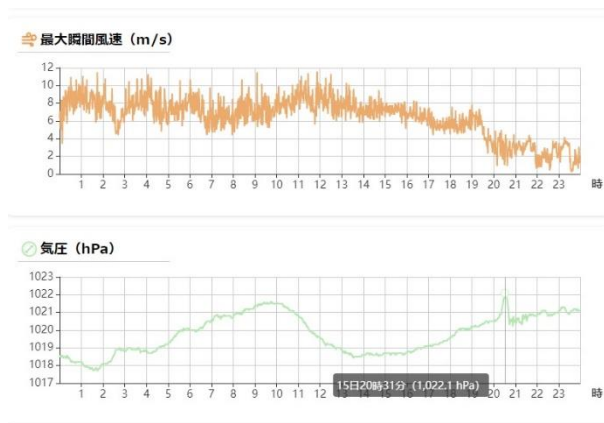


図 6 1 月 15 日気象観測データ (ソラテナ)

この気圧変化は大規模な海底火山噴火により、強い空気の振動が生じ、それが「大気の波動」として広がったとされている。

海底火山までの距離：約 8,000km

発生日時：2022 年 01 月 15 日 13 時 00 分頃 (日本時間)

気圧変動観測時刻：2022 年 01 月 15 日 20 時 00 分頃

伝搬速度：約 1,142.86km/h (317.46m/s)

5. 今後の検討事項

今回の津波による影響確認は、まずネットワークカメラによって行った。実際に栈橋で目視確認したのは、2022 年 01 月 16 日 14 時 30 分であった。

この間、鳥羽丸が所有するドローン「DJI Phantom 4 Pro」を飛行させて確認しようと考えたが、目視飛行、国道上空、近鉄及び JR 東海の線路上空を飛行する必要があるため断念した。

今後、自律飛行するドローンを使用して、漁港における漁船の係留状態などが確認出来れば、危険を冒して海に近づく必要がないと考える。

今回の津波には間に合わなかったが、現在実証実験中の「ローカル 5G を活用した操船支援情報の提供および映像監視による港湾内安全管理の取組み」の中で、「操船支援システム(AI 技術を使用した係留状況の確認など)」を行う予定である。どの程度、有効利用できるか期待されるところである。

6. あとがき

トンガ王国の海底火山「フンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ」の噴火による影響は、今後専門の研究によって明らかにされていくこととなる。

鳥羽丸では、船橋設置のネットワークカメラ (BB-SC384B)、艇庫地区設置の気象観測機器 (ソラテナ) など市販されている機器を使用して確認することが出来た。しかし、経年劣化により使用出来なかったネットワークカメラ (艇庫地区設置) や気象観測機器があり、改めて維持管理・整備更新などの必要性を感じることとなった。

鳥羽丸では、予め係留索の増し取りを行っていたことで、ゆとりを持って判断・行動することが出来た。いつ起こるか、わからない災害に対して、日頃から備えておくことの重要性も実感することとなった。

これは、東南海・南海地震及び東海地震などの警鐘とも言えるのではないだろうか。

※1 「ローカル 5G を活用した操船支援情報の提供および映像監視による港湾内安全管理の取組み」の実証実験に参加するコンソーシアムメンバー
2021 年度総務省の「令和 3 年度 課題解決型ローカル 5G 等の実現に向けた開発実証」に選定

□参考文献

- 1) 気象庁 HP
- 2) 株式会社ウェザーニューズ HP

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

Satoshi Suzuki

Key word: Old System High School Professor (旧制高校教授), New System University or College Professor (新制大学教授), Professor of Business College (実業専門学校教授), Education or School System (学制)

Abstract

It is often said that pre-war professors at old high schools were all demoted when they were transferred to new universities or colleges. To what extent is this true? Were there any professors from the old high school system who were demoted to become university professors? If the demotion was done only because of the change in the school system, what was the purpose of the demotion? In this paper, I will examine the reasons why professors of old high schools were demoted to associate professors when they were transferred to new universities, and whether this was done because of the transition period of the school system.

1 Introduction

It is said that pre-war professors at old high schools were demoted when they were transferred to new universities. To what extent is this true? Were there any professors from the old high school system who became university professors? If the demotion was done only because of the change in the school system, what was the purpose of the demotion? In this paper, I will examine the reasons why professors at old high schools were demoted to associate professors during the transition to the new university system, and whether this was done because of the transition period of the school system.

2 Reasons for Demotion After the War

I first became interested in the personnel of higher education faculty in the early postwar period when I read a book published in 1979 by Yoshio Ogawa(小川芳男) titled "This is How I Learned English" (TBS Britannica). According to Ogawa, after graduating from the Tokyo School of Foreign Languages, he worked at the Takada Girls' Junior High School (高田高等女学校), then became an associate professor at Yonezawa Technical College(米沢高等工業学校), then an associate professor at the Tokyo School of Foreign Languages(東京外国語学校), and finally a professor at the Tokyo Foreign Affairs College (東京外事専門学校). However, after the war, when the school system was changed and the Tokyo Foreign Affairs College was elevated to become the Tokyo University of Foreign Studies(東京外国語大学), he became an associate professor and was demoted¹. Although I was somewhat surprised, I was able to predict the outcome of the demotion based on my previous experience of investigating Seinosuke Hamabayashi² and the Temporary Teacher Training Institute³. This occurred because the Tokyo Foreign Affairs College is an extension of the old system of junior high schools(中学校), girls' junior high schools(高等女学校), normal schools(師範学校), and business schools(実業学校), and therefore, had a much higher prestige than universities. In addition, since business colleges are basically considered to be of the same rank as old high schools, it was thought that old high schools were treated in the same way as business colleges. In fact, not only Ogawa, but also other teachers from old high schools were demoted when they became university teachers. As an example, when Natsuo Shumuta(朱牟田夏雄), a professor emeritus at the University of Tokyo known for his famous translations of Tom Jones and other works, moved from a professor at the First High School(第一高等学校) under the old system to the Faculty of Liberal Arts at the University of Tokyo(東京大学教養学部), he was appointed as an associate professor⁴ instead of a full professor. Therefore, I had assumed that this demotion was due to the changes in the old and new school systems. However, in my recent research on the careers of various researchers and educators, I realized that there were actually similar cases in the prewar period and that there were two types of personnel changes that were also affected by the change in the school system. In the next section, after looking at the examples of postwar personnel promotion, I will introduce similar cases from the prewar period and present the cases of quick transition from old high school professors to university professors, as well as other unusual personnel changes, and explain the reasons for such decisions. I will also discuss the reasons for these changes.

3 Reasons for Demotion from Professor to Assistant Professor in High Schools and Vocational Schools

First of all, there were three cases of demotion from professor to associate professor in the postwar period that I am aware of.

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

1 Yoshio Ogawa: Professor at Tokyo Foreign Affairs College → Associate Professor of the Tokyo Foreign Affairs College (later Professor at Tokyo University of Foreign Studies)

2 Natsuo Shumuta, Professor at the First High School → Associate Professor at the University of Tokyo, Faculty of Liberal Arts (later Professor at the University of Tokyo, Faculty of Liberal Arts)

3 Kozo Tada, Professor at Fukuoka High School (福岡高等学校) → Associate Professor at Kyushu University (九州大学) (later Professor at the University of Tokyo, Faculty of Liberal Arts)⁵

First of all, I would like to point out that all three of these men are prominent figures in the field of English language and literature as well as English education in Japan, and they were not demoted because of some kind of trouble. Nevertheless, why were they demoted from professor to associate professor? In my opinion, the reason lies in their educational background and the disparity between schools.

Yoshio Ogawa's educational background, for example, is that he graduated from the Tokyo School of Foreign Languages, which is one of the old industrial colleges. As mentioned above, the old industrial vocational school was incorporated into the same legal framework as the old junior high school, junior high school for girls, normal school, and industrial school. For this reason, teachers at former junior high schools who have only graduated from the main course of higher normal schools are usually required to pass Koken (高検), which is the Examination to be former Senior High School Teachers (旧制高等教員検定試験). However, if one wanted to become a vocational college teacher under the same framework as the old junior high school system, he or she could do so without passing this test. In fact, Seinosuke Hamabayashi (濱林生之助), who had been a teacher at Fukushima Junior High School before Ogawa, moved from being a teacher at the old junior high school system to become a professor at Otaru Commercial College (小樽高等商業学校), a vocational college, even though he had not passed Koken. Similarly, Ogawa also moved from a teacher at Takada Junior High School for Girls to an associate professor at Yonezawa Technical College, which is a vocational college like Otaru Commercial College, even though he did not take the license for high school teacher. Hamabayashi, who became a high rank officer⁶ while teaching at a public junior high school, moved to Otaru Commercial College as a professor. Ogawa, on the other hand, had been a low rank officer⁷ when he was at the Takada Girls' Junior High School, so he was transferred to Yonezawa Technical College as an associate professor, but became a high rank officer (professor) a few years after he moved to the Tokyo School of Foreign Languages. A few years after moving to the Tokyo School of Foreign Languages, however, he became a professor and was appointed a professor at its successor, the Tokyo Foreign Affairs College. The reason Ogawa was appointed professor at the Tokyo Foreign Language School and then at the

Tokyo Foreign Affairs College was that although the names of the schools had changed, both the Tokyo School of Foreign Languages and the Tokyo Foreign Affairs College were legally the same vocational school. However, when the school system was changed and the Tokyo Foreign Affairs College was upgraded to a "university" as the Tokyo University of Foreign Studies, Ogawa, a talented and accomplished person, became nothing more than a "vocational school graduate" in terms of his academic background. Therefore, even if Ogawa was eventually promoted to professor, it was thought that there would be a problem if he were to be promptly promoted to professor, and so he was demoted to associate professor.

On the other hand, Natsuo Shumuta and Kozo Tada have perfect educational backgrounds, having graduated from Tokyo Imperial University with a degree in English Literature. However, even though both of them were already professors, Shumuta as a professor at the First High School, which is often called Ichiko(一高) and Tada as a professor at Fukuoka High School, Shumuta became an associate professor at the University of Tokyo and Tada became an associate professor at Kyushu University when they were reassigned to teach there. So, why were both of them, who had perfect academic records, demoted to associate professor when they were transferred to universities? It is because of the disparity between the old high school system and the former Imperial university system (旧帝国大学 ; FIU 旧帝大). No matter how excellent Ichiko and Fukuoka High School are, the old high schools are merely preparatory courses for FIU. Therefore, even if Ichiko and Fukuoka High School were to be absorbed by the University of Tokyo or Kyushu University as part of the successor institutions of the FIU, the disparity between the old high schools and FIU would be too great, and they were appointed as associate professors.

4 Prewar Personnel Cases and Similar Postwar Cases

The question that arises here is, then, whether this kind of example is a system that arose as a result of changes in the old and new school systems. However, in fact, similar examples existed before the war. The first two person of the following five are examples of this.

1 Tadao Yamamoto, (山本忠雄) professor at Hiroshima Higher Normal School and associate professor at Hiroshima University of Literature and Science (広島高等師範学校教授兼広島文理科大学助教授) (later professor emeritus at Kobe University)⁸

2 Shigetoshi Narita, (成田成壽) Professor at Tokyo Higher Normal School and Lecturer at Tokyo Bunri Kagaku University (東京高等師範学校教授兼東京文理科大学助教授) (later Professor Emeritus at Tokyo University of Education)⁹

3 Minoru Yasui, (安井稔) Professor at Tokyo Higher Normal School and Lecturer at Tokyo University of Education (東京高等師範学校教授兼東京教育大学講師) (later Professor Emeritus, Tohoku

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

University and University of Tsukuba)¹⁰

4 Chiaki Higashida(東田千秋) Professor at Hiroshima Higher Normal School and Assistant Professor, Faculty of Literature at Hiroshima University (広島高等師範学校教授兼広島大学文学部助教授)(later Emeritus Professor, Osaka Women's University and Professor, Kanazawa University) ¹¹

5 Torashiro Ozaki (尾崎帛四郎) Professor at Tokyo First Normal School (東京第一師範学校教授) → Lecturer at Tokyo Gakugei University(東京学芸大学講師) (later Professor Emeritus at Tokyo Gakugei University)¹²

After graduating from Tokyo Imperial University, Tadao Yamamoto worked as a teacher at Hiroshima Prefectural First Junior High School for a year, and then became a professor at Hiroshima Higher Normal School. After a few years later, while still a professor at Hiroshima Higher Normal School, he became an associate professor at the Hiroshima University of Literature and Science. In other words, he was both a professor at Hiroshima Higher Normal School and an associate professor at the Hiroshima University of Literature and Science. A similar example is Narita Shigetoshi. The year he became a professor at Tokyo Higher Normal School, he also became a lecturer at the Tokyo University of Literature and Science. In other words, he was both a professor at Tokyo Higher Normal School and a lecturer at Tokyo University of Literature and Science. At that time, Tokyo Higher Normal School was a vocational school like the Otaru High School of Commerce and the Yonezawa High School of Technology and was of the same rank as the old high school system. As a result, there was a problem in getting a professor to teach at a liberal arts college. This was not a story limited to Narita, and the following description by Yasui in the book "Dr. Yasui's 60th Anniversary" published in 1981 indicates that this was the general view at the time.

In April of that year (1950), when I was an associate professor, I was assigned to teach at the Tokyo University of Education, which had just been established the previous year (1949). Classes had also begun. Later, it was discovered that it was not administratively desirable for an associate professor to also be a lecturer at the university. In the end, I was forced to give up my main position as an associate professor and become only a lecturer (part-time). After receiving the explanation from the administration, I immediately agreed and gave my consent. However, I was told that the allowance might be reduced by about a third. It was an unavoidable situation. However, as luck would have it, when the Personnel Committee was told that Yasui had agreed to the appointment, they felt sorry for me, and I could be promoted to professor. (p.8)
(These statements were translated by Suzuki)

According to these statements, Yasui became a professor at Tokyo Higher Normal School in 1950, soon after the school system was switched to the new system, and at the same time he was also a lecturer at the Tokyo University of Education, which is very similar to Narita's case. In other words, if the person at that time wanted to be a lecturer at a university, the person had to be at least a professor at the Higher Normal School or High School level, and not an associate professor. I would like to add that the Tokyo University of Education, where Yasui worked as a lecturer, is the successor to the Tokyo University of Literature and Science, which was elevated from a major course of the Tokyo Higher Normal School to a university under the old system, so it is not a school with which Yasui had no connection. In spite of this, the conditions for lecturer at the university are very strict. In addition to the above, Chiaki Higashida, who had become a professor at Hiroshima Higher Normal School under the old system, became a Hiroshima Higher Normal School professor because he became an associate professor at Hiroshima University's Faculty of Literature under the new system.

As mentioned above, the former higher normal school and the former high schools were recognized as being of the same rank, so it is not surprising that the same judgments were made, and similar personnel changes were made when professors of the former high schools were transferred to the new universities due to the change in the school system. However, although there were cases in which professors at old high schools served as both junior high school course (尋常科) and high school course (高等科) teachers within the same school, as in the case of seven-year high schools, there were few cases in which professors served as both teachers at old high schools and old universities, as in the case of higher normal schools and literature and science universities. In other words, there were few cases where faculty members of old high schools and old imperial universities held concurrent positions.¹³ Therefore, when professors at old high schools became associate professors of new universities after the transition to the new school system, they were merely given the impression of being "demoted". In many cases, when professors at old high schools became faculty members of new universities, they started as associate professors, but there were also cases where they started as lecturers, except at old high schools. The fourth example is Ozaki Torashiro. Ozaki started as a lecturer, not an associate professor when he became a professor at Tokyo First Normal School and then a teacher at Tokyo Gakugei University. The reason is that although normal schools became an institution of higher education in 1943, most of their origins are the same secondary school as the old system of junior high school and junior high school for girls. In addition, Ozaki Torashiro became a professor at the Tokyo First Normal School in 1947, and the Tokyo First Normal School was absorbed into the Tokyo Gakugei University in 1949, so number of years since becoming a professor was short, only two years. Since there is a precedent for this, it can be assumed that he became a lecturer rather than an associate professor. However, depending on the length of the tenure of the position, the

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

professor may have started as a lecturer, which was the normal procedure, as there was a precedent for the concurrent appointment of faculty members of the former high school teachers and the university of arts and sciences. It was a normal procedure.

5 Examples of Prompt Transition to University Professorship

Looking at the cases so far, it may seem that there are no examples of professors at old high schools or old industrial colleges who quickly transitioned to university professors, except in cases where they were already university professors, but in fact, were there any cases where they quickly transitioned to university professors? In fact, there were some. The following are two examples.

1 Tatsu Sasaki(佐々木達)¹⁴ professor at the Tokyo Foreign Affairs College (東京外事専門学校) → professor at the Tokyo University of Foreign Studies(東京外国語大学) (later emeritus professor at the Tokyo University of Foreign Studies)

2 Kikuo Tanaka(田中菊雄)¹⁵ professor at Yamagata High School(山形高校教授) → Professor, Faculty of Literature at Yamagata University(山形大学文学部教授) (later emeritus professor at Yamagata University)

Tatsu Sasaki is a well-known author and editor of “*the Concise English-Japanese Dictionary*” and “the Global English-Japanese Dictionary”, which were published by Sanseido. Sasaki was actually enrolled at the Tokyo Foreign Affairs College at the same time as the aforementioned Yoshio Ogawa and became a professor at the same time (both in April 1946). Including his time at the Tokyo School of Foreign Languages, Ogawa became a professor earlier (March 1941). Despite this, Ogawa was an associate professor and Sasaki was a professor at the new Tokyo University of Foreign Studies. Furthermore, Ogawa had been an associate professor at the Tokyo School of Foreign Languages for eleven years, while Sasaki had been a professor for only three years. So why was Ogawa an assistant professor and Sasaki a professor when they were promoted to universities? The reason is their educational backgrounds. Sasaki was a graduate of Tokyo Imperial University and had taught at Tokyo Imperial University, albeit as a commissioned lecturer, before he was appointed professor at Tokyo Foreign Affairs College. Ogawa, on the other hand, was a graduate of the Tokyo School of Foreign Languages and a graduate of a so-called vocational school. The difference in their educational backgrounds is thought to be the reason why Ogawa was appointed as an associate professor and Sasaki as a professor when the new university system was introduced. However, we should not forget that the reason why Sasaki was able to move from a professorship at the Tokyo Foreign Affairs College to a professorship at

the Tokyo University of Foreign Studies was because it was a business college, not a former Imperial university. If Sasaki had moved to the University of Tokyo, judging from the fact that Natsuo Shumuta, who was a professor at Ichiko, was hired as an associate professor, Sasaki would have started as an associate professor and would not have been able to become a professor quickly.

The other individual was Kikuo Tanaka. Kikuo Tanaka was a person of great ambition who passed the examination to be junior high school teacher (文部省検定試験: 文検、Bunken) and then Koken. He was also an old junior high school teacher who became a professor at Yamagata High School after working as a professor at Toyama High School under Tsunetaro Nannichi. When Yamagata High School was upgraded to Yamagata University in 1949, Tanaka became the head of the Department of English Literature, in the Faculty of Literature and Science at Yamagata University, so naturally his position was that of a professor. In this way, there were people who quickly transitioned from professors at old high schools to professors at new universities.

6 Unusual Personnel Changes after the War: From Professor of Old High School to Teacher of New Junior and Senior High School

To tell the truth, I think that this was not unusual, but was the default course of events. However, even from my point of view, there is one personnel change that is unusual. That is Koichi Miyata.

1 Koichi Miyata (宮田幸一): Professor and teacher at Tokyo High School (東京高等学校教授兼教諭) → Junior and Senior High School attached to the University of Tokyo Faculty of Education (later Professor Emeritus at Tsurumi University)¹⁶

After graduating from Tokyo Higher Normal School in 1926, Koichi Miyata was hired as an assistant teacher at Tokyo High School (東京高等学校助教諭), which is called Tonko, a seven-year school system. Later, after being hired as a teacher, he passed Koken and became a professor.

However, in 1951, Miyata was reassigned to teach at the University of Tokyo's Junior and Senior High School attached to the Faculty of Education (Todai Junior and Senior High School). The East High School, where Miyata had been, was absorbed into the University of Tokyo's College of Liberal Arts, so he should have been able to become a teacher at the University of Tokyo's College of Liberal Arts. In reality, however, Miyata was transferred to a teaching position at a secondary school, a junior high school, even though it was at the University of Tokyo. There are several possible reasons. The first is the disparity between schools. In fact, the University of Tokyo's College of Liberal Arts was founded not only at Higashi High School, where Miyata was a student, but also at Ichiko High School. Moreover, the Komaba campus, where the University

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

of Tokyo's College of Liberal Arts is now located, was founded by Ichiko. Furthermore, the regular department of Higashi High School became the University of Tokyo Junior and Senior High School. Therefore, there is a possibility that teachers from Ichiko were given priority over those from Tokyo High School when it came to hiring teachers. In fact, the total number of teachers from both Ichiko and Tokyo High Schools would have been quite large, and it would not have been possible to hire all of them as university teachers. In such a case, it would have been inevitable for the University of Tokyo to hire teachers from Ichiko in preference to those from Tokyo High School. The second factor is educational background. Miyata had passed the difficult entrance exam for high school. However, we cannot deny the possibility that he was judged to be a lower rank than the graduates of former imperial universities. In fact, if you graduated from an imperial university, a high school teacher's major, or its successor, a college of liberal arts and sciences, you could become a teacher at an old high school without taking the high school examination. For example, the above-mentioned Yasui, after graduating from Tokyo High School Teachers' College, entered and graduated from Tokyo University of Letters and Science, but was appointed as an assistant professor at Tokyo Higher Normal School immediately afterwards. Moreover, both Natsuo Shumuta, who was at Ichiko at the same time as Miyata, and Kozo Tada, a professor at Fukuoka High School who was appointed as an assistant professor at Kyushu University, were educated at Tokyo Imperial University. Even these Imperial University graduates started out as assistant professors. Even though he was a professor at Tokyo High School, Miyata was a high school graduate. Furthermore, Miyata was a graduate of the Tokyo Higher Normal School, which was a vocational school for business, and was hired first as a junior high school course teacher, which may have led him to participate in the establishment of the University of Tokyo Junior and Senior High School. The third point is his achievements. Before becoming a teacher at the University of Tokyo Junior and Senior High School, Miyata had published six articles, three serial articles, and three books. However, he may have been considered insufficiently accomplished to become a teacher at the University of Tokyo, the highest academic institution, although acceptable at other universities. This reminds me of the aforementioned Kikuo Tanaka. Like Miyata, Tanaka had passed the high school entrance examination, but he became a professor, and even a senior professor, at the new Yamagata University. So how did Tanaka become a professor and even a senior professor when even Ogawa, Shumuta, and Tada were appointed as assistant professors? The reason is that Tanaka belonged to an old high school, and that old high school was not absorbed into the old Imperial university. In the case of Miyata, his high school was absorbed by the University of Tokyo; Ogawa's final education was at a vocational school and he did not pass the high school examination; Shumuta's high school was absorbed by the University of Tokyo; and Tada's high school was absorbed by Kyushu University. In fact, as far as the author is aware, Tanaka's only three publications were *Kenkyusha's Eiwa Daijiten* (English

Japanese Dictionary), Iwanami's *Iwanami Eiwa Jiten* (Iwanami Dictionary of English and Japanese), and For English Researchers, and his famous *Eigo Koobuntan*(『英語広文典』 (1953) and *Nyumon Eibunpo* (『入門英文法』) (1956) were published after the transition to the new school system. Therefore, if we look only at his research achievements, we can say that Miyata, who worked at a secondary school, has more research achievements than Tanaka. However, in Miyata's case, this achievement was not appreciated because his Tonko was absorbed by the University of Tokyo. If Miyata, like Tanaka, had been a professor at an old high school in a rural area that was not affiliated with an old imperial university, there is no denying the possibility that he could have become a professor at a national university like Tanaka. Ogawa could also have started out as a professor at Tokyo University of Foreign Studies if he had passed the Higher Teacher's Certificate Examination like Tanaka. Of course, there have been professors who became professors at Imperial universities without having graduated from them. For example, Yoshio Yamada,¹⁸ a professor of Japanese language and literature, became a professor at Tohoku Imperial University even though he was a dropout from an old junior high school and had passed the literary examination¹⁹. Konan Naito,²⁰ a professor of Oriental history at Kyoto Imperial University, was a graduate of Akita Normal School, which was a secondary school at the time. In comparison with these two, Miyata's educational background is far superior. However, both of them had published achievements that no one else could match at the time²¹. Miyata, on the other hand, had not yet achieved the same level of achievement as either of them. In contrast, Miyata's achievements were not yet on par with those of these two, and it is thought that he was demoted to a secondary school teacher because his achievements were not good enough to be hired as a teacher at the University of Tokyo, the highest educational institution in Japan.

7 Conclusion

As mentioned above, with the exception of Koichi Miyata, the fact that professors from old high schools and business colleges became lecturers or assistant professors when transitioning to the new university system did not occur in conjunction with the transition period between the old and new school systems but was merely applied at the time of the new school system in accordance with cases that had already taken place during the old system. It is true, however, that the disparity in educational background and place of employment between schools was strictly examined, and in some cases, even professors of old high schools were uncharacteristically transferred to teaching positions in secondary schools rather than universities. In the end, Miyata was transferred to Tsurumi Women's University, which was later renamed Tsurumi University, and became Professor Emeritus of Tsurumi University.²² However, the fact that he was transferred from a professor at Higashi High School to a teacher at the University of Tokyo's junior and

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period

senior high schools is the only result of the change in the old and new school systems. Although we like to introduce new systems without thinking, it is necessary to keep in mind that some people's lives may be greatly affected by the new system, taking Miyata's example as a lesson.

Notes

1 In "This is How I Learned English," by Yoshio Ogawa (TBS Britannica), there is the following description.

I became a professor of foreign languages in 1941, but when the Tokyo University of Foreign Studies was established in April 1950, I was demoted to assistant professor. When the Tokyo University of Foreign Studies was established in April 1950, he was demoted to assistant professor. I guess they thought it was appropriate for a young man like me to stay as an assistant professor for a while, since it was a university, albeit a new university. (These statements were translated by Suzuki.)

2 Satoshi Suzuki, "A Study on Seinosuke Hamabayashi: Why was Hamabayashi able to move to Otaru High School of Commerce as a professor?", Bulletin of Toba College of Maritime Technology, No. 37, pp55-64, 2015.

3 Satoshi Suzuki, "A Study on the Trend of Graduates of the Temporary Teacher Training Institute," Bulletin of Toba College of Maritime Technology, No. 39, pp25-31, 2017.

4 Natsuo Shumuta, "Natsuo Shumuta, Professor Nenpu," in Natsuo Shumuta's Collection of Essays in Commemoration of the 60th Anniversary of Professor Shumuta's Death, Eighteenth Century British Studies, p. 316,

According to Hachiro Hitaka, who was a professor at the University of Tokyo, Faculty of Liberal Arts and was in charge of this chronicle (p. 326), he had originally received it from Mr. Shumuta in the form of a short chronicle, and Mr. Hitaka was supposed to compile it. However, since Mr. Shumuta himself wrote a detailed description, he decided to reprint the chronology as it was.

5 "Professor Kozo Tada's History and Achievements," Senshu Jinbun Ronshu, Goro Kasahara and Kozo Tada Retirement Commemorative Issue, No. 37, p. 15.

Senshu University Society, 1986

6 One of the official grades under the old system. It was divided into nine grades in addition to parental appointments, with the parental appointments and first- and second-ranked officials designated as imperial appointments, and third-ranked officials and below as clerical appointments. The following is an abbreviation." (Izuru Shinmura (ed.), Kojien 7th Edition, p. 999, Iwanami Shoten, 2018)

7 One of the statuses of officials under the Meiji Constitution. Appointed by the authority of ministers and prefectural governors.

It is subordinate to higher officials and is also called a subordinate official. (Shinmura

Izuru(ed.), Kojien 7th Edition, p2422, Iwanami Shoten, 2018)

8 “Curriculum Vitae” , “Ordinations and Decorations of Persons who Died in October 1991,” Vol. 115, National Archives of Japan, 1991.

9 “Nenpu, ” Critique: Literature and Language, Collection of Essays in Commemoration of Professor Shigehisa Narita’s 60th Birthday, p409, Kenkyusha, 1971

10 “Curriculum Vitae, ” by Minoru Yasui, p8 in Commemoration of the 60th Anniversary of Dr. Minoru Yasui, Kenkyusha, 1981

11 “Curriculum Vitae, ” Language and Style, Collection of Essays in Commemoration of the 60th Birthday of Professor Chiaki Higashida, p409, Osaka Kyoiku Shuppan, 1974

12 “Rekisho” , “December 1991 Deaths, Ordinations and Decorations”, Vol. 155, National Archives of Japan, 1991

13 According to Natsuo Shumuta’s “Natsuo Shumuta, Professor’s Curriculum Vitae” (p. 315), Mr. Shumuta “became a professor at the First High School in May 1946.

This continued until the end of the old system. In November of the same year, he was “commissioned as a lecturer at the Faculty of Letters of the University of Tokyo. In November of the same year, he was “commissioned as a lecturer in the Faculty of Literature at the University of Tokyo,” and “this continued until the end of the old system. ”

The reason why Mr. Shumuta was asked to take charge of this project was because Professor Sanki Ichikawa retired and Mr. Fumio Nakajima, who had been in charge of general languages, became his successor, and he was put in charge of Professor Nakajima’s general languages.

14 “Rirekisho” ” (Curriculum Vitae), in “On the Ordination of 139 Honorary Professors Sasaki Tatsu, Tokyo University of Foreign Studies” , Vol. 175, National Archives of Japan.1986.

15 “In June 1949, a new university system was established as a result of the school system reform, and the professors of the Department of English Literature, Faculty of Letters and Science, Yamagata University at that time were Professor. Tanaka as the chief professor and Professors Fukamachi Kozo, Suzuki Takeo, Suzuki Tomio, Taniguchi Rikuo, and Wada Zentaro, all from the former Imperial University, as assistant professors. ” (The Journal of the History of English Education in Japan) (Japanese Journal of the History of English Education, No. 9, The Japanese Society for the History of English Education, 1994) (These statements were translated by Suzuki.)

16 The following is from the author’s biography on the door of Koichi Miyata’s English Grammar in the Classroom, published by Kenkyusha in 1961.

“He graduated from the English Department of the former Tokyo Higher Normal School. After graduating from the English Department of the former Tokyo Higher Normal School, he obtained a license to teach English under the old system. After graduating from the English Department of

A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early
Postwar Period

the former Tokyo Higher Normal School, he obtained a license to teach English under the old system and worked as a teacher at the former Tokyo High School (a seven-year high school) before becoming a professor. When the school system was reformed and the school was split into two, one of which became part of the University of Tokyo's College of Liberal Arts and one of which became affiliated with the University of Tokyo, she participated in the establishment of the affiliated school and became a teacher at the affiliated school. Later, he was appointed as a lecturer at Ochanomizu University. " (These statements were translated by Suzuki.)

17 "Appointment of Koichi Miyata as Assistant Teacher of Tokyo High School and Payment of Salary Outside the Limitation for First Appointment" June 30, 1926

National Archives of Japan, Digital Archive

18 "Rirekisho" (Curriculum Vitae), "Yamada Yoshio and Two Others Appointed as Members of the House of Peers in Accordance with the Fourth Item of the First Article of the House of Peers", May 18, 1944, National Archives of Japan.

National Archives of Japan, May 18, 1944.

19 From the above documents, there was a record of passing the literary examination, but there was no record of passing the high school examination.

20 HP "Portrait of Modern Japanese" (<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/301.html>)

21 According to Kiyoharu Sato (1997), Yamada published two books, "Lectures on Japanese Grammar" and "Lectures on Japanese Colloquialism" three years before his appointment as a lecturer at Tohoku Imperial University in 1925, and "A Study of Honorific Methods" the year before his appointment. (p.107) Regarding Konan Naito, he wrote, "Konan Naito (1866-1934, real name: Torajiro) is one of the foremost Oriental historians of modern Japan, and is considered to be one of the founders of Shina-gaku. The "Kyoto Shina Studies" led by Honan had a unique view on the context of China's historical development, and the most notable of his theories was the theory of the Tang-Song Transformation. His understanding of Chinese history and his hope for the possibility of an "oriental modernity" remain important ideological resources for scholars pursuing the "Chinese model" to this day. (He Pengjian, "The Construction of Modern China in Naito Honan," Journal of Northeast Asian Studies, No. 28, p. 47, 2017), which shows that Naito Honan was an outstanding figure.

22 Setsuko Ikuno, "A Brief Biography of Professor Koichi Miyata," Bulletin of Tsurumi University, Part 2: Foreign Languages and Literatures, No. 15, P169-P181, 1978.

References

- 1 Yoshio Ogawa, I Learned English Like This (TBS Britannica), 1979
- 2 Natsuo Shumuta, A Collection of Essays in Commemoration of the 60th Anniversary of Professor Shumuta's Death, Eighteenth Century British Studies, p. 316, Kenkyusha Shuppan 1971
- 3 "Senshu Jinbun Rombunshu: Professor Goro Kasahara and Kozo Tada's Retirement Memorial Issue",

- No.37, Senshu University Society, 1986
- 4 Izuru Niimura (ed.), *Kojien* 7th Edition, Iwanami Shoten, 2018
- 5 "Ordinations and Decorations of Persons Who Died in October 1991," Vol. 115, National Archives of Japan, 1991
- 6 "Critique: Literature and Language," Collection of Essays in Commemoration of the 60th Anniversary of the Death of Professor Naruhisa Narita, Kenkyusha, 1971
- 7 "In Commemoration of Dr. Minoru Yasui's 60th Birthday," p. 8, Kenkyusha, 1981
- 8 "Language and Style: A Collection of Essays in Commemoration of the 60th Anniversary of the Death of Professor Chiaki Higashida," Osaka Kyoiku Shuppan, 1974
- 9 "Dec. 1991 Deaths, Decorations and Orders," Vol. 155, National Archives of Japan, 1991
- 10 "On the Ordination of 139 Honorary Professors of Tokyo University of Foreign Studies," Vol. 175, National Archives of Japan, 1986
- National Archives of Japan, 1986
- 11 Shin'ichi Akiho, "Yamagata's native English scholar, Kikuo Tanaka," *Journal of the History of English Education in Japan*, No. 9, The History of English Education in Japan, 1994.
- Japanese Association for the History of English Education, 1994.
12. Miyata, Koichi, *English Grammar in the Classroom*, Kenkyusha, 1961.
- 13 "Yamada Yoshio and Two Others Appointed as Members of the House of Peers in Accordance with Article 1, No. 4 of the House of Peers", May 18, 1944, National Archives of Japan.
- National Archives of Japan.
- 14 HP "Portraits of Modern Japanese" <https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/301.html>
- 15 Sato, Kiyoharu, "Yamada Yoshio biography," in *Japanese Linguistics Series*, Japanese Linguists in Retrospect, Meiji Shoin, 1997.
- 16 *Bulletin of Tsurumi University*, Part 2: Foreign Languages and Literatures, No. 15, p. 169-p. 181, 1978.

書評 見坊行徳・稲川智樹共著『辞典語辞典』（誠文堂新光社）

鈴木 聡

はじめに

本書は今（2021）年 1 月に見坊行徳・稲川智樹両氏による『辞典語辞典』が誠文堂新光社より出版された。この書籍は辞書にまつわる書籍、言葉、人物等に焦点をあててまとめた画期的な書籍である。そのため扱う範囲はウィキペディアやウイクショナリーといったネット関係の言葉から、馬締光也や大渡海といった『舟を編む』に出てくる架空の人物や作品、また見坊豪紀や金田一京助といった著名な言語学者まで幅広い分野にわたっている。

ここで気づいた方もおられるかもしれないが、著者の一人である見坊行徳氏は見坊豪紀氏の令孫である。そのため、見坊豪紀氏に関する記述は他の人物の記述よりも詳細となっている。また、見坊豪紀氏は用例採集カードを最終的には 145 万枚作ったという伝説を残す偉大な辞書学者であった。その血を行徳氏も継いでおられるのだろう、早稲田大学在学中に『早稲田大辞書』という早稲田の学生が使用する早稲田語についてまとめた辞書を作成している。そのため、本書の後ろには「辞書編纂マニュアル」や辞典語編集部が作成した語釈カードのサンプルが付いている。これを使用すれば、読者も辞書の語釈を書き、自分なりの辞書を作りたい衝動に駆られるかもしれない。そういった点では、この書籍はこれまでどこか距離のあった辞書製作を身近に感じさせてくれる優れた書籍であると言えるだろう。

もっとも、筆者から見れば、それでもこの書籍に若干疑問がないわけではない。それは具体例に偏りがあるということである。以下に気になった項目について述べていくことにする。

1 「絵辞典」

絵辞典は日本だけではなく、Oxford Picture English Dictionary（以下 OPED）のように外国にも類似のものが存在する。この OPED は日常語だけではなく、ビジネス語まで含まれているため、社会人の英語学習にも対応している。確かに本書の語釈には「それまで経験した物事と見出し語がイラストによって結びつきやすくなるため、学習者用や幼児用が多い。」と説明されているものの、具体例として挙げられているものは『学研ことばえじてん』『角川ことばえじてん』『くもんのことば絵じてん』『三省堂こどもことば絵じてん』『小学館ことばのえじてん』等の幼児用に限定されており、学習用の辞書というイメージが持ちにくい部分がある。中には、「絵辞典」という語感から「それは仕方ないのでは」と考える方もおられるかもしれないが、実は日本でも学習用の「絵辞典」は存在している。その辞典がちくま文庫から出版されている岩田一男・真鍋博共著の『英絵辞典』である。この辞典は実生活に即した 205 の項目に関する 6000 語余りを収録したものである。これをみると、英語でテニスのボレーの綴りが不明な時に、「テニスコート」の項目を見ると、“volley”とバレーボールの“volley”と同じ綴りであることを学習することができる優れた書籍である。つまり、この辞典は英語に関する英絵辞典ではあるものの、子供用ではなく、英語

を学習する人を対象にした辞書なのである。事実、著者は「この本は「英和辞典」、「和英辞典」の欠陥を補うために作られた、日本で初めての本です。」と学習者用であることを明示している。

2 「逆引き」

西洋古典語を学習する上で逆引き辞典というのは珍しくない。このことについて以下に挙げる山本書店から出版された岩隈直の『新約聖書ギリシャ語逆引き辞典』(1977)の「はじめに」が参考になる。

「ロシア語は辞典が引けたら一人前」という言葉があるようだが、これは『新約ギリシャ語』にも当てはまる。

確かに名詞と動詞の変化形を全部暗記し、原形から変化形をたどり、またその逆に変化形からすぐに原形をたどることができれば辞典は十分に活用できるわけだが、これが即座にできればそれだけで確かに一人前である。「辞書が引けたら一人前」という言葉は、ここから生まれたのであろう。一中略一。これは何も日本人だけではない。印欧語族である欧米人も同じであり、そのため、変化形から、原形の引ける種々の『逆引き辞典』が刊行されている。ギリシャ語を例にとると古典ギリシャ語の“TUTTI VERBI GRECI”(ジュゼッペ版)や新約ギリシャ語の“ANALYTICAL GREEK LEXICON”(バグスター版)がそれであろう。従って、我々が上記の壁を突破しようとするれば、『逆引』は必要不可欠といっても過言ではない。」

岩隈(1977)が言及した上記2冊は岩隈以前に出版されていること、また著者が例として挙げた『日本語尾音索引』の出版年は1978年であることから、逆引の発想は西洋古典語の方が先行し、日本独自のものではないと言える。そのため、「逆引き」に言及するのであれば、その逆引きの発想がどこから来たものなのかを明示する必要があるが残念ながら本書にはその点に関する記述が一切なされていない。

3 「金田一家」

金田一家に関しては京助、春彦、秀穂の三氏を記載しているが、これもやはり不十分である。実は、金田一秀穂氏は金田一春彦氏の次男であり、長男は金田一真澄氏である。確かに金田一真澄氏は日本語に関する言語学者ではないものの、NHK教育テレビの『ロシア語会話』で講師を務めたロシア語学者であり、1992年に『岩波ロシア語辞典』の編集作業にも携わっている¹ことから、辞書に全く関係していないわけではない。そのため、本来であれば、真澄氏に就いても何らかの言及が必要である。なお、金田一真澄氏は長野県立大学学長でもある。

4 五十音順

現在の和英辞典は五十音順になっているが、以前は必ずしもそうではなかった。和英辞典で初めて五十音順を採用したのは三省堂『初級コンサイス和英辞典』(1957)で編者は三省堂辞書編修所である。ただし、編集協力者とした増野肇・岩井重郎・河村重治郎の三氏の名が記載されている。中でも河村重治郎は研究社の『新英和大辞典』の編集主幹をはじめ、三省堂の『クラウン英和辞典』シリーズ等数々の辞書の編者としても知られている著名な人物である。そしてこの辞書が出版されるまでは和英辞典はローマ字表記であ

った。一部の識者の中には「大修館書店の『新スタンダード和英辞典』が和英辞典として初めて五十音順を採用した」という人もいるが、大修館の『新スタンダード和英辞典』は1964年出版のため、最初ではない。では、このような間違っただけの認識がなぜ発生したのか。明確に断言はできないが、その原因の一つは利用対象者の影響である可能性が考えられる。つまり、『初級コンサイス和英辞典』は中学生以上を利用対象としているため、生徒はともかく、一般読書人からの認知度が低かった可能性がある。なお、この辞書は1957年に初版が出版されると、1962年2月に70版（現在の70刷）、さらに同年10月に改訂版（第2版）が出版されていることから、ある程度人気があったものと考えられる。

5 古語辞典

一冊物の古語辞典として最大のものは確かに小学館の『古語大辞典』であるが、できれば「中田祝夫編の」と編者名を加えたほうが分かりやすい正確な記述となる。

6 古書店

一般にあまり意識されていないかもしれないが、古書店には単なる古本屋と古書肆の2種類が存在する。前者は英語で言う Second-hand Book Store であり、後者は Antique Book Store と区別される。前者の代表はブックオフである。後者は神田神保町にある専門古書店である。前者では、後者では高価で購入できない書籍が100円、200円という低価格で販売されるため非常にお買い得である。後者は専門店のため、状態は確かにいいが、値段は前者の100倍以上の値段が付くこともある。この差は、前者は特別な専門知識を必要としない販売方法をとっているが、後者は専門分野に関して研究者や学芸員並みの知識を持ち合わせた店員が判断した適正価格で販売する手法をとっている。そのため、本来なら古本屋と古書肆についても言及する必要があるのだが、ここでは残念ながら一切なされていない。

7 コンサイス判

これは三省堂の商標のため、一般的な辞書の版型としては扱えない。この点に関しては以下のサイトが参考になる。<https://kininarukotoba.hatenablog.com/entry/2013/05/27/103705>

8 挿絵

かつて黒澤充夫氏の『英和辞典の挿絵』と題するパンフレットが出版されている。これは黒澤氏が「研究社の英和辞典群のため執筆した挿画の原画展を開催する」ために作成したものである。できれば、辞書の事を扱うのであれば、このような情報も掲載されるべきであった。

9 三言語辞典

『辞典語辞典』には二言語辞典までしか扱われていないが、三言語辞典まで対象に含めるべきである。中には、三言語辞典の存在を疑問視する人もいるかもしれないが、古くはジョン・パチェラーの『蝦和英三対辞書』（1889）が出版されている。現在では三省堂から「三か国語辞典シリーズ」が出版されている。

このことから判断しても、辞書を対象にするのであれば、幅広い分野を視野に入れておく必要がある。なお、この件に関しては以下のサイトを参照することをお勧めする。

<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/features/3%E3%81%8B%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E8%BE%9%E5%85%B8>

10 サンキュータツオ

200 冊以上の辞書を辞書コレクターとあるが、正直 200 冊は多いのか疑問である。確かに辞書を専門にしていない芸能人が集めているということで話題性もあり、メディアにも取り上げられるので、立項したくなる気持ちもわからなくはないが、私見としては疑問である。その理由は、サンキュー氏よりも 30 倍の 6000 冊の蔵書数を誇る辞書コレクターである境田稔信氏については一切言及されていないからである。さらに 200 冊程度であれば決して珍しいとは思えない。筆者も辞書だけで 600 冊以上所持している。600 冊以上というのは、個人で数え始めて 600 より先の数字を数えるのが困難になって、数えるのをやめたからである。なお、境田氏は朝日新聞デジタル (<https://www.asahi.com/articles/DA3S13143148.html>) 2017 年 9 月 21 日号をはじめ数々のメディアにも辞書の蔵書数で取り上げられている著名な人物である。

11 三方金

国語辞典での三方金の最後はおそらく三省堂の GEM 国語辞典である。この辞書は 1994 年に出版されて現在も販売されている。この件に関しては以下のサイトを是非参照することをお勧めする。

<https://www.amazon.co.jp/%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%A0%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E8%BE%9E%E5%85%B8%E4%B8%89%E7%9C%81%E5%A0%82%E7%B7%A8%E4%BF%AE%E6%89%80/dp/4385136505>

12 辞書キーホルダー

英和辞典や方言辞典など、ガチャガチャの玩具用に作られたものがある。玩具用のため実際の使用に耐えることはできないが、知的玩具という意味では非常に面白い。筆者は辞書キーホルダーを 4 点（英和 3 点、方言辞典 1 点）所蔵している。トラベル英会話も入れると 5 点になる。この他に大修館書店の「光る辞書シリーズ」もあるが、筆者は辞書シリーズも全て所蔵している。

13 辞書消しゴム

辞書消しゴムには 2 種類ある。現実の出版社の辞書名を模したものから、実際の出版社が販売促進（販促）用に作ったものである。前者はガチャガチャ等の玩具用だが、後者は販促用のため、実際の出版社の名前と辞書名が入っている。なお、筆者は辞書消しゴムを 31 点所蔵している。

14 辞書編集部

出版社の中には原稿に関するチェックだけで、校正等に関して著者に委任しているケースもある。具体例は大学書林である。大学書林は様々な言語の辞典を出版しているが、必ずしもその分野の専門の編集委

員をそろえているわけではない。基本は全て著者に任せている。しかし、著者も必ずしも辞書学の専門家ではないため辞書の完成度に大きな差がある。

15 袖珍本

本書ではポケット版と同じとあるが、必ずしもポケット版と同じと言い切れないところもある。例えば、明治に出た袖珍英和節用の厚みは別としても、縦及び横の版型で言えば、三省堂のグランドセンチュリー英和辞典と同じである。ポケット版は、かつては Vest Pocket という表現があるが、これは三つ揃いのスーツのヴェストのポケットに入る程度ということである。なお、詳細は鈴木(2020)²を参照されたい。

16 字林

一般的に「字林」というと、「漢字を集めて解釈した書物。字書」（デジタル大辞泉）の意味で、漢和辞典を想起するものと考えられる。しかし、実際には『和獨對譯字林』のようにかつては一般的な辞書の意味でも使用されていた。現在では、「字林」よりも「辞林」の方が知られているものの、辞書に関する表記としては何らかの言及が必要である。補足だが、『和獨對譯字林』は簡単に説明すると現在の「和独辞典」に該当する。

17 新式

この「新式」という言葉は今ではすたれているが、かつてはよく使用された語であった。例として、春陽堂『新式節用辞典』（1895）、三省堂『新式日英辞典』（1905）、成美堂『新式初等英和辞典』（1910）、そして大倉書店『新式辞典』（1912）があげられる。『新式節用辞典』は山田美妙斎、『新式日英辞典』は新渡戸稲造・高楠順次郎、『新式初等英和辞典』は内村達三郎・佐久間信恭、『新式辞典』は芳賀矢一が編集をしている。このことから、「新式」は当時の流行的な表現だったと言える。また、山田美妙斎は原文一致体、新体詩運動で知られるは山田美妙の別名である。そのため、本書の「山田美妙」の項目では山田美妙斎も記載しておく必要がある。なお、内村達三郎は内村鑑三の弟である。

18 明解

「明解」という言葉は、『新明解国語辞典』のもとになった『明解国語辞典』を思い出す人も少なくないだろう。だが、この「明解」という言葉は、三省堂内においても国語辞典が先ではない。この言葉が三省堂内で先に使用された例は大正14年出版の『明解英和辞典』である。さらに「新明解」という言葉が使用されたのも昭和14年に出版された『新明解英和辞典』である。筆者は、前者は「昭和7年8月25日百版増訂発行版」を、後者は「昭和17年9月1日新訂673版発行」を所蔵している。このことから、もともとの「明解」と「新明解」は英和辞典で使用していたものを他の辞書にシリーズ化のような形で波及したものと考えられる。「新明解」の項目の中で例に出されていた『新明解英和中辞典』は昭和47年に出版されているが、その後昭和54年に新装版が出版されている。また、英語タイトル名は『明解英和辞典』の時は Sanseido's Pocket English-Japanese Dictionary で、『新明解和英和辞典』の時は Sanseido's New Pocket English-Japanese Dictionary と小型辞書を英語名に明記していたが、『新明解英和中辞典』になった時は

Sanseido's Intensive English-Japanese Dictionary と Intensive と英語名が変更されている。理由は、『明解英和辞典』と『新明解英和辞典』の大きさは『コンサイス英和辞典』とほぼ同じ版型であったが、『新明解英和中辞典』は『グランドセンチュリー英和辞典』などの辞書の版型とほぼ同じになったからである。そのため、英語名も Pocket から Intensive に変更せざるを得なかったと考えられる。この他に三省堂以外で「明解」をタイトルにしたものは昭和 10 年に愛之事業社から出版された『和英対照明解新辞典』がある。筆者が所持しているのは昭和 11 年 7 月 10 日 11 刷である。なお、『明解英和辞典』、『新明解英和辞典』、『新明解英和中辞典』及び『和英対照明解新辞典』の詳細については鈴木(2021)³を参照されたい。

19 節用集

この「節用」という名前は明治に入っても使用されていた。筆者が所持しているのは 1871(明治 4)年に出版された『英和節用集』と 1872(明治 5)年に出版された『西洋画引き節用集』の二冊だが、いずれも「節用集」とタイトルがついている。なお、先述した 1895(明治 28)年に出版された山田美妙斎の『新式節用辞典』にもあるように、明治期においては「節用」と「辞典」が併用されていたことも指摘するべきであった。

20 大修館書店

現在、大修館は『ジーニアス英和辞典』が知られているが、もともと英語に関しては『スタンダード和英辞典』で知られていた。そのため、大修館の英語辞書に言及するのであれば、『スタンダード和英辞典』を記述する必要がある。

21 豆辞書

本書では「豆辞典と同じ」と書いてあるが、必ずしもそうとは言い切れない。例えば、『言葉の豆辞典』といった書籍は版型でいくと、文庫本や新書版も存在する。そのため、この類の「豆辞典」は「豆知識」の言い換え表現として考えられる。これに対し、豆辞書といった場合は、豆本タイプの辞書とのみ考えられる。そのため「豆辞典」と「豆辞書」に分類して記述しなくてはならない。また、豆本とは今井田(1976)によれば「このように、人によって豆本の大きさについての考え方が違うのであるが、だいたい四インチ(一〇・六ミリ)以上のものは豆本とは言わず、豆本としては二インチ半(六三・五ミリ)以下がのぞましい大きさだと云える。」(P77)と定義されている。なお、筆者はこの項目で言及されているベビ辞典に関しては、『英和』『和英』『新』『漢和』の四種類を所蔵している。なお、このベビシリーズは総革装と紙装の二種類も存在しており、筆者はそのいずれも所蔵している。

22 『ローマ字で引く国語新辞典』

この辞書の企画は福原麟太郎主導で出版されたものである。その根拠は出版元が英語辞書の老舗である研究社であること、そしてこの辞書の実質的な著者である清水阿や氏が福原麟太郎の高弟だからである。この清水阿や氏は女性で、この 2 年後に出版された研究社の『新和英大辞典第 3 版』の執筆者でもある。また、清水氏は東京学芸大学教授になり、後に大東文化大学文学部教授になった人物である。専門はアー

サー王を中心とする中世英文学である。日本ではよく誤解されるが、シェイクスピアは日本の安土桃山から江戸時代初期に該当するので、中世ではなく、近世、近代文学である。筆者は大学院時代に清水阿や氏からチョーサーの指導を受けた。また、研究社ではこの『ローマ字で引く国語新辞典』より以前に宮崎静二による『日本語辞典』（1959）という日本の事象をアルファベット順のローマ字見出しで、英語で説明している辞書が存在する。さらに、国語辞典に英訳をつける試みは旺文社から出版された『英訳付き国語総合新辞典』（1990）も存在する。なお、研究社はいわゆる国語辞典を出版していないことから、今回は立項の対象外となったのかもしれないが、他の出版社が記載されていることから判断すると、立項の対象にすべきである。補足だが、筆者はこの辞書の初版を所蔵している。

23 書名について

筆者の知っている限り、三省堂は同じ書名で、全く関連性を持たせずに使用した例が2回ある。1回目は『新訳和英辞典』である。これは井上十吉が明治42年に出版したのが最初だが、昭和4年に三省堂編輯所が編集した同名の辞書が存在する。しかし、この2冊の関連性は全くない。二回目は、『センチュリー英和辞典』である。この『センチュリー英和辞典』はもともと、昭和8年に三省堂編輯所が編集した辞書であるが、それとは別に昭和62年に『ニューセンチュリー英和辞典』という英和辞典を出版している。当然、書名に「ニュー」が付いているので、以前出版された『センチュリー英和辞典』と何らかの関連性があるように思われるが、全く関係性はない。このことは「まえがき」に以下のように記述されている。

「先に我々は英語学習者のために「グローバル英和辞典」を世に送ったが、幸にして多くの方々からご好評を戴いた。しかし、中学・高校における英語学習の現状を考慮するならば、なお改良すべき点が多々あることに思いをいたし、上記辞典を母体としながらも新たな構想の下に、我々は高校生諸君の学習レベルに一層融合した辞典の編集を企画した。」

このことから、三省堂では全く異なる状況においても同名の書名にすることがある。なお、詳細に関しては鈴木（2020）⁴を参照されたい。

24 その他の辞書に関する書籍について

本書には掲載されていないが、辞書に関連した書籍は数多く出版されている。参考までにいくつか以下に紹介しておく。

- (1) 加藤康司『辞書の話』、中公新書、1976
- (2) 福本和夫『私の辞書論』、河出書房新社、1977
- (3) 杉本つとむ『国語辞書を読む』、開拓社言語文化叢書、1982
- (4) 竹林滋・千野栄一・東信行編『世界の辞書』、研究社、1992
- (5) 室伏哲郎『この辞書・辞典がおもしろい!』、トラベルジャーナル、1999
- (6) 橋本治『橋本治が大辞林を使う』、三省堂、2001

- (7) 清久尚美『辞書の図書館』（駿河台出版社）、2002
- (8) 高島俊男『おことばですが…④広辞苑の神話』、文春文庫、2003
- (9) 安田敏朗『辞書の政治学』、平凡社、2006
- (10) 水野靖夫『「広辞苑の畏」』、祥伝社新書、2013
- (11) 時田昌瑞著『辞書から消えたことわざ』、角川 SSC 新書、2014
- (12) 田澤耕「＜辞書屋＞列伝」、中公新書、2014
- (13) 永江朗『広辞苑の中の掘り出し日本語』、新潮文庫、2014
- (14) 今野真二『辞書を読む』、平凡社新書、2014
- (15) 円満宇二郎『漢和辞典的に申しますと』、文春文庫、2017
- (16) 永島道夫『言葉の大海—『大言海』を愉しむ』、文芸社、2017
- (17) 今野真二『『広辞苑』を読む』、岩波新書、2019

中には本書の著者の誕生以前及び幼少期に刊行されたものもあるが、本書が「辞典」に関する語を扱うのであれば、なるべく多くの情報を網羅的に掲載する必要がある。なお、筆者はこれ以外にも辞書関連の書籍を多数所蔵しているが、本稿の趣旨から外れるため省略する。

まとめ

以上、本書の内容で気になる点が 24 点あったが、共通して言えるのは取り上げる基準が明確ではない点である。例えば、国語辞典の歴史を考えていくと、近藤真琴の『ことばのその』⁵は取り上げるべきであるが、本書では一切触れられていない。この基準をより明確にすると本書はもっと有益な書になるだろう。ただし、辞書の事を全く知らない人にとっては非常に有益な情報が掲載されているのも事実である。ぜひ、辞書に関心のある人にお勧めする一冊である。

注

- 1 学長プロフィール <https://www.u-nagano.ac.jp/about/message/>
- 2 鈴木聡著「辞書の大きさの概念に関する一考察」 pp2-4、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 42 号』, 2020
- 3 鈴木聡著「辞書のネーミングとロゴに関する一考察」 pp22-25、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 43 号』, 2021
- 4 鈴木聡著「辞書のネーミングとロゴに関する一考察」 pp17-19、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 43 号』, 2021
- 5 1981 年に三省堂から出版された山田忠雄著『近代国語辞書の歩み上』に「僅僅一四、一五〇を載せるに過ぎないが、和装である点を除けば総て創意に満ち、しかも語釈の態度は雅俗対象辞書のそれや分注主義から完全に脱却して、近代的体制を整えるに至った」(P519)とあることから、この辞書については言及する価値があるものと考えられる。

参考文献

- 1 岩隈直編『新約ギリシャ語逆引き辞典』、山本書店、1977
- 2 鈴木聡著「辞書の大きさの概念に関する一考察」、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 42 号』、2020
- 3 鈴木聡著「辞書のネーミングとロゴに関する一考察」、『鳥羽商船高等専門学校紀要第 43 号』、2021
- 4 山田忠雄著『近代国語辞書の歩み上』、三省堂、1981
- 5 今井田勲著『私の稀覯本＜豆本とその周辺＞』丸の内出版、1976

翻訳 キャサリン・マンズフィールド作『園遊会』

“The Garden Party” by Katherine Mansfield.

鈴木 聡

Satoshi Suzuki

1 はじめに

キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield: 1888 年 10 月 14 日 - 1923 年 1 月 9 日) は本名をキャスリーン・マンズフィールド・ビーチャム (Kathleen Mansfield Beauchamp) と言い、ニュージーランドを代表する「意識の流れ」の手法を用いた作家であり、主としてイギリスで作品を発表してきた。そのため、通常マンズフィールドの作品はイギリス文学として扱われる。筆者が初めてマンズフィールドの作品に触れたのは大学の学部 3 年生の授業の時だった。それまでイギリス文学作品といえば、高度な文体の作品ばかりという印象だったが、マンズフィールドの作品は比較的わかりやすく、しかも短編だったことに印象づけられた。その後、マンズフィールドについて調査をしたが、日本でもかなり古い時期から翻訳や注釈書があることに気がついた。とはいっても、元来文学作品にあまり興味がないこともあり、以後そのまま忘れていた。しかし、先日、偶然、新水社から出版されていた『マンズフィールド全集』(1999) の翻訳、中でもマンズフィールドの代表作である『園遊会』を読んだ。その結果、この『園遊会』の翻訳が非常にわかりにくかった。とはいっても、もしかしたら、この作品は筆者が考えているよりもはるかに訳しにくいのではないかと考えさせられた。そこで、これまで文学作品の翻訳経験がない筆者がどこまで訳出できるのかという考えからマンズフィールドの文学作品の代表作であるこの『園遊会』の翻訳に取り組んだ。また、本稿では訳出に当たり、気になる箇所若干の注をつけた。ぜひ、ご感想を頂ければ幸いである。なお、本書は Penguin 社の Twentieth Century Classics シリーズの Katherine Mansfield “The Garden Party and Other Stories” (1992) を底本としたことをあらかじめ断っておく。

2 翻訳

まさに¹天気は理想的であった。たとえ注文することができたとしたって、これほどふさわしい日を持てはしなかっただろう。風もなく、暖かで、雲一つない空。時おり初夏にみられる明るい黄金色の靄だけが、空の青さをおおっていた。庭師が朝早くから起きて、芝を刈り入れ、掃除もすませているので、芝生も、そしてヒナギクが植えられていたほんのり暗い平らなバラ型の花壇も光り輝いているようであった。バラは園遊会で人々に印象づけられる唯一の花—そう、だれもが知っている唯一の花—であるということを自覚しているようにさえ感じられた。数百、まさに文字通り、数百本というバラが、一夜にして咲いたのであった。そして緑の繁みはまるで大天使に訪問されたかのようにこうべをたれていた。

朝食がまだすまないうちに、職人たちがテントを張りにやってきた。

「お母さま、どちらにテントを立てたほうがよろしいかしら。」

「あら、私に尋ねてもダメですよ。今年はあなたたちに全部任せると決めたのですから。お母さまだということとは忘れなさい。今年は大切なお客様として扱ってちょうだいね。」

しかし、メグはどうしても職人たちのところに行って指図することはできなかった。彼女は朝食前に髪を洗い、濡れた巻き毛が両頬にはりついていて、頭に緑色のタオルをターバン風にまいて、坐ってコーヒーを飲んでいた。おしゃれ好きなジョーズはいつものようにシルクのペディコートと着物風のジャケット

を着て降りてきた。

「ローラ、あなたが行きなさいよ。なんて言っただってセンスがいいんだから。²」

ローラはバタートーストを片手に持ち、庭園へと走っていった。外で食べる言い訳ができるのは嬉しかったし、何よりも、物事の段取りを組むのが好きだったから。というより、自分はほかの誰よりも段取りがうまいといつも思っていたから。庭の小径にラフな格好をした4人の男性³が集まって立っていた。彼らはキャンバスを巻き付けた棒を持っており、背中に道具を入れた大きな袋を背負っていた。4人全員がたくましそうに見えた。ローラはバタートースト⁴を持ってこなければよかったと思ったものの、それを置くような場所はどこにもないし、今さら捨てるわけにはいかなかった。彼女は顔を赤らめていたが、キリっとして見える⁵ように、近眼のふりをして男たちに近づいた。

ローラは母親のまねをして「ごきげんよう」と言ってみたが、妙に気取って聞こえたので、恥ずかしくなり、幼い女の子のような声でつぶやいた。

「あの一その、テントのことでいらしたの？」

「そうですよ、お嬢さん。そのことでおうかがいに来たんです。」とその男たちの中で一番背が高くて、細身の、そばかすのある男性が、道具袋を背負って、麦わら帽子をうしろに押しやりながら、ローラに微笑みかけた。彼のほほえみはとても気さくで、親しみやすかったので、ローラは元気を取り戻した。なんて素敵な瞳をした人なんだろう。小さいけれど、深い紺碧色の瞳をしているわ。しばらくしてから、他の人たちの顔を見てみた。彼らも微笑んでいた。「元気をだしなさって。とって食ったりはしやしませんから。⁶」そう彼らの笑顔は言っているようだった。

なんて素敵な職人たちなんでしょう。そして、なんて素敵な朝なの。

ローラは朝のことなど気にしてはいられなかった。とにかく、事務的にやらなくては。そう、テントだ。

「それではユリの咲いている芝生のあたりはいかがかしら。よろしいんじゃないくて？」

そういって、ローラはバタートーストを持っていないほうの手で、ユリの咲いている芝生の方を指さした。職人達は振りかえって、その場所をジッと見つめていた。小太りの職人は下唇を突き出し、背の高い職人は眉をひそめた。

「あまりよくありませんな。人目につきませんよ。お判りでしょうが、テントというものはですね、— とうとうと背の高い職人は気さくな物腰で、ローラの方を振りかえった—「人目のつくところにバーン⁷と置いておきたいわけでしょう。いかがです？」

お行儀よくしつけられている⁸ローラとしては、職人の目の前にバーンとおくという言いかたは失礼なように感じたが、彼の言いたいことはよくわかった。

「テニスコートのすみはいかがかしら。でも、バンドもあの場所にはいる予定ですよ。」ローラはさりげなくいった。

「ウーン。バンドが入る予定なんですか。」別の職人が言った。

彼は青白い顔をしていた。黒い瞳でテニスコートを見まわしている顔がひどくやつれているように見えた。彼は何を考えていたのだろうか。

「でも、とても小さなバンドですよ。」ローラはそっと言った。

バンドが本当に小さければ、おそらく、この職人も気にはしないだろう。だが、その背の高い職人はさ

えぎって、こういった。

「あそこを見てください。おじょうさん。あの場所。あの木の反対側。向こうの。あそこなんかびったりですぜ。」

カラカの前ですって？そんなことをしたらカラカは隠れてしまうじゃない。カラカは大きくてつややかな葉を身にまとい、しかも黄色く実った房をつけてとてもかわいらしかった。無人島にでも生えていそうな木で、気高く、孤独で、葉と実を太陽に向かって静かに高く掲げていた。そんな木がテントで隠されなければならないのかしら。

そうせざるをえなかった。すでに職人たちは棒を肩にかついで、その場所に向かっていた。背の高い職人だけがその場に残されていた。彼はしゃがみ込んでラベンダーを摘むと、それを親指と人差し指でもって鼻に近づけ、匂いをかいでいた。ローラはそのしぐさを見て、彼がそんなことを好きだということ、つまりラベンダーの匂いが好きだということにびっくりしてカラカのことなんかどうでもよくなってしまった。自分が知っている男性で、一体どれくらいの人がこんなことをするだろう。なんてすてきな職人たちなのだろう。ローラはそう思った。いっしょにダンスを踊り、日曜日の夕食にやってくるおバカな⁹男の子たちより職人たちとお友達になれないかしら。こういう人たちの方がずっと気が合うに違いないわ。

その背の高い職人が封筒のうらに輪でくくり、ぶらさげておくものの絵を描いているのをみながら、このばかげた階級差別は間違っているとの結論に達したのだった。もっとも、彼女はそんなことは感じてはいなかった。全然、みじんも感じたことはなかった。木槌のコンコンという音が聞こえてきた。口笛をふいているものもいれば、「そっちは大丈夫かい、相棒¹⁰？」と叫んでいる人たちもいた。「相棒」なんて良い響きなのでしょう。—自分がいかに楽しくて、くつろいでいて、しかもこのばかげた風習を軽蔑しているかをその背の高い職人にわかってもらうために、ローラは小さな絵をみながらバタートーストを大きく一口かじった。ローラは自分がまるで労働者階級の女の子になった気がした。

「ローラ、ローラ、どこにいるの？電話ですよ。ローラ。」家の中から大きな声が聞こえてきた。

「今行きます。」ローラは走って行って、芝生を飛び越え、小径にそってかけていくと、階段を上がり、ベランダを横切って、ポーチへと入っていた。玄関では父親とローリーが事務所にでかけるために帽子にブラシをかけていた。

「ねえ、ローラ今日の午後までに僕の上着をちょっと見ておいてもらえないかな。プレスが必要かどうか見てほしいんだ。」ローリーが早口で言った。

「わかったわ。」ローラは答えた。突然、ローラは自分を抑えることができなくなった。彼女はローリーのところに駆け寄り、小さく、そしてすばやく抱きしめた。「ねえ、わたし¹¹、パーティーが大好きなの。お兄様は？」息を切らしながらローラは言った。

「もちろんさ。」ローリーは優しく、男の子らしい声で答えると、妹を抱きしめ、やさしく肩を押し戻した。「電話のところに急ぎなさい。ね、ローラ。」

電話「もしもし、もしもし。あら、キティ。ごきげんよう。昼食にやってくるの？ええ、もちろん大歓迎よ。本当にありあわせの食事なのよ。—あまりたいしたことのないサンドイッチ¹²とシェルタイプのメレンゲ菓子の出来損ない¹³といった残り物よ。ええ、本当に素敵な朝じゃない？白のドレスにするの？うん、その方がいいと思うわ。ちょっと待ってね。電話を切らないでね。母が呼んでいるの。」ローラは坐ったま

ま後ろを向いた。「なに、お母様聞こえないわ。」

シェリダン夫人の声が階下に流れるように聞こえてきた。「キティに先週の日曜日にかぶっていらした可愛らしい帽子をかぶってらっしゃって伝えてね。」

「母がね、先週の日曜日にかぶっていた、あの可愛らしい帽子をかぶってらっしゃって言っているわ。うん。一時にね、じゃあね。」

ローラは受話器を置くと頭の上に思いきり手をかざし、深呼吸をしてから「フーッ」とため息をつく、ローラはすぐに勢いよく椅子から立ち上がった。彼女はじっと耳を澄ましていた。家じゅうのドアが開いているようだった。家の中は柔らかな急ぎ足と、飛び交う声で活気に満ちていた。台所へ続く緑色のビーズをあしらったドアが開いていたが、パタンという鈍い音をたてながらしまった。長い時間、あざわらうような音が聞こえてきた。それは重量感のあるピアノが固くなってしまったキャストを使って動かされていた音だった。でも、このそよ風。気がついて立ちどまってみたら、そよ風というものは、いつもこんな気持ちいいものだったのかしら。かすかなそよ風が一番上の窓からドアの方へ通り抜け、追いかけてこをして遊んでいた。太陽から差し込んできた可愛らしい二つの点が、インク壺とシルバーの写真たてに降り注ぎ、まるで遊んでいるかのようにであった。可愛らしい小さな点。特にインク壺のふたの上に重なっている点はとてもかわいらしく、温かかった。小さくて、暖かな銀色の星。ローラはその銀色の星にキスをしたいくらいだった。

玄関のベルが鳴ったかと思うと、階段上で、サディのプリント模様のスカートの擦れる音が聞こえてきた。男の人がぼそぼそとささやくと、サディは「全く存じ上げていませんわ。お待ちになってください。シェリダン夫人におたずねしてきます。」と言葉を選びながら、返事をしていた。

「どうかしたの、サディ。」ローラが玄関のところにやってきた。

「花屋でございます。ローラお嬢様。」

確かに花屋だった。ドアの内側に大きくて浅いトレイがあって、その中にピンク色のユリの鉢が所せましと並べられていた。ほかの種類は一切なかった。ユリだけ。しかもカンナユリ。大きくて、ピンク色の花。キラキラと光り、明るい深紅の茎はびっくりするくらい輝いていた。

「まあ、サディ。」ローラは言った。それはまるでうめき声にも似たような声だった。ローラはカンナユリが放つまばゆいばかりの光で全身を温めるかのようにしゃがみこんだ。それはユリが指、唇、そして胸から這い上がってくるような感じであった。

「何かの間違いね。誰もこんなに頼んでいないわ。サディ、お母様を見つけてきて。」ローラは寂しげに言った。

だが、その瞬間シェリダン夫人が現れた。

「間違いじゃないわ。そう、私が頼んだの、素敵じゃなくて？」シェリダン夫人は穏やかな口調で言うと、ローラの腕に手を置いた。「昨日花屋の前を通ったら、ショーウィンドウにカンナユリの花を見かけたの。そうしたら、一生に一度くらいカンナユリでいっぱいにしてもいいかしらって突然ひらめいたの。園遊会がいい口実にもなるし。」

「でもお母様は、一切何もなさらないって、おっしゃっていたじゃない。」ローラは言った。

サディは既にどこかに行ってしまうていた。花屋の男はまだバンに乗って、外で待機していた。ローラは

母の首に手を回し、やさしく、とてもやさしく、母親の耳たぶをかんだ。

「あら、ローラ、融通の利かないお母さんなんて嫌いじゃなくて？ そんなことしないの。花屋が来ているわよ。」

花屋は別のトレイに、さらにたくさんのユリを運んできた。

「全部運んでちょうだい。ドアの内側と、それからポーチの両側にもね。おねがいね。」

シェリダン夫人は言った。

「よろしいかしら、ローラ？」

「わかりましたわ。お母さま。」

リビングでは、メグとジョーズ、そして人の好い小柄なハンスが何とかピアノを動かすことに成功した。

「さてと、このソファを壁にくっつけるんだとしたら、椅子以外は全部部屋から運び出さないといけないわね。どうかしら？」

「そうね。」

「ハンス、ここのテーブルを全部喫煙室に持って行って、それから絨毯についているテーブルの脚のあとをけすために掃除機をかけておいてちょうだい。それと、ちょっとまっけて、ハンス。」

ジョーズは召使いたちに指図をするのが好きだったし、かれらもジョーズの言うことを聞くのが好きだった。ジョーズは召使いたちに劇に参加しているような気分させていた。

「お母様とローラにすぐにここに来るように言ってちょうだい。」

「承知いたしました。ジョーズお嬢様。」

ジョーズはメグの方にふりかえると次のように言った。

「ピアノの音の調子を聞いてみたいわ。今日の午後歌うように言われるかもしれないんですもの。『この世はかなしきもの』を歌って、ピアノの調子を見てみましょう。」

バーン。タ・タ・タ・ターン。ピアノが突然情熱的になりだすと、ジョーズの表情も一変した。ジョーズは物悲しげに謎めいた感じで二人を見つめた。

この世はかなしきもの

涙一ためいき

愛とは移ろいやすいもの

この世はかなしきもの

涙一ためいき

愛とは移ろいやすいもの

そして…去りゆくもの。

だが、「去りゆくもの」という言葉のところで、ピアノはこれまで以上に、もの悲しい音色だったのに、ジョーズの表情は明るく、とても歌とは正反対の笑顔であった。

「いい声じゃなくて？ お母さま。」 そういつて、ジョーズはにっこり微笑んだ。

この世は悲しきもの。

夢もはかなく消えてゆく。

夢一呼び覚ましなが

突然、サディが歌の途中で声をかけてきた。

「何事なのサディ。」

「申し訳ございませんが、奥様、シェフ¹⁴がサンドイッチ用の旗が欲しいと申しまして。」

「サンドイッチ用の旗ですって、サディ？」シェリダン夫人はポカーンとした口調で繰り返した。その様子から、娘たちは母親がサンドイッチ用の旗を用意していなかったことが分かった。

「そうね、10分したら、もっていかせるって、言ってちょうだい。」

サディはその場を立ち去った。

「それではローラ、私と一緒に喫煙室にいらっしやい。封筒の裏のどこかにサンドイッチの種類を書いていたはずなの。それを私の代わりに清書してちょうだい。メグ、すぐに二階に行って、そのあたりのぬれたやつをとってらっしやい。ジョーズ、すぐに着替えてらっしやい。おわかりになるわよね？さもないと、さもないと、今晚お父様がおもどりになったら、言いつけますからね。そう、それからジョーズ、厨房に行くようなことがあったら、シェフをなだめすかしておいてね。今朝の彼女はすこぶるご機嫌ナナメだから。」母親は急いで言った。

封筒はやつとのことで食堂の置時計の裏側で見つかったが、シェリダン夫人はそれがなぜそこに隠してあるのかわからなかった。

「あなたがたの誰かが私のバッグから勝手に取り出したにちがいないわ¹⁵。だって、私は忘れたりしないんですから。えーと、クリームチーズにレモンカード。そこまでよろしいかしら？」

「はい。」

「卵とそれからー」シェリダン夫人は封筒をかざしてみた。「ねずみっていう字がみえるけど、そんなはずはないわよね。」

「お気に入りのオリーブじゃないかしら。」肩越しに覗いていたローラが言った。

「そう、もちろんオリーブよ。全くなんて組み合わせかしら。卵とオリーブだったわ。」

二人は仕事がやつと終わり、ローラはそれらを持って台所へと向かった。ジョーズがシェフをなだめすかしていたものの、それほどご機嫌ナナメというほどには見えなかった。

「こんなに上品なサンドイッチは見たことがないわ。全部で何種類あると言ったの？15種類ですって？」

「15種類でございます。ジョーズお嬢様。」

「まあ、あなたって本当に素晴らしいわ。」

シェフは長いサンドイッチ用の包丁でパンの耳をかき集めながら、満面なほほえみを浮かべた。

「ゴドバー店の者が参りました。」食料品倉庫から身を乗り出しながら、サディが報告した。

サディは窓から店員をみていたのだった。それはシュークリーム¹⁶が来たということだった。ゴドバー店はシュークリームで有名だった。誰も自宅でシュークリームを作ろうなどとは思ひもしなかった。

「あんた、それを全部家の中に入れて、テーブルの上に並べてちょうだい。」

シェフがサディに命じた。サディはシュークリームを家の中に運び、ドアの方へと向かった。もちろん、ローラとジョーズはそのようなものが好きだということにはあまりにも大人になりすぎていた。それでも、そのシュークリームが美味しそうであることには変わりはない。シェフは余分な粉砂糖をはらいのけな

がら、シュークリームを並べ始めた。

「これを見ると今までのパーティーのことを思い出さない？」ローラは言った。

「そうね。」ジョーズはそっけなかった。というのも、彼女は過去のことを振り返るのが嫌いだったからだ。

「とてもきれいで、ふわふわしているように見えるわね。」

「おひとついかがですか。お嬢様がた。奥様はまだご存じありませんから。」シェフは優しい口調で言った。

とんでもない。朝食後にすぐシュークリームを食べるだなんて。そんなことを考えるだけで、みぶるいした。だが、2分もすると、ジョーズもローラも生クリームだけが引き出すことのできる、とろけるようなうっとりとした表情を見せながら、指をなめていた。

「お庭に行きましょうよ。裏口から行くわね。どのようにして職人たちがテントを立てているか見たいの。本当に素敵な人たちよ。」ローラは言った。

しかし、裏口はシェフ、サディ、ゴドバー店の店員、そしてハンスでふさがっていた。何かが起こったのだ。

「トウクッ、トウクッ、トウクッ」まるで興奮した雌鶏のようにシェフが舌打ちをした。サディはまるで歯が痛んでいるかのように頬を叩いていた。ゴドバー店の店員だけが楽しんでいるように見えた。それは彼が持っていた話だった。

「どうかしたの？何かあったの？」

「恐ろしい出来事があったんです。ある方がなくなっただんです。」シェフが言った。

「人が亡くなったんですって！どこで？どんなふうに？いつ？」

しかし、ゴドバーの店員は自分が持ってきた話を横取りされたくなかった。

「この真下に小さな家々があるのをご存知ですか、お嬢さん。」

知っているかですって？もちろん知っていた。

「そこに荷車屋のスcottという、若い男が住んでいたんです。そいつの馬が今朝ホーク通りのかどっここで、牽引機関車にびっくりして、頭から真っさかさまに投げ出され、死んじゃったんです。」

「死んだですって！」ローラはゴドバー店の店員の顔を見つめた。

「周りのみんなを抱きかかえたときには、もう息がありませんでした。俺がここにやってくるときには連中がそいつの亡骸を家に運んでいたんです。」

ゴドバーの店員は楽しそうに言った。それから彼はシェフに次のように言った。

「やつにはかみさんと、5人のガキがいたんだよ。」

「ジョーズ、こっちに来て。」ローラは姉のそでをつかんで、台所を通って、緑色のビーズをあしらったドアの反対側へと引っ張っていった。

その場でローラは間をおいて、ドアに持たれた。

「ジョーズ！ すべてを取りやめにしたらどうかと思うんだけど。」ローラはこわばって言った。

「全部を取りやめにするですって、ローラ？ どういうこと？」ジョーズは驚きのあまり叫んだ。

「もちろん、園遊会を取りやめにするっていうことよ。」なぜジョーズはわからないふりをするのかしら？

だが、ジョーズはさらに混乱していた。

「園遊会を取りやめるですって?ねえ。ローラばかなことをいわないで。もちろん、そんなことできやしないわよ。誰もそんなことを望んでもいないわ。無理を言わないで。」

「でも、正門のすぐ前で、人がなくなったのに園遊会なんてできっこないわ。」

確かにそれは無茶だった。というのも、その小さな家々は屋敷のところに続く高台の急な斜面の一番下の小道にあって、建物の間を広い道がつないでいた。実際、屋敷とその小さな家々は近すぎた。その家々はものすごく目障りだったし、そもそもその地域に住む権利もなかった。チョコレート色に塗られた小さくみすばらしい家ばかりであった。小さな庭には、キャベツの茎と病気の雌鶏、トマトの空き缶しかなかった。煙突から流れ出る煙にさえも貧しさがこびりついていて、ちっぽけなボロ雑巾のような汚らしい煙。それはシェリダン家の家からまっすぐ立ちのぼる銀色の羽毛のような煙柱とは全く違って、洗濯女が小道の家々のところで暮らしており、掃除をしていた。その他に、靴の修理屋と玄関を小さな鳥かごで埋め尽くした男もその小道の家々のところで暮らしていた。子供たちも大勢いた。シェリダン家の娘たちが幼かったころには、その地に足を踏み入れることは禁止されていた。なぜなら、言葉遣いは最悪だし、それに何をされるかわからなかったからだ。大人になってからはローラとローリーは散歩の途中でその小道を通り抜けていた。そこは汚らしく、じめじめしていた。二人は身震いしながら、その場を通り抜けた。しかし、あらゆるところに行かなければならないものだし、どんなものでも見なければならなかった。だから、二人はそこを通り抜けてみたのだった。

「バンドの演奏がそのかわいそうなご婦人にどのように響くか考えてみてごらん下さい。」ローラは言った。

「ねえ、ローラ」ジョーズは本気でイライラし始めた。「誰かが交通事故に会うたびにバンドの演奏を中止にしていたら、息苦しい人生になってしまうわよ。私もあなたと同じように気の毒だとは思っているわ。同情もしているわ。」ジョーズの目は冷ややかであった。

「感情的になったって、酔っ払いの職人が生き返るわけじゃないのよ。」ジョーズは優しく言った。

「酔っ払いですって!誰がその人が酔っ払っていたっていったの?」

ローラはジョーズに怒りをぶつけた。彼女はこのような状況の時に言う決まり文句を言った。

「直接お母さまに申し上げてくるわ。」

「どうぞご勝手に。」ジョーズはさとするような優しい口調で言った。

「お母様、お邪魔してかまいませんかしら。」

ローラは大きなガラス製のドアノブを回した。

「もちろん、かまわないわよ。あら、どうしたの?そんなに顔色を変えて。」

シェリダン夫人は鏡台からふりかえった。彼女は新しい帽子を試着しているところだった。

「お母様、ある男性が殺されましたの。」ローラは始めた。

「うちの庭園ではないでしょうね?」

「全然、違います。」

「まあ、びっくりさせないでちょうだい!」シェリダン夫人はホッと深いためいきをついて、その大きな帽子を膝の上に置いた。

「でも、お母様、お話をお聞きになってください。」息をつく間もなく、途中息を切らせながら、ローラはその身もよだつ話をした。

「もちろん、パーティーは中止ですわよね。」ローラは訴えた。「バンドもお客さんも到着しています。皆さんが、私たちに事情をお聞きになると思いますの、お母様。本当に近所のことですし。」驚いたことに、母親はまるでジョーズと同じような態度をとった。しかも、母親はそのことをたのしんでいるように見えたので、さらに耐え難かった。母親はローラの話を見真面目に聞こうとはしなかった。

「ねえ、ローラ、常識で考えてみたてちょうだい。私たちがそのことを聞いたのはほんの偶然なの。もしそこで、誰かが普通に死んでいたら、しかもあんなみすぼらしい、小さい穴倉のようなところにどうやって暮らしているのか私には想像もつかないのだけれど、パーティーはやるべきではなくて？」

ローラはそれに対し、「わかりました」と答えなければならなかったものの、それは絶対に間違っていると感じていた。ローラは母親の部屋のソファの上に腰を下ろし、クッションのフリルのところをつかんだ。

「お母様、私たちって、ものすごく薄情じゃないかしら。」ローラはたずねた。

「ローラ！」シェリダン夫人は帽子を持ちながら、立ち上がって、ローラのところにやってきた。ローラが止める間もなく、シェリダン夫人はその帽子をローラにかぶせて言った。

「その帽子はあなたのものよ。あなたにピッタリだわ。私には若すぎるわ。こんなに可愛い姿を今まで見たことがないわ。」そう言って、シェリダン夫人はローラに手鏡を渡した。

「でも、お母様」ローラはなおも言った。ローラは自分の姿を見ようとせずに鏡をそむけた。今度はシェリダン夫人がジョーズのように機嫌を損ねてしまった。

「本当にどうしようもない子ね、ローラ。あの手の人たちは私たちにパーティーを中止にしてもらおうだなんて思っていないんですよ。それに、今あなたがしているように、みんなの楽しみをやめるなんて、あんまり感心できないわ。」シェリダン夫人は冷たく言い放った。

「納得できませんわ。」ローラはそういうと、シェリダン夫人の部屋から足早に立ち去り自分の部屋へと入っていった。偶然にも、彼女が眼にしたものは黄金色のヒナギクと長くビロードのリボンで縁どられた帽子をかぶった、鏡の中にうつる可愛いローラ自身の姿であった。ローラは自分がこのような姿に見えると今まで考えたこともなかった。お母様は正しいのかしら。ローラはそう思った。今となっては、母親が正しいことを願っていた。私って、世間知らずなのかしら。多分そうなのだ。ほんの一瞬、あのあわれな女性と小さな子供たちのこと、そして自宅へ運ばれた遺体のことが頭をよぎった。が、それは全て新聞記事の中の写真のようにあいまいで、非現実的なことのように思われた。パーティーが終わってから、もう一度思い返してみよう、とローラは心を決めた。それが一番いい考えであるように思えた。

昼食は一時半に終わった。二時半までにはパーティーの準備はすべて整った。緑色の衣装を着たバンドが到着し、テニスコートの隅で固まっていた。

「ねえ、うまく言えないけれど、あの人がちって、カエルみたいじゃない？葉っぱの真ん中に指揮者を立たせて、池のまわりにバンドを配置したらよかったのに。キティ・メイトランドは声を震わせて言った。

ローリーが到着し、衣装を着替えに行く途中でローラとキティに声をかけた。ローリーを見てローラはもう一度あの事故のことを思い出した。ローラはローリーと話がしたかった。もし、ローリーが他の人たちと同じ意見であるならきっと正しいに違いない。そこで、ローラはローリーの後について行って、玄関

に入っていた。

「ローリー！」

「やあ！」ローリーは階段を上りかけていたが、振り返ると突然、頬を膨らませて、目を丸くしてジッとローラを見つめた。

「ねえ、ローラ、すごく可愛く見えるよ。ものすごくすてきな帽子だね。」ローリーは言った。

「本当？」ローラはそう言って、ローリーを見上げてほほ笑んだ。結局、ローリーに事故の件は話さなかった。間もなく招待客たちが次から次へとやってきた。バンドは演奏を始めた。臨時にやとわれた給仕たちが屋敷からテントの方へ走っていった。見まわすと二人連れがいて、ゆっくり歩いていたり、身をかがめて花を観賞していたり、挨拶をしていたり、芝生の上を歩き回ったりしていた。彼らはまるで、この日の午後どっかへ行く途中でシェリダン家の庭園に舞い降りた美しい鳥のようだった。幸せな人たちといっしょにいられるということは、なんと幸せなことなのだろう。握手をしたり、頬を押しつけあったり瞳を見つめてほほ笑むというのは。

「まあ、ローラ、とっても元気そうね。」

「帽子がよくお似合いね。」

「ローラ、まるでスペイン人のように見えるわよ。今まで見た中で一番すてきよ。」

すると、ローラは顔を赤らめながら、優しく返事をした。

「お茶はお飲みになりましたか。アイスクリームはいかがですか？パッション・フルーツのアイスクリームはとっても美味しいんですよ。」

ローラはシェリダン氏のところに駆け寄って、次のように頼んだ。

「ねえ、お父様、バンドの方々にも何か飲み物を差し上げたらいかがかしら。」

そしてすてきな午後はゆっくりと熟し、色あせ、花びらを閉じていった。

「いままでにこんなに素敵な園遊会はなかったわ…」

「大成功ですな…」

「全く、素晴らしい…」

ローラはお見送りをする母親を手伝っていた。二人とも全員の姿が見えなくなるまでポーチに並んで立っていた。

「やっと全部終わったわね。ホッとしたわ。」シェリダン夫人は言った。

「ローラ皆を集めてちょうだい。戻って、コーヒーでも飲みましょう。とにかく疲れたわ。本当に大成功だったわ。でも、パーティーはもういいわ。なぜ、あなたたちはパーティーなんてしたがるのかしら。」それから全員が人気のなくなったテントの下に腰かけた。

「サンドイッチをどうぞ、お父様。私が旗を書いたのよ。」

「ありがとう」シェリダン氏が一口食べると、サンドイッチはなくなってしまった。シェリダン氏はもう一つサンドイッチを食べた。

「今日起こった不幸な事故のことを聞いていないようだね。」シェリダン氏は言った。

「あら、存じていましたわ。もう少しでパーティーがだいなしになるところでしたのよ。ローラがパーティーを延期しようなんて言い出すものですから。」シェリダン夫人は手を挙げて答えた。

「お母様！」ローラはそのことでからかわれたくはなかった。

「どちらにしても悲惨な出来事だったよ。その男も結婚していたんだ。その小道の真下に住んでいて、妻と6人の子供がいたそう。みんな噂している。」シェリダン氏は言った。ほんの少し気まずい、沈黙が流れた。シェリダン夫人はそわそわしてカップを弄んでいた。本当にお父様ったら、気が利かないんだから。

突然、シェリダン夫人が顔を上げた。テーブルの上にはすててしまうつもりだったサンドイッチ、ケーキ、シュークリームが手つかずのまま残っていた。シェリダン夫人は素晴らしい考えを思いついた。

「ねえ、」シェリダン夫人は言った。「バスケットを用意してちょうだい。その哀れな人たちにこのとてもすばらしい食べ物を差し上げましょう。少なくとも、その子供たちにはごちそうになるわ。いかがかしら？その女性も近所の人たちに家の中に来てもらったりするんでしょうし。あらかじめ準備をしておくのも大変なはずよ。ローラ！」ローラは飛び上がった。「階段の下の戸棚から大きなバスケットを渡してちょうだい。」

「でも、お母様、それが本当に良い考えだと思いいなくなって？」ローラは言った。また、なんて馬鹿げたことを、ローラにはすべてが的外れなことであるように思われた。今日のパーティーのあまりものを持っていくなんていうことを。そのかわいそうな女性は本当にこんなものを喜ぶのかしら？」

「あたりまえじゃないの。今日はどうしたの？つい、一、二時間前までは私たちに憐れむように言っていたじゃない。それが今になって―」

しかたないわ。ローラはバスケットを取りに走った。バスケットはいっぱいになった。それは、母親によつて山のように詰め込まれていた。

「あなたが持って行ってちょうだいね、ローラ。いつものように、いそいで行ってきてちょうだい。あ、ちょっとお待ちなさい。アルムユリも持って行ってちょうだい。あの階層の人たちはアルムユリに感動するに違いないから。」

「茎でレースのフロックが台無しになってしまうわ。」現実家のジョーズが言った。確かにそうになってしまうだろう。まさにその通りだ。

「それじゃあ、バスケットだけにしておきなさい。ところで、ローラ！」シェリダン夫人がテントから出て来てローラにつけ加えていった。「どんなことがあっても―」

「なんですか、お母様？」

いいえ、子供にそんな考えを植えつけるべきではないわ。

「なんでもないわ。お行きなさい。」

ローラが庭の門を開めたときにはちょうど薄暗くなり始めていた。一匹の大きな犬がまるで影のように走っていった。道は白く光り、くぼちのはるか下にある小さな家々には深い影が差し込んでいた。あのような午後の後でなんと静かに感じてしまうことか。今、ローラは男の人が死んで横たわっているどこかの家に向かって坂を下っていたが、実感はわかかなかった。なぜ、実感がわからないのだろう？ローラは立ち止まった。すると、キスや、様々な声、カチャカチャなるスプーンの音、笑い声、踏みつぶされた芝の匂いといったものがどこか自分の心の中に残っているように感じられたのだった。ローラには他のことを考える心

の余裕を持ち合わせていなかった。何かみょうな気分だった。ローラはうす暗くなった空を見上げ、心の中で「そう、パーティーは大成功だったわ。」と思ったのだった。

やがて、広い道をわたると、煙った暗い通りが続いていた。ショールをかけた女性やツイードの縁のない帽子をかぶった男たちが足早に通り過ぎていった。男たちは柵にもたれかかり、子供たちは玄関先で遊んでいた。みすばらしい小さな家々から低い人の話し声が聞こえてきた。何軒かの家には明かりが揺らめいており、影がまるでカニのように、窓を横切った。ローラはうつむいて、道を急いだ。コートを着てくればよかったと思っていた。なんと彼女のワンピースのドレスが光り輝いていることか。しかも、ビロードのリボンがついた大きい帽子だなんて—ほかの帽子をかぶってきたらよかったのに。みんな私のことを見ているのかしら?そうに違いないわ。来たのは間違いだったのだ。ローラはそれが間違いだということは最初からわかっていた。今からでも戻ったほうがいいのではないだろうか?

いや、もう遅すぎる。ここがその家だった。そうに違いない。一群の暗い集団が表に立っている。玄関のそばには松葉杖を手にした年老いた女性が見つめていた。その年老いた女性は新聞紙の上に足を載せていた。ローラが近づくと、話し声はやんだ。その集団が道をあけた。それはまるでローラを待っていたかのように、そうまるで彼らはローラがここにやって来るのを知っていたかのようなようだった。ローラはひどくおびえていた。肩越しにビロードのリボンを跳ね上げると、彼女は傍らに立っている女性に「スコットさんのお宅でいらっしゃいますか?」とたずねた。すると、その女性は「そうですよ、お嬢さん。」と静かに微笑みながら答えた。ああ、ここから立ち去ることができるなら。事実、ローラは小径を歩き、ドアをノックした時に、「神様、お守りください」と言った。あのジッと見つめる視線から逃れたい。あの女性たちのショールの一つでもいいから、何かで身を隠してしまいたい。バスケットを置いて出て行ってしまおう、そうローラは決意した。バスケットを移し替えるまで待つてなんかいられないわ。

その時ドアが開いた。喪服を着た小柄な女性、が暗闇の中に現れた。

ローラは「スコット夫人でいらっしゃいますか?」と言った。しかし、ゾッとしたことにその女性は「どうか中にお入りになってください、お嬢さん」とこたえると、ローラは廊下の中に閉じ込められてしまった。

ローラは「いいえ、わたしはおじゃまするつもりはございませんの。このバスケットを置きに來ただけですの。母が差し上げてくださいて—」と言った。薄暗い廊下の中にいる小柄な女性はローラの言うことを聞いていないようであった。

「どうぞこちらにお進みください、お嬢さん。」その女性はいやみったらしい声で言った。そしてローラは彼女についていった。ローラはくすんだランプに照らされた、汚らしい、小さくて低い台所にいることに気が付いた。暖炉の前に一人の女性が座っていた。

「エム、エム、お嬢さんだよ。」ローラを案内したその小柄な女性が言った。その女性はローラの方を振りかえった。彼女は意味ありげに「お嬢さん、私はこれの姉なんです。妹の非礼を許してやってもらえませんか?」

「まあ、とんでもございません。どうかそっとしてあげてください。私は—私はただ置きにきただけですから—」

しかし、その時、暖炉のところにいるその女性が振りかえった。彼女の顔は晴れ上がった眼と唇で、真っ赤にむくんでいて。見るも無残であった。彼女はなぜローラがそこにいるのか理解できないようであった。どういうことなのだろうか？なぜこの見知らぬ人がバスケットを持って、台所にたっているのだろうか？これはどういうことなのだろうか？その哀れな顔は再びクシャクシャになった。

「大丈夫、ね。私からお嬢さんにお礼を言っておくから。」最初の女性が言った。

そしてもう一度「お嬢さんこれの失礼を許してやってくれますよね」と言うと、その女性の顔もはれ上がっていたが、作り笑いを浮かべた。ローラはただ外に出て、逃げ出したかった。彼女は廊下に戻っていた。ドアが開いた。ローラは寝室の中へまっすぐ歩いて行った。すると、そこには死んだ男性が寝ていた。

「彼を見てやっていただけませんか」そうエムの姉は言うと、ローラのそばをすり抜けてベッドのところへ行った。

「怖がらなくて大丈夫ですよ、お嬢さん。一もはやその女性の声は優しく、そして茶目っ気のあるように響いた。そして、そっとシーツをはがした。一まるで絵のようです。傷なんて一つありません。どうかこちらに来てあげてください。」

ローラはそばによった。若い男性がよく眠っていた、そう、とても安らかに、ぐっすり寝ているので、そこにいる二人からは離れているようだった。ああ、なんとその距離の遠く、穏やかなことか。彼は夢を見ているのだ。二度と彼を起こしてはいけない。彼は枕の中に沈み込み、目は閉じていた。閉じたまぶたの下では何も見えない。彼は夢の世界へと行ってしまったのだ。園遊会やバスケット、それにレースのワンピースなんか彼にとってはどうでもよかったのではないだろうか。彼はそういったあらゆることから全く関係のない世界にいたのだ。彼は素晴らしく、そして美しかった。自分たちが笑いあい、バンドが演奏している間に、この驚くべきことがこの小道で起こったのだ。幸せ…幸せ…全てがうまくいっている、とその寝顔は語っていた。これがまさにあるべき状態なのだ。私は満足だ。それでも、泣かずにはいられなかったし、ローラは彼に何も言わずに部屋から立ち去ることはできなかった。ローラは子供のように大声をあげて泣いた。

「こんな帽子をかぶってきてごめんなさい。」ローラは言った。

もうローラはエムの姉を待たなかった。ドアから出口を見つけると、小道を下って、黒い人だかりを通りぬけた。その小道の角でローラはローリーと出くわした。ローリーは影の中から現れた。

「ローラかい？」

「そうよ。」

「お母様が心配なさっているよ。大丈夫だったかい？」

「ええ、大丈夫よ。ねえ、ローリー！」ローラはローリーの腕をつかむと、抱きついた。

「まさか、ないているんじゃないよね。」ローリーは尋ねた。

ローラは頭を横に振った。彼女は泣いていたのだった。ローリーはローラの肩に手を真wした。

「泣かないで。怖かったのかい？」ローリーは穏やかな、優しい口調で言った。

「いいえ」ローラはすすり泣いていた。

「ただ、不思議だっただけなの。でもね、ローリー——」ローラは泣き止むと兄を見つめた。

「人生って——」けれど人生がどういうものかというのをローラは説明することができなかった。そ

んなことはどうでもよかった。ローリーにはすべてわかっていた。

「わかるよ、ローラ」ローリーは言った。

注

1 この英文は And after all であり、直訳すると、「そして、結局」となる。これに近い訳出は意外と多く、伊藤(1958)では「ところで、結局」(P3)、林原・田中(1959)は「そして、結局」(P27)、黒澤(1964)「それで結局」(PP64)、及び西崎(2002)では「そして、けっきょくのところ」(P18)、と直訳に近い形で訳出されている。これに対し、安藤(1957)は「それで、ついに」(P8)と after all に該当する箇所のみ意識している。崎山(1934)は「いよいよその日になると」(P140)及びその後継の訳本である崎山・伊澤(1967)で崎山は「いよいよ、その日は」(P263)はともに文全体の流れをみて意識に近い訳出をしている。筆者はこの文章はナレータの回想であることからあえて And after all の箇所を「まさに」と1語で訳出した。

2 この英文は You are the artistic one であり、直訳すると「あなたは芸術的である」、「あなたは芸術家肌」、そして「あなたは芸術家である」になると考えられる。実際、安藤(1957)は「あんたは芸術的な人だから」(P9)、林原・田中(1959)「あなたは芸術家だから」(P29)、黒澤(1964)「あんたはなかなか芸術家だから」(P64)、西崎(2002)「あなたが一番芸術家なんだから」(P19)と直訳に近い訳出となっている。これに対し、崎山(1934)は「あなたは器用なんだから」(P141)とこれまの訳出が artistic を念頭に入れた訳出だったのに対し、内容を踏まえた訳出になっている。これに対し、筆者と崎山は1969年版においてはさらに踏み込み、芸術的ということは裏を返せばそれは「センスがある」の意であると考えられることから、崎山・伊澤(1969)「センスがある」(P264)に、筆者は「センスがいい」と訳出した。

3 Four men in their shirt sleeve 直訳すれば「シャツの袖をまくった四人の男性」ということになるが、この四人はテント設営にやってきた職人であることから、シャツといってもワイシャツのような正式なシャツとは考えられない。実際、崎山(1934)とその後継の崎山・伊澤(1969)はともに「四人の男が、シャツ一枚になって」(崎山(1934)はP141、崎山・伊澤(1969)はP264)、林原・田中(1959)は「シャツ姿の男が四人」(P29)、黒澤(1964)「シャツ姿の四人の男」(P65)と原文に忠実に訳出していることが分かる。これに対し、安藤(1957)は「ワイシャツ一つになった男が四人」(P9)、伊藤(1958)は「ワイシャツ一枚になった男が四人」(P5)といずれも「ワイシャツ」と訳出しているが、この男たちがたまたま仕事帰りに手伝いに立ち寄った人たちではなく、職人であることを考えると、「ワイシャツ」を着ているとは考えにくい。このことも踏まえて筆者はあえて「ラフな格好をした四人の男性」と訳出した。なお、西崎(2002)は「シャツ姿の男の人たちが何人か」となっているが、原文は Four men とあることから、「何人か」ではなく、「四人」と訳出しなければならない。おそらく、Four を Few と勘違いして訳出したものと考えられる。

4 bread-and-butter 直訳的には「バターをつけたパン」であるが、現在ではバタートーストということから、あえて「バタートースト」と訳出した。なお、このバタートーストの訳出は筆者の他に西崎(2002、P19)が行っている。この他は崎山(1934)「バタつきのパン」(P141)、安藤(1957)「バタつきのパン」(P9)、伊藤(1958)「バタをつけたパン」(P5)、林原・田中(1959)「バタ付きのパン」(P29)、黒澤(1964)「バタつきのパン」(P65)崎山・伊澤(1969)「バタつきのパン」(P264)と原文に忠実である。

5 look severe は直訳すると「真剣そうに見える」「真面目そうに見える」という意味だが、ここではロ

ーラは職人たちに子供だからと言って馬鹿にされないように怖そうに見えるように厳しい態度を見せようと考えられること、また後続の文とのつながりを考えて「キリッ」とに訳出した。これに対し、林原・田中（1959）「なるべき甘くない顔をしよう」と（P29）を除き、崎山（1934）「真面目くさって」（P141）、安藤（1957）「わざときつい顔つきをし」（P9）、伊藤（1958）「真面目くさったかおをし」（P5）、黒澤（1964）「きつい顔をしながら」（P65）崎山・伊澤（1969）「わざときつい顔つきをした」（P264）、西崎（2002）「厳めしい感じに見えるように努め」（P19）とほぼ原文を踏襲した訳出になっている。

6 We won't bite. 意味としては「私たちは（あなたを）噛みません。」となり、崎山（1934）「噛みつきやしませんよ」（P142）、安藤（1957）「わたしたちは噛みつきなどしませんよ」（P10）、伊藤（1958）「噛みつきはしませんよ」（P5）、林原・田中（1959）「噛みつきやしませんよ」（P29）、黒澤（1964）「私たちは噛みついたりいたしません。」（P65）崎山・伊澤（1969）「かみつきやしませんよ」（P264）、西崎（2002）「噛みつきはしないよ」（P20）といずれも原文に忠実に訳出している。しかし、筆者は「弘法も筆の誤り」を英訳すると、“Even Homer sometimes nods” と日英で類似内容をあてはめることもあることから、日本でよく知られている慣用表現「とってくう」をあえて当てはめた。

7 give a bang slap in the eye 意味としては「目をぴしやりと打つ」であるが、実際に目に一発パンチを喰らわせるわけではない。ここでは、あくまでも悪気のない職人たちが使用するスラングであり、話の状況から判断して「人目のあるところにバーンとおく」程度に訳出した。崎山（1934）「目の玉をひっくりかへす」（P142）、安藤（1957）「目にがんとぶつかる」（P10）、伊藤（1958）「ガーンと目玉にぶつかる」（P7）、林原・田中（1959）「どんと目玉にぶつかるような」（P30）、黒澤（1964）「ガーンとめだまに一発お見舞申すような」（P66）崎山・伊澤（1969）「目にどかっとなるような」（P265）、西崎（2002）「眼にガーンとなるような」（P20）とほぼ原文を踏襲した訳出になっている。

8 Laura's upbringing 直訳的には「ローラの育ち」である。崎山（1934）「ローラの育ち」（P142）、安藤（1957）「ローラの受けた躰」（P10）、西崎（2002）「ローラの受けた教育は」（P21）は比較的原文に忠実な訳出である。中でも、崎山（1934）は直訳と言ってもいいだろう。林原・田中（1959）「育ちが育ちだけに」（P30）、黒澤（1964）「お嬢さん育ちのローラは」（P66）崎山・伊澤（1969）「彼女のしつけからして」（P266）は原文の状況から把握した訳出となっている。伊藤（1958）は「ローラは上品な育ちからして」（P7）、と訳出しているが、やや訳しすぎだろう。ローラのシェリダン家は必ずしも上流階級ではなく、この当時よく見られた中産階級である。日本では園遊会というと天皇・皇后が主催するため、上流階級の催し物と思われるが、必ずしもそうではない。例えば、イギリスでは現在では7つの階級構造があると言われるが、この当時は上流、中産階級、下層階級の三段階に分かれている。なお、ここでいう上流とは王侯貴族をさし、会社経営者や、日本では高収入と考えられている医師、弁護士、銀行家等はすべて中産階級に属している。そのため、「上品」はやや言い過ぎで、「品よく」程度が無難であると考えられる。マンスフィールドはニュージーランド出身だが、ニュージーランドは、もともとはイギリスの植民地に起源をもつこと、また彼女自身がイギリスで作品を発表していることから、この作品も階層構造を反映していると考えられる。なお、マンスフィールドの父が銀行家であるために、やはり中産階級出身である。このことを踏まえ、あえて「行儀よくしつけられた」と訳出した。

9 the silly boys 一般的な訳では「馬鹿な男の子たち」となっているが、心底憎むほど嫌っているわけ

ではないことから単なる「馬鹿な」ではなく、「おバカな」に訳出した。崎山(1934)「くだらない男達」(P144)、安藤(1957)「馬鹿な男の子たち」(P11)、伊藤(1958)「馬鹿な男の子たち」(P5)、林原・田中(1959)「馬鹿な男の子たち」(P33)、黒澤(1964)「愚かな男友達」(P675) 崎山・伊澤(1969)「くだらない男の子たち」(P267)、西崎(2002)「ばかな男の子たち」(P22)と訳出の多くは、原文に忠実である。気になるのは、崎山(1934)の「くだらない男達」であるが、ローラの年齢及び原文の the silly boys から判断すると行きすぎの感じがしなくもない。そのことは後継の伊澤も感じていたのか、1969年版では「男の子たち」に修正されている。

10 崎山(1934)、安藤(1957)、伊藤(1958)、林原・田中(1959)、黒澤(1964)、では「兄弟」または「きょうだい」と訳しているが、ここで使用されている matey という単語は mate(仲間)の派生語であり、mate は classmate や roommate として使用される。また、海事では海技士の事を正式には first officer を(1等航海士)を使用するが、通称的に mate を使用する。その場合は、「兄弟」のような親密さではなく、あくまでも「仕事仲間」の意味で使用する、どちらかといえば、「パートナー」としての感覚である。そのため、あえて「兄弟」ではなく「相棒」と訳出した。西崎(2002)も筆者と同様に「相棒」と訳出している。

11 Oh, I do love parties…直訳は「私はパーティーが大好き」となるが、ローラのパーティーにたいするわくわく感を出すために、あえて、主語の箇所読点を入れて訳出した。他の訳では崎山(1934)「ね、私お集まりが大好きなのよ」(P145)、安藤(1957)「あたし、パーティーは大好きよ」(P12)、伊藤(1958)「あー、あたし、パーティー大好き」(P11)、林原・田中(1959)「ああ、私パーティーって大好き。」(P35)、黒澤(1964)「ああ、あたし、パーティーは大好きよ」(P68) 崎山・伊澤(1969)「ああ、あたし、パーティーは大好きよ」(P268)、西崎(2002)「ああ、わたし、パーティーはすごく好き。」(P23)とあるが、崎山(1934)は時代もあるのかパーティーのことを「お集まり」と訳出しており、時代にそぐわない。そのため崎山・伊澤(1969)は「パーティー」と訳出しなおしている。なお、伊澤と安藤(1957)は訳が非常によく似ているが、気になるのは日本語の助詞の「は」である。この表現では、パーティー自体は好きだが、他のこと、例えば段取りを組み、他の人の手伝いをするのは面倒で嫌いというニュアンスが含まれる。しかし、ここまでのローラ言動からそのニュアンスは感じられない。そのためここで使用する日本語の助詞は「は」ではなく「が」の方が適切である。伊藤(1958)、林原・田中(1959)、西崎(2002)は表現としてはやや俗物的である。ローラはきちんとしつけられた良家の子女である。確かに中産階級ではあるものの、比較的裕福な upper middle class であると考えられる。そのローラが仮に職人にあこがれたとしても、いきなり俗物的な言い方をするとは思えないし、そのような表現をした場合は兄のローリーも何らかの反応のある表現が出てこなくてはならないが、残念ながらそのような描写は本文にはない。

12 the sandwich crusts 直訳では「サンドイッチの屑」、つまり、サンドイッチを作る時にでるパンの耳の部分。日本でも、ホームパーティの主催側が謙遜して「あまり大したものはないのですが」といった表現を使用するが、それと同じと考えてよい。事実、シェリダン家では専属シェフがいてサンドイッチを準備している。そのため、ここでは直訳的に「サンドイッチの切りくず」とするのではなく、あえて「あまり大したことのないサンドイッチ」と訳出した。

13 broken meringue-shells 崎山(1934)「玉子菓子のこわれたの」(P146)、安藤(1957)「メレンゲの外皮」(P12)、伊藤(1958)「壊れたメラングの皮」(P11)、林原・田中(1959)「メラングの皮のこわれたの」

(P35)、黒澤(1964)、「メランゲのお菓子のこわれたの」(P68)、崎山・伊澤(1969)「こわれた玉子菓子の皮」(P268)、西崎(2002)「われたメレンゲ」(P23)、とこれらの訳ではこのお菓子が一体どのようなものなのかその特徴をとらえることができない。実は、これは本文にある shell を「(パイなどの)皮」と解釈していることによる誤訳である、この shell は「皮」ではなく「貝殻」、すなわち貝のデザインのことを言っている。つまり、メレンゲを貝の型に入れて焼いたお菓子の事である。そのためここでは貝のデザインのメレンゲ菓子のことを表現していることから、「シェルタイプのメレンゲ菓子」と訳出した。なお、イギリスの菓子メーカー、ウオーカー社(創業 1898 年創業)の商品にメレンゲシェルがあるが、やはりこれも貝の形をしたメレンゲのお菓子である。これについてはアマゾンでも販売されており、「ウオーカー メレンゲシェル」と検索すればその画像が出てくる。なお、ウオーカー社はマンズフィールドが 10 歳の時に創業していることから、このメレンゲシェルというお菓子は当時から一般的なものであったと考えられる。

14 Cook の意味は勿論、料理人であることは言うまでもない。崎山(1934)「料理女」(P151)、安藤(1957)「料理番」(P17)、伊藤(1958)「料理番」(P19)、林原・田中(1959)「料理番」(P29)、黒澤(1964)「料理人」(P65) 崎山・伊澤(1969)「料理番」(P264)、西崎(2002)「料理番」(P20)と圧倒的に「料理番」等表現が多く、「料理人」はわずかに黒澤だけである。崎山(1934)は時代的なこともあり、「料理女」と訳出したのだろうが、やはり不適切との考えからか 1969 年版では「料理番」となっている。しかし、この言葉も現代ではあまり使用されない。また、英語の Cook をそのまま使用したコックという言い方も最近では廃れ始めていることから、フランス語起源のシェフを当てはめた。

15 One of you children must have stolen it out of my bag. 直訳では「あなた方子供のうちの一人が私のバッグからそれをぬすんだにちがいない」となる。しかし、ローラ達姉妹は行儀よくしつけられた娘達であることから、Sheridan 夫人も言葉の使い方には注意する部分もあるのではと考え、「盗んだ」という直接的な訳ではなく「勝手に取り出した」と意識した。この他に崎山(1934)「子供たちのうちで、誰かが私のバッグの中から盗んだに違ひはない」(P152)、安藤(1957)「子供たちの誰かが私のバッグから取っていったんでしょよ。」(P18)、伊藤(1958)「あんた方の中誰かが、私のハンド・バッグの中から盗み出したに違いありませんよ。」(P19)、林原・田中(1959)「あなた達子供のうちの誰かが私のバッグから取り出したに違いないわ」(P43)、黒澤(1964)「あんたたちの誰かが私の手堤から盗み出したに違いない」(P73)、崎山・伊澤(1969)「子供たちのうちの誰かが、きっと、私のバッグの中からはとったんでしょ。」(P274)、西崎(2002)「あなたたちのうちの誰かが、私のバッグから盗んだに違いないわ。」(P29)とあるが、林原・田中(1959)を除き、基本的には原文に忠実に「とる」、「盗む」と原文に忠実に訳出している。しかし、今回探していたのはサンドイッチに封筒の裏に書いておいたサンドイッチにつける旗の種類のメモである。そのため、崎山(1934)、伊藤(1958)、黒澤(1964)、西崎(2002)の訳出では、やや誇張すぎる訳出になる。これに対し、安藤(1957)と林原・田中(1959)は「取る」を使用しており、こちらの方が柔らかな印象を受けた訳出になる。なお、崎山・伊澤(1969)は「とった」とひらがな表記で訳出されており、「盗った」とも「取った」とも読み取れ、読み手の判断にまかせる訳出となっている。

16 原文は cream puffs である。崎山(1934)「クリーム饅頭」(P153)、安藤(1957)「クリームパフ(訳注シュークリームに似たもの)」(P19)、伊藤(1958)「シュークリーム」(P21)、林原・田中(1959)「シュー・クリーム」(P29)、黒澤(1964)「シュークリーム」(P74) 崎山・伊澤(1969)「シュークリーム」(P275)、

西崎(2002)「シュークリーム」(P30)とあるように、時代的な物もあるが、崎山(1934)は何とか日本語に、安藤(1957)は英語の表現をそのまま使用しようと努力した形跡が見られるが、伊藤(1958)から現在に至るまで、英語のクリームパフではなく、フランス語のシュークリームがそのまま使用されているが、その理由は日本ではフランス料理と比較し、イギリス料理の認知度は極端に低いことによる。そのため、一般的に「シュークリーム」といえば、どのような食べ物かイメージしやすいが、「クリームパフ」というと、イメージが分からず、新たに「シュークリーム」と表現しなおさなければならない。実際、注釈本においても cream puff は注の一項目として扱われており、説明は「シュークリーム」となっている。そのため、筆者も cream puff を原文に基づいた「クリームパフ」ではなく「シュークリーム」と訳出した。

参考文献

<テキスト>

- 1 Katherine Mansfield “Twentieth Century Classics The Garden Party and Other Stories”、Penguin Publishing, co. 1992

<翻訳・対訳>

- 1 崎山正毅譯『マンスフィールド短編集』、岩波文庫、1934
- 2 安藤一郎『マンスフィールド短編集』。新潮文庫、1957
- 3 伊藤恭二郎訳注『マンスフィールド短編集(園遊会他)』、金星堂、1958
- 4 林原耕三・田中三千夫訳注『対訳マンスフィールド』、南雲堂、1959
- 5 黒澤茂『園遊会』、垂水書房、1964
- 6 崎山正毅・伊澤龍雄訳『マンスフィールド短編集—幸福・園遊会他十七篇』、岩波文庫、1969
- 7 西崎憲編訳『マンスフィールド短編集』、ちくま文庫、2002

<注釈本>

- 1 岡田美津編注『研究社現代英文学叢書 Short Stories By K. Mansfield』、研究社、1935
- 2 岩崎民平編注『研究社小英文叢書 マンスフィールド 園遊会他』、研究社、1955
- 3 西原忠毅・小倉多加志編注『The Garden Party & Other Stories』、南雲堂、1961
- 4 真田時蔵・関憲治註解『The Garden Party & Other Stories』、成美堂、1978
- 5 佐竹龍照編注『The Garden Party & Other Stories』、大学書林、1978
- 6 大澤銀作編注『The Garden Party & Other Stories』、文化書房博文社、1988
- 7 上島健吉編注『The Doll's House & Other Stories』、英光社、1989

COVID-19への感染症予防を踏まえた大学体育実技授業の実践研究

平川 武仁* 大庭 恵一** 山田 英生***

Practical research for physical education class at university with prevention of infectious diseases to COVID-19

Takehito Hirakawa* Keiichi Ooba** Hideo Yamada***

Abstract

The purpose of this study is to evaluate the curriculum for physical education as well as class management for the same through students' feedback. The curriculum was constructed based on domino theory and risk management theory in order to conduct classes where preventative measures against the spread of COVID-19 were employed. Forty students attended the classes for physical education at the university. The results of statistical tests conducted on students' feedback for class management, class curriculum, and teaching activities were as follows: 1) students had been taking safe and secure classes, 2) knowledge acquisition was used for infection prevention behavior, and 3) students enjoyed the classes with the recognition of self-regulated learning that they had been studying on autonomously. The results thus suggest that students can attend classes peacefully when safety is ensured and when a lesson curriculum based on domino theory and risk management theory is implemented, despite dramatic changes or unprecedented situations in the future.

Keywords: risk management, self-regulated learning, infection prevention education

1 序論

1. 1 感染症予防と体育授業の実践

2020年1月6日に、厚生労働省のホームページでの報道発表一覧において「中華人民共和国湖北省武漢市における原因不明肺炎の発生について」(厚生労働省, 2020a)が掲載された。その後、この新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)は、日本国内に限らず、世界的に蔓延し、新しい生活様式の導入が余儀なくされた。この世界的なCOVID-19の蔓延によって、行動規制されるだけでなく、高等教育機関においては、2020年3月24日に文部科学省から「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」(文部科学省, 2020b)による指針が出された。そのため、感染拡大を防止する目的で、初等教育から高等教育までのいずれの機関においても、長期間に渡り、面接(対面)形式の授業の開講を控え、インターネットを介した遠隔形式の授業(オンディマンド配信型、双方向同時通信型など)を実施せざるを得なくなった。2020年9月以降、複数回の緊急事態宣言が発出される中、全国各地の大学の体育実技に関連する科目においても、接触感染を避けるための手指消毒などの徹底、飛沫感染を防ぐためのマスク着用や三密(密閉、密集、密接)回避など、感染予防をしながら、手探りで授業運営をしてきたと推測される。

ら、手探りで授業運営をしてきたと推測される。

もし感染予防を優先するならば、マスク着用や三密回避などの予防行動をとる以上に、面接授業を開講せず、インターネットを介した遠隔授業に変更することが賢明である。しかしながら、近年、小学校、中学校、高等学校だけでなく、大学などの高等教育機関においても、アクティブラーニング(小山・溝上, 2018)を筆頭として、生徒間あるいは学生間の協同の学びを実現する授業になるように、教授内容を改善してきた経緯がある。そのため、生徒や学生は協同の学びを中心とした面接授業に慣れてきていると考えられる。このような状況下での遠隔授業においては、たとえ双方向同時通信型授業による小グループでの討論の時間が設けられたとしても、受講生が授業に参加している実感がわきにくいと考えられる。このことは特に、実技を伴う体育の授業において顕著であると推察される。

大学において、体育実技を実施する意義は、身体的、精神的、社会的な効果だけでなく、日常生活での運動行動を促進する効果があること(全国大学体育連合, 2010)が挙げられる。また、西田ほか(2015)が、体育実技を通じて、友人関係の形成・拡大、運動を実施する頻度の増大、楽しさを実感できることなどを示唆しているように、全

*大阪体育大学 **大分工業高等専門学校 ***一般教育

人教育として非常に重要な科目でもある。上述の社会的状況や大学の体育実技の意義を反映した授業運営を試みながらも、厚生労働省に助言する専門家会議は2021年10月19日に「感染者数の減少速度の鈍化や下げ止まりが懸念される」(朝日新聞, 2021)との見解を示したように、未だ従前の生活が戻らない状況である。また、現在まで様々な感染症が発生している中、2003年には中国南部の広東省を起源とした重症急性呼吸器症候群(SARS: severe acute respiratory syndrome)(国立感染症研究所, 2005), 2012年には中東呼吸器症候群(MERS: Middle East Respiratory Syndrome)(厚生労働省, 2017), 2020年にCOVID-19というように、8から9年の間隔で感染症が発生している。この経緯を鑑みると、近い将来、仮にCOVID-19の感染が収束したとしても、数年後には、新たな感染症が蔓延する可能性も否めない。このような状況にありながらも、もし感染予防を徹底した授業カリキュラムを設定したならば、感染予防に関する知識と行動を育成する貴重な機会にもなると考えられる。実際に文部科学省のガイドライン(文部科学省, 2020a)のもと、全国の高等教育機関において、面接授業による体育の授業が再開し、実践的に取り組まれている(梶・高岡, 2021; 渡辺ほか, 2020)。しかしながら、どのような判断基準で授業カリキュラムを構成したかなど、感染症に対するリスク・マネジメントという視点によって体育実技の授業の実施形態を捉えた研究や、授業を受講した学生がその授業をどのように評価をしたかに関する学術的な記録を残した論文は無いようである。

1. 2 リスク・マネジメントにおけるドミノ理論

COVID-19感染予防をしながら授業を実践するにあたり、リスク把握から対処に至るまでの過程をまとめたリスク・マネジメント(星野・金子, 2011)が参考になる。まず図1は、ハインリッヒ(1951)によるドミノ理論に基づいて、2020年9月時点での、社会環境(社会的状況)、人的欠陥(学生)、不安全状況(授業)・行動(学生)、事故(感染)までの経過を仮定した概念図である。この理論に基づいて、体育実技の運営を試論した場合、COVID-19が蔓延(社会的状況)し、学生が感染予防行動に関する十分な知識を持たず(人的欠陥)、三密や濃厚接触者の定義(国立感染症研究所, 2020)に抵触する行動をとってしまったなどの心理学的なヒューマンエラー(不安全行動)が続き、感染予防対策を十分に施した授業でない状況(不安全状況)が重なると、感染(事故)となってしまう可能性がある。そのため、授業で制御できないドミノである社会環境から先の制御できるドミノにおいて感染予防行動に関する知識を与え(人的欠陥の改善)、ヒューマンエラーを回避(不安全行動の回避)する授業運営(不安全状況の回避)によって学生の活動を制御し、感染予防(事故の回避)に繋げることが肝要である。ここでいうヒューマンエラーとは、認知心理学においてミステイクなどの観点で検討されて

きた概念(海保, 1996)であり、本人の自覚なく、ミスを行ってしまうことである。例えば、COVID-19の感染予防行動で、密接を回避しなければならない知識を持っていても、学友と話すことに夢中になってしまい、気づかないうちに近接した距離で会話していることなどである。

授業では、これら2つの観点を達成することが必要である。そのため、まず人的欠陥を改善する目的として、COVID-19感染予防に関する教養を与える時間をカリキュラムに組み込むことが必要である。次に不安全行動に基づく不安全状況を回避するため、学生の行動を制御する目的で、運動活動中에서도密接にならない位置に学生が移動するように、実技のカリキュラムを構成することが必要である。

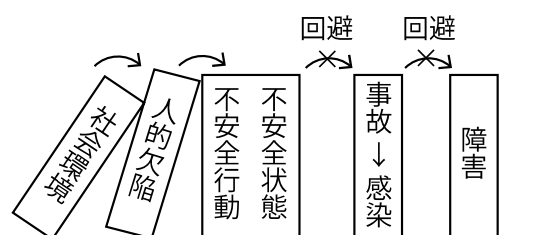


図1 ドミノ理論(星野・金子, 2011, を著者改変)とCOVID-19感染予防の概念図。COVID-19が感染拡大している社会的状況(社会環境)から人が影響を受けてヒューマンエラー(人的欠陥)が発生しても、安全行動を取り、安全状態を担保した授業を運営できれば、事故(感染)を回避できることを示す概念図。

1. 3 リスク・マネジメントでの要因評価の指標と教育効果

リスクの分類の指標の1つは、顕在リスクと潜在リスクである(星野・金子, 2011)。感染予防行動を例に挙げると、顕在リスクは濃厚接触者の定義(国立感染症研究所, 2020)や三密(厚生労働省, 2020b)回避などである。また、潜在リスクは、教員あるいは学生が明示的に確認できないことであり、他の授業と共有している用具の消毒状況、学生の心身不調などである。

もう1つの指標は、環境要因(外的要因)と人的要因である(星野・金子, 2011)。環境要因は、顕在リスクと重複する要因である。例えば、授業を実施する活動場所が保有するリスクであり、密閉、密接などである。これらは窓を開放することや対人間の距離を保てる施設を設定することで回避することができる。しかしながら用具を環境要因と仮定すると、他の授業の終了時に用具を除菌したかどうか不明であるため、上記の潜在リスクに該当するとも考えられる。そのため、用具に関しては、用具使用前後の手指消毒によって回避することなどが考えられる。一方、人的要因は潜在リスクとも重複する。例えば、学生の理解度や行動において、感染リスクに関する理解や認識および予防に取り組む態度が不十分であること、軽率な行動をと

ったり、怠惰な態度であるような能力不足、また学生の心身不調などで個々人の能力を十分に発揮できないこと、さらには教員が示した予防行動に関する授業での指針を軽視することなどである。授業では、これら2つの指標を軸として、感染を予防するように、実技のカリキュラムを構成することが有効であると考えられる。

図2は、星野・金子（2011）が解説するリスク・マネジメントのサイクルを本著者が改変したものである。星野・金子（2011）は、本人が「リスク」を認知し、「リスク」を回避する行動ができれば、安全を確保する能力を養う機会となり、安全管理能力の育成につながる、と述べている。また「必要以上に怖がりすぎる」と「まったく怖がらないこと」をやめて、「適切に怖がること」（どうすれば安全にできるか）を第一に考えて行動し、活動によって生じるリスクを発見（認知）し、危険のレベルを感じ取る（評価する）ことで「適切に」行動できる、としている。これらを踏まえて教育内容を設定した場合、「リスクを予知」し「リスクを回避」する能力を育成できるカリキュラムになると考えられる。

そして、授業を運営する上で発生する可能性があるリスクを発見したあと、適切に評価し、リスクが発生する前に対処するための判断と行動を誤らないことが、学生が安全、安心に受講できるカリキュラムにもなる。

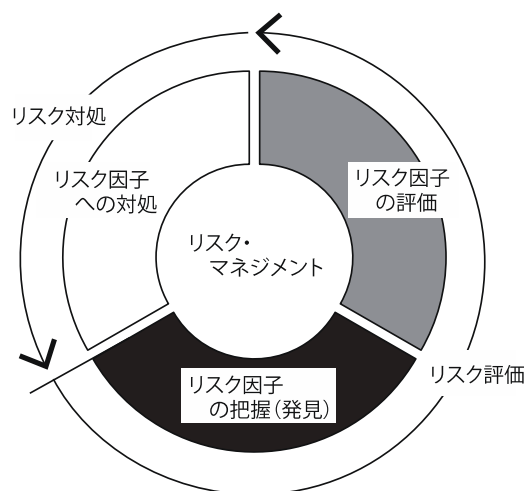


図2 リスク・マネジメントの概念図(星野・金子, 2011, を著者改変)。矢印は時間軸の方向を示し、リスクの把握（発見）した時点から評価の段階へ、そして対処行動への時間的経過を表している。

1. 4 自律的学習の場の設定と自己調整学習

面接授業の再開に際して、多くの担当教員が頭を悩ませる問題として三密（密閉、密集、密接）対策が挙げられる。密閉においては、ドアや窓の開放と換気扇等の利用など施設のハードウェアによって解消できる。このことは、広く開放的で換気条件のよいオープンスクールでは、冬の季節

性インフルエンザによる学級閉鎖が少ないことが報告されている(奈須, 2020) ように、副次的な効果にも繋がる。次に密集においては、利用する施設あるいは空間に対する受講生数の縮小で解消できるが、授業運営によっては学生の行動を統制できないため、密集を避けた運営をしなければならない。そして密接においても、学生の行動の統制が必要になるだろう。

授業カリキュラムにおいては、協同的な学びを達成するため、学生個々の行動を制御しながらも、提示された課題（基礎練習や試合）について学生が自律的に学ぶシステムを導入する必要がある。しかしながら、自律的に学ぶシステムの欠点として、学生の行動の統制が取りにくいことが予想される。そのため、密接の状況になってしまう可能性もある。ただし、初等・中等教育と異なり、高等教育では、広い空間であっても、担当教員の指示に常に従って学習するのではなく、ある程度の枠組みを決めるだけでも、自身でその時点で最も良い学習は何かを判断し、活動できる。このことは、学生がシラバスや授業初回のガイダンスを通じて、各科目の学習目標や到達目標について理解しているので、担当教員が、利用可能な教材（施設や用具）、学習機会（基礎練習、応用練習、試合など）を毎回の授業で標準的な学習の流れとして示すことで、運営と個別指導に集中できることに繋がることになる。さらに、個々の学習であっても、他の受講生と一緒に枠内で、自律的で協同的な学習を、授業全体にわたって構成することによって、学生は担当教員の提示した課題の中で、自分の改善すべき点（あるいは課題）を見極め、枠内で自律的に学習するようになる。

これらのことは、学習者自身が学習の仕方に対する判断や行為（学習方略）を決めることでもある。Perlmutter et al. (1971) は、学習者に学習方法を自由に選択させた場合（自己選択条件）と強制的に学習者に提示した場合（強制選択条件）の学習効果を比較したところ、前者は後者に比べて学習成績が優れていたことを報告している。このことは、学習者は実験者から提示された情報を十分に吟味しなくても、提示された情報から学習者自身が選択するだけで記憶が促進され、自己選択効果に繋がることを示している。さらに、学習者自身の認知的な側面に対して、前もって持っている認識や知識（メタ認知）に基づいて、行動的側面や動機づけの側面において活発に取り組む学習は自己調整学習になる（Zimmerman, 1989）。運動の学習でいうメタ認知とは、前もって持っている運動学習における自己に対する認識や練習方法などに関する知識を指している。メタ認知的側面のうち、学習の組織化、自己モニター、自己評価が行われる点が運動の学習に重要であり、学習の効果を上げることに繋がる。

1. 5 目的

今後も、学習環境と教育環境の急激な変化が発生するこ

とを想定し、準備しておくことが大切である。そのため、未曾有の事態にありながらも教育現場で、どのような授業運営を実践し、その実践を履修学生（以下、学生とする）がどのように評価したか、を検証しておくことが必要と考えられる。そこで本研究は、新型コロナウイルス禍において、面接授業においても感染予防に配慮した安全な授業運営、そして感染予防に配慮した面接授業の実践研究として整理し、学生が安全、安心して受講できる授業運営を検討することを目的とした。

2 方法

2. 1 対象授業

対象授業は、2020年度後期「卓球」の実技の授業であった。受講生は2クラス（1限に1クラスで2限連続の担当）、計40名（男子6名、女子34名）であった。この授業は、運動活動、健康に関する教育を狙いとした科目であった。

2. 2 授業カリキュラム

2. 2. 1 授業時における感染予防対策の基準

本著者の勤務する本務校では、2020年3月下旬に新型コロナウイルス感染症対策本部が設置された。本部は、政府・自治体からの要請だけでなく、社会的状況の変化に基づき、正課や課外などの活動における指針となるガイドラインを作成し、厳密に運用している（参考例：大阪体育大学、2021）。本研究でも、学生が本授業を安全、安心して履修できるカリキュラム構成を検討するため、このガイドラインに依拠して決定することとした。

2. 2. 2 授業施設

施設は、バスケットボールコート1面（28m×15m）が設定できる広さに、卓球台（国際規格2.74m×1.525m）を最大で12台設置する空間であり、2名で1台の卓球台を使用した場合、1時限につき履修者数の上限は24名であった。そのため、教員を入れて最大25名であり、空間は少なくとも16.8m²/人となり、4m四方を上回る空間での授業履修になる。なお、施設に設置されているドアや窓は全開にして「密閉」を回避した（図3）。

2. 2. 3 毎回の授業の時案概要と留意・危機管理事項

表1は、授業の時案に関する概要と留意・危機管理事項を示している。これは、前述の感染予防対策の基準を鑑みて、人的欠陥によるヒューマンエラーを回避する行動統制と不安全行動・状態に至らないための担当教員の行動基準とチェック事項（留意・危機管理事項）である。基礎練習の時間には、学生は2分単位で、ラリー練習をする相手を変えていくが、密接、密集しないように移動していくように構成した（図3の矢印の方向）。その後、感染予防行動を徹底した休息时间（マスクを付けた運動であるため、少々長い休息時間の確保）、休息时间を兼ねた感染予防行動や感染症に関する知識習得の時間を設けることによって人

的欠陥を補う教育時間を設けた。その次に、試合時間を設けたが、密接、密集を避けるため、時間制（1試合、2から3分の中で、得点の多い学生の勝利）による運営を実施することで、テーブルを挟んで3m前後離れた試合交流になるように運営した。



写真1 手指消毒液の設置（2箇所）。授業時間の開始・終了時だけでなく、給水や授業用具以外のもの（ドアノブ、窓クレセントなど）に触れる前にも学生に使用させた（配置場所は、図3に示している）。

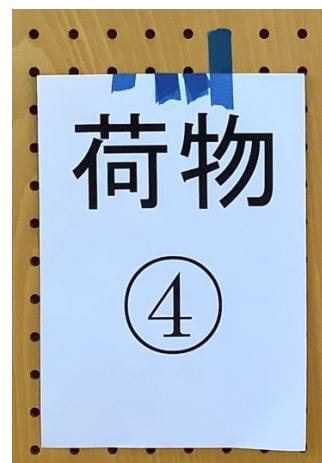


写真2 荷物置き場の指定札。座席指定の代わりになるように、学生が授業実施施設に入室する前に、履修学生の人数分を壁に貼り付け、学生の行動記録を残す手がかりとした。

2. 2. 4 授業カリキュラムと知識習得内容

表2は、全15回の授業カリキュラムの概要を示している。基礎練習においては、2分毎にラリーをする相手を交代していったが、毎回のテーマを設け、そのテーマを習得するための効果的な方法を提示するだけとして、学生自身がそのテーマを達成するように自己調整する学習に取り組む

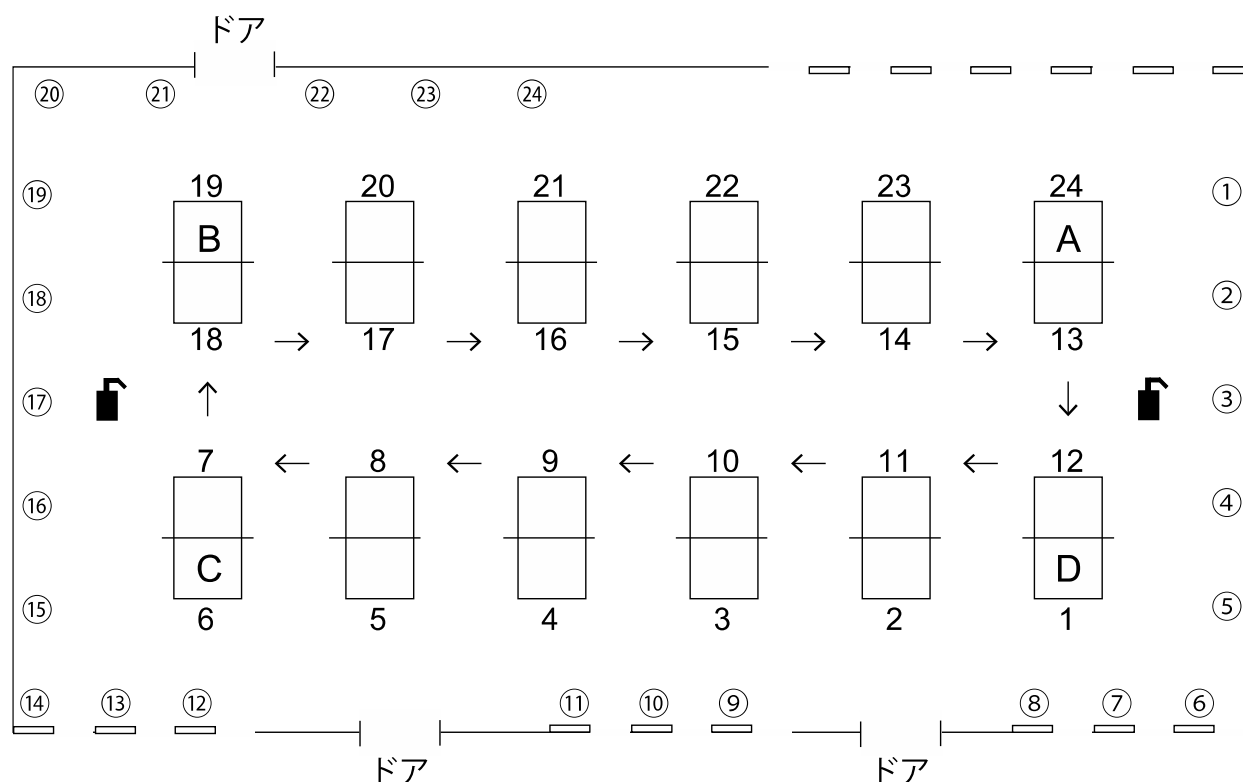


図3 授業を実施した施設の構成. 丸数字は学生自身の荷物を置く場所の指定(例:写真2), 数字は基礎練習の開始位置と移動方向(表1). 図の中段左右にある黒塗りの挿絵は消毒液の配置(写真1)を示している. 丸数字6から14までの下に描写している四角は窓(約1m高), 図の上方にある四角も同一の窓を示す. 外枠の線や四角で閉じていない所は, 窓・ドアを開放していることを示す.

ように設定した. ただし, 出席している学生数が奇数の場合には, 学生が配置されていない卓球台に担当教員を配置し, 2分単位で個別指導を行い, 偶数のときには, 各卓球台を巡回しながら, 技術改善のための質問の機会の提供および回答, 助言を加えた. また表2の右列に, 毎回の授業において提供した感染予防行動・感染症対策における知識習得のテーマを示した.

2.3 調査時期

授業運営・管理に関する評価は, 2020年10月に実施した1回の授業の開始前と終了後に, 任意で回答する調査用紙で協力を得た. 回収率は90%(男性5名, 女性31名)であった. 授業カリキュラムと教員行動の評価は, 2021年1月に調査を実施した. 回収率は95%(男性5名, 女性33名)であった.

2.4 倫理的配慮

研究上の倫理についての説明を, 口頭および書面にて実施した. 調査の趣旨, 調査への協力は任意であり, 途中で回答をやめることも可能であること, 回答を途中でやめても不利益は発生しないこと, データは匿名化されており, 結果は平均値化した上で統計的に処理されること, 個人情報情報を厳重に保護することを伝え, 研究倫理上の配慮を十分行った上で, 同意を得た者に対して調査を実施した.

2.5 調査用紙

調査用紙は無記名であり, 性別, 年齢, 14項目(表3)と自由記述1項目(その他, 気づいたことがあったら, 下記に, 自由に記述してください)の調査項目で構成した. 調査項目は「あてはまらない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の4件法(0から3点)で回答するものであった. 授業評価については, 6項目(図4)のうち, 項目1のみ「遅い」「やや遅い」「適切」「やや速い」「速い」の5件法(1から5点), その他の5項目は「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5件法(1から5点)と, 自由記述1項目(授業に関して自由に記述してください)への回答で構成した.

2.6 分析

授業運営・管理の評価の各項目について, 「かなりあてはまる」(2点)を比較値として一標本の t 検定を実施し, 母集団の平均値比較をした. 授業カリキュラムと教員行動の評価における「授業進捗の程度」(No.1)について「やや速い」(4点)を, 「授業の理解の程度」(No.2), 「静穏な環境」(No.3), 「教員の発声」(No.4), 「授業計画」(No.5), 「積極参加」(No.6)について, 「ややあてはまる」(4点)をそれぞれの比較値として一標本の t 検定を実施し, 母集

表 1 毎回の授業運営の概要

時間	授業運営内容	留意・危機管理事項
授業開始前 -0:00	<ul style="list-style-type: none"> 健康記録チェック（授業日をゼロ日として、3 日前までの体温・体調記録のチェック） 検温（施設への入室時に、額での非接触型体温計による） 検温チェック後、手指消毒（写真 1） 荷物置き場とする番号指示と記録（例：図 3 丸数字、写真 2） 卓球台の準備（倉庫への入室は 2 名以下） 	<ul style="list-style-type: none"> 担当教員はマスクとフェイスシールド着用 接触感染予防のため、更衣室のロッカーを使用せず、教場（実技実施場所）へ荷物を持参させる 荷物は約 2m 以上離れた指定位置に置かせる（図 3、写真 2）
授業開始 0:10-0:15	<ul style="list-style-type: none"> 本日の授業説明 学生個々が両腕を広げて、指先が届かない距離（2m 以上の距離をとる目安）で、フロアに着座 集合して説明を聞く時間は、私語厳禁を確認 	<ul style="list-style-type: none"> 他の授業科目あるいはその他の活動での更衣室利用状況が十分に把握できないため、1 クラスの人数を半分ずつに分け、更衣時間を 2 段階に設定することで、更衣時の三密を回避（利用状況が把握できた第 5 回目以降の授業では、開始時間を 0:00 に統一した） 2 段階に設定した理由は、授業担当教員は、授業実施場所から離れた場所にある更衣室の管理ができないため
基礎練習 0:15-0:40	<ul style="list-style-type: none"> 基礎練習（基礎打ち：2 分×10 回） 基礎練習を開始する卓球台の場所指定は、荷物置き場の丸数字と同じ番号とした フロア中央側に位置する番号の学生が、ラリーをする相手を変えるために、天井から見て時計回りに 2 分毎に移動させた 	<ul style="list-style-type: none"> マスク着用での実技であるため、高負荷な運動量にしない 運動量の多い学生と判断された学生には、体調管理の声をかける
休息 0:40-0:45	<ul style="list-style-type: none"> 水分摂取、休息时间 ラケットは最後にラリーをした卓球台に置く 	<ul style="list-style-type: none"> 運動量は少なく設定しているが、マスク着用での実技であるため、休息时间を兼ねて知識習得・試合の課題を解説する時間を設け、
感染症に関する 知識習得・試合 の課題説明 0:45-0:50	<ul style="list-style-type: none"> 手指消毒してから水分摂取（図 3、写真 2） 荷物を置いている場所での給水（2m 以上、他者から離れる） 給水している学生とは会話しない（会話による飛沫飛散の制御） 感染症に関する知識習得・試合での課題説明（表 2） 	<ul style="list-style-type: none"> 体調管理を振り替えるとともに、健康管理・感染予防行動を確認する時間とした

COVID-19 への感染症予防を踏まえた大学体育実技授業の実践研究

表 1 (続き)

試合 0:50-1:15	<ul style="list-style-type: none"> ・ 試合 (時間制) 1 試合 2 分から 3 分の試合時間の中で、得点を多く取った学生の勝利 試合時間は、毎回の出席者数によって変更 (例: 22 名出席のときは卓球台 11 台となり、最低 11 試合を実施できるように試合時間を設定した) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 試合は、基礎打ち練習を終了した位置から開始する ・ 11 点先取 2 ゲーム制にした場合、学生同士が接近して、得点、ゲーム数を確認する可能性があり、その不安全状態、不安全行動を回避するため、時間制による順位入れ替えとする (この運営により、テーブルを挟んだ対人距離を確保できる) ・ 図のアルファベット A から D までの 4 台の卓球台で開始する 8 名でジャンケンをさせ、勝ち残った学生がいる卓球台を 1 位グループとする ・ 1 位グループの卓球台を基準に、勝ち抜き戦の移動方向を決めるため、天井からみて U 字型で最下位の卓球台を決める (例: 卓球台 A が 1 位の場合は D が最下位) ・ 1 試合毎の勝敗によって、上位側、下位側の台に 1 台ずつ移動させる
授業終了前 1:15-1:20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 用具片付け (用具消毒) ラケットグリップ 卓球台の片付け時には支柱とネット ・ 授業の振り返り 開始時と同じように着座 手指消毒してから自分の荷物を触る指示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 用具片付け時にも密接にならず、一方向に並んで、順次返却させる ・ 2 限続きの授業のため、最初の 1 限目に履修している学生が卓球台準備、2 限目の学生が卓球台の片付けを行う ・ 卓球台の片付けも準備時の倉庫入室等の管理 (倉庫入室は 2 名まで) を実施 ・ ドアと窓等の施錠時には、鍵シリンダーとドアノブ等、接触箇所の消毒

表 2 授業カリキュラム

回	月日	基礎練習 (括弧内の回数は 2 分 毎での移動回数を示す)	
		本日の課題	感染予防講義 (知識習得)
		試合	
1	9/25	ガイダンス	<ul style="list-style-type: none"> 濃厚接触者の定義 (国立感染症研究所, 2020) 授業における三密 (厚生労働省, 2020b) 回避
2	10/2	ドライブ① (10 回) サービス・ルール シングルス 1 回戦	<ul style="list-style-type: none"> 飛沫感染の予防法 マスクの正しい使用法 接触感染の予防法
3	10/9	ドライブ② (10 回) リズム, 落下点, ドライブのラケットコントロール シングルス 2 回戦	<ul style="list-style-type: none"> 大学所在地の自治体における感染状況と予防行動
4	10/16	ドライブ③ (10 回) 三打目攻撃 シングルス 3 回戦	<ul style="list-style-type: none"> マスクによる飛沫防御の比率 (坪倉, 2020) 新型コロナウイルスの空気伝播に対するマスクの防御効果 (河岡, 2020)
5	10/23	ドライブ④ (2 回) ツッツキ① (2 回) カット① (6 回) ボールコントロール, 方向, 速さ, 回転 シングルス 4 回戦	<ul style="list-style-type: none"> ウイルス残存時間, 飛沫, 手指, 乾燥, エアロゾルとの関係 (国立感染症研究所, 2020 ; WHO, 2020)
6	11/6	ドライブ⑤ (2 回) ツッツキ② (2 回) カット② (6 回) リズム, ボール軌道 (低く), 打点 シングルス 5 回戦	<ul style="list-style-type: none"> COVID-19 の生存性に及ぼす温度の影響 (Chin et al., 2020 ; 野田, 2020)
7	11/13	ドライブ⑥ (2 回) カット③ (8 回) サービスバウンド位置 (6 領域), 相手の前後位置・姿勢 シングルス 6 回戦	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症 “いま” についての 10 の知識 (厚生労働省, 2020c)

表 2 (続き)

8	11/20	ドライブ⑦ (2 回) バックハンド・ドライブ① (8 回) ミスと得点差 シングルス 7 回戦	・感染者数と移動平均 (中川, 2020)
9	11/27	ドライブ⑧ (2 回) バックハンド・ドライブ② (8 回) 立ち位置と攻撃方向 シングルス 8 回戦	・屋内・車内と換気による空気の流れ, 立位・座位での飛沫 (鉄道総合技術 研究所, 2020)
10	12/4	ドライブ⑨ (2 回) スマッシュ① (フォア) (8 回) 攻撃とブロック シングルス 9 回戦	・ワクチンと臨床試験 (朝日新聞デジ タル, 2020)
11	12/11	ドライブ⑩ (2 回) スマッシュ② (フォア) (8 回) サーブ横回転とリターン方向 の関係 シングルス 10 回戦	・ワクチンと法整備・治験 (参議院, 2020)
12	12/18	ドライブ⑪ (2 回) スマッシュ③ (バック) (8 回) 対戦相手の情報蓄積 シングルス 11 回戦	・PCR 検査と濃厚接触者判定に関する 体験談の紹介
13	12/25	ドライブ⑫ (2 回) スマッシュ④ (対カット) (8 回) プレースタイル シングルス 12 回戦	・新型コロナ感染予防行動によるスト レッサーとストレス反応 (荒木, 2018)
14	1/8	フリー練習① (10 回) 総括① シングルス 13 回戦	・ストレス反応, パーソナリティとハ ーディネス (荒木, 2018)
15	1/15	フリー練習② (10 回) 総括② シングルス 14 回戦	・まとめ (全体の振り返り)

表 3 調査項目と平均および標準偏差と統計的検定の結果 (* : $p < .05$, ** : $p < .01$)

カテゴリー	No.	項目内容	$M \pm SD$	t	p
安全管理	9	この授業を安全に受講できている	2.60 ± 0.49	7.35	**
	3	授業開始前に、受講者全員に検温を実施することで、発熱のない人を確認していることが判った	2.50 ± 0.67	4.47	**
安心行動	5	授業前の検温後、授業中の水分摂取前など、担当教員から手指消毒を徹底した指示によって、他の受講生の感染予防行動を確認でき、安心して受講できた	2.50 ± 0.67	4.47	**
	8	授業終了前に、用具消毒を実施していたので、用具管理していることを知ることができ、毎週、安心して使用できた	2.50 ± 0.67	4.47	**
	10	この授業を安心して受講できている	2.50 ± 0.67	4.47	**
	7	水分摂取でマスクを外すときは、荷物を置いた場所で対人間距離を十分とって、会話せずに安心して水分摂取できた	2.50 ± 0.50	6.00	**
	2	更衣室の利用状況が判明するまでの数回の授業において、授業の開始と終わりの時間を柔軟に調整した配慮で、安心して更衣室を利用できた	2.30 ± 0.78	2.30	*
対人距離	1	荷物を置く場所を 3m 以上離れた位置に指定したり、授業内容で対人間距離を保つ授業運営であった	2.30 ± 0.78	2.30	*
	6	実技のときには、対人間距離を保つ工夫がされていた	2.30 ± 0.78	2.30	*
知識習得	13	この授業での「健康」に関する知識は必要である	2.50 ± 0.67	4.47	**
	4	授業ガイダンスで、感染予防策の知識確認の徹底をしていた	2.50 ± 0.67	4.47	**
情動	12	この授業内容は楽しい	2.50 ± 0.50	6.00	**
	14	この授業での「運動」に関する実技はストレス軽減になる	2.40 ± 0.66	3.62	**
	11	この授業内容に満足している	2.40 ± 0.80	3.00	**

団の平均値比較をした。自由記述の内容を分析するために、KH Corder (樋口, 2020) による共起ネットワークを用いて自由記述の内容の構成を解釈した。統計的な水準は、5%を有意、10%を有意傾向とした。

3 結果および考察

3. 1 授業運営・管理に関する評価

表3は、授業運営に関する統計的検定の結果を示している。表3上段から「安全管理」2項目、「安心行動」5項目、「対人距離」2項目、「知識習得」2項目、「情動」3項目について、「かなりあてはまる」(2点)と平均値の差があるかどうかを推定するため、一標本の t 検定の結果、全ての項目で有意差が認められた。

特に「安全管理」での授業全体に関する評価 (No. 9) と授業開始前の検温を含む健康チェック (No. 3)、「安心行動」での授業全体に関する評価 (No. 10)、他の受講生の手指消毒行動促進 (No. 5)、用具消毒の徹底による管理 (No. 8)、水分摂取時の感染予防行動促進 (No. 7)、「知識習得」での健康 (No. 13) と感染予防策に関する知識徹底 (No. 4) などが高く、次いで「安心行動」での更衣室利用のための授業開始・終了時間の柔軟な調整 (No. 2)、「対人距離」での荷物の置き場所 (No. 1) と実技時の対人距離 (No. 6) の管理および授業運営が高いことが認められた。また、授業の受講による「情動」の変化による楽しさ (No. 12)、ストレス軽減 (No. 14)、授業内容への満足の程度 (No. 11) も高いことが認められた。一方、自由記述における回答は得られなかった。

これらの結果は、「安全管理」を徹底した授業運営に基づき (図1の安全行動や対人距離)、安心して授業履修できていること (「安心行動」) をとれていること (図1の安全状態)、そしてその状態を担保する「知識習得」によって人的欠陥 (図1) の元になるヒューマンエラーのリスクを減らし、授業履修での楽しさや満足感によってストレス軽減になっていたと考えられる。

3. 2 授業カリキュラムと教員行動の評価

図4は授業履修者38名による授業カリキュラムの内容に関する評価および教員に関する評価の割合、表4は各項目の統計的検定の結果を示している。

「授業の進み具合は適切ですか」(No. 1) について、「適切」(3点)と平均値の差があるかどうかを推定するため、一標本の t 検定の結果、有意でなかった。「授業の内容は理解できますか」(No. 2)、「教員の声や話し方は聞き取りやすいですか」(No. 4)、「授業の進め方はシラバスなどあらかじめ告知された授業計画に沿ったものですか」(No. 5)、「あなたはこの授業にどの程度積極的に参加していますか」(No. 6) について、「ほぼあてはまる」(4点)と平均値の差があるかどうかを推定するため、一標本の t 検定の結果、有意傾向と有意差が認められた。ただし、「教室は静

穏な環境が確保されていますか」(No. 3) については、有意差が認められなかった。

図5は自由記述に関する内容分析の共起ネットワーク、表5は出現頻度の結果を示している。まず最も大きなサブネットワークとして、授業をノードとして「授業は生徒の自主性を重んじて実習している」(A) こと、「最初は寒いが動くことで発汗」(B) し、運動をノードとして「運動がリフレッシュになる」(C) などで構成される授業運営と運動による情動変化に関する構造が検出された。次に大きなサブネットワークは「換気のために窓を開ける」が「意外に程よい暑さである」といった施設環境に関するもの (D) であった。そして「毎週、ステップアップし、技を身につけられ」るように「教えるのが上手であった」という授業カリキュラムに関するネットワーク (E) が大きかった。残りの小さなネットワークでは、「得手、不得手に関係なく」(F)、「体育が1週間の楽しみであり」(G)、「自分が苦手でも」(H)、「友達が増え」(I)、「ゲーム時間が多く」(J) 楽しい、という構造が検出された。

これらの結果は、感染症予防のための授業運営・管理をしながらでも、授業進度については概ね適切であり、フェイスシールドやマスク着用をしながらでも学生への口頭での伝達を実施できていたこと、感染が拡大する以前に執筆したシラバスに対して感染予防による授業運営・管理を加味した最小限の修正に基づいて授業運営・管理できていたと考えられる。このような授業運営・管理であったにも関わらず、「生徒の自主的な取り組みを重視」し、「卓球が上手でなく」ても「毎週ステップアップしながら技能を身につける」授業カリキュラムが「1週間の間の楽しみ」であったと考えられる。さらに、2020年前期には高等教育機関においては遠隔授業が実施されたために、大学に通学して同級生と交流をする機会がなかった学期から、後期で面接授業が再開されたことをきっかけに「友達が増える」機会になっていた、と考えられる。また、教養の体育を受講したい学生は、自由記述の結果に「運動がリフレッシュになる」とあったように、面接授業の再開によって積極的に授業を履修していた (表4No. 6) と考えられる。しかしながら、三密のうちの一つである密閉空間を改善するための授業運営として、窓・ドアの開閉、さらには大型換気扇2機を利用していたことにより、静穏な環境を保持できなかったこと (表4No. 3) を学生が評価していたと考えられる。

4 まとめ

未曾有の社会的状況の中、高等教育機関の授業は、2020年度前期に開始の時期を遅らせて遠隔授業で開始された。それと同時に、全国的に緊急事態宣言が発出される状況になった。その後、感染拡大と縮小を繰り返しながら、感染が収束する見通しや、大学の面接授業での感染に関する明確な要因あるいは原因も見いだすのが困難な

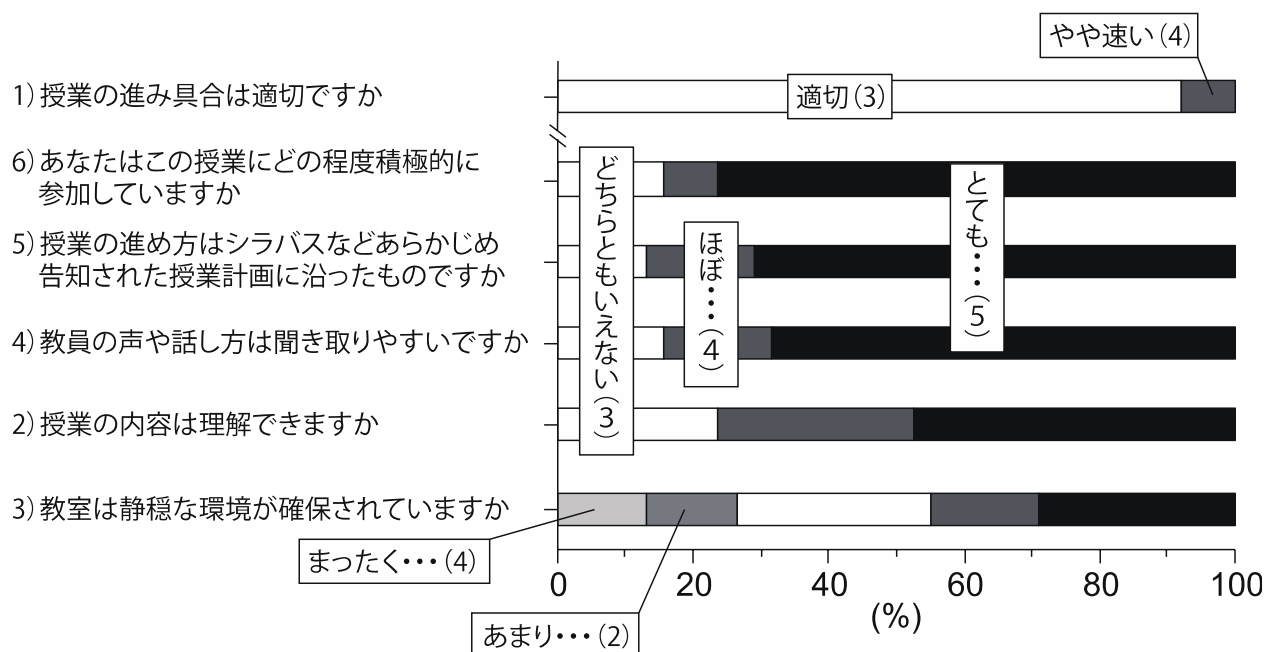


図4 学生による授業評価の割合

表4 授業カリキュラムの内容に関する評価および教員に関する評価 (+: $p < .10$, **: $p < .01$)

No.	項目内容	$M \pm SD$	t	p
1	授業の進み具合は適切ですか	3.08 ± 0.27	-21.06	
6	あなたはこの授業にどの程度積極的に参加していますか	4.61 ± 0.74	5.01	**
5	授業の進め方はシラバスなどあらかじめ告知された授業計画に沿ったものですか	4.58 ± 0.71	5.01	**
4	教員の声や話し方は聞き取りやすいですか	4.53 ± 0.75	4.32	**
2	授業の内容は理解できますか	4.24 ± 0.81	1.80	+
3	教室は静穏な環境が確保されていますか	3.34 ± 1.36	-2.98	

状況が続いた。それゆえ、各高等教育機関では、面接授業に恐怖を感じながら、受講生が安全、安心に履修できる授業カリキュラム構成や授業運営に苦心・苦慮されてきたと推察される。

本実践研究では、感染予防行動のために単に学生の行動制御をするのではなく、ハインリッヒのドミノ理論に基づいて人的欠陥を回避するための知識習得や授業運営による行動統制をすることでヒューマンエラーを避け、不安全行動や不安全状態を回避することを実践した。またリスク・マネジメント理論に依拠して、実技における学生の行動、授業内容、授業運営のチェック・サイクルを設けた。このような取り組みをしながらも、行動制御あるいは統制によって単に学生の活動を制限するのではなく、自己調整学習を達成できる自由度のある授業内容で構成した。その結果、学生は安全・安心した授業を履修できていること、知識習得による感染予防行動となっていたこと、自律的に

取り組む自己調整学習を認知した上で、授業を楽しんでいることが明らかになった。

表5 学生による授業評価での自由記述における抽出語

抽出語	出現頻度
楽しい	12
快適	3
感じ	3
運動	2
技	2
教える	2
自由	2
授業	2
窓	2
毎週	2

本研究は、実技実施にあたり、どのような判断基準をもって決定していくか、という非常に悩ましい学習現場での問題に、学術的根拠をもって実践的に取り組む過程を検討した。そのことが本研究の意義であると考えられる。しかしながら、学生の受講における行動の統制のために、試合ではシングルスのみを取り入れざるを得ず、ダブルスを学習するカリキュラムを取り入れなかったことが、今後、改善していくべき課題である。

受講生が授業を履修している際の様子や、本研究の結果を振り返ると、従前のカリキュラムと同等の内容を提供できていたとまで言えないだろう。しかしながら、一人の感染者もなく、しかも受講生が2020年度後期終了まで安心感および充実感をもって履修できていたことが垣間見られたことは、今後の実践研究に寄与する検討として意義があったと考えられる。

文献

- 荒木雅信 (2018) これから学ぶスポーツ心理学 (改訂版). 大修館書店.
- 朝日新聞デジタル (2020) 米モデルナのコロナワクチン、有効率94.5%:近く緊急仕様申請. <https://www.asahi.com/international/reuters/CRWKBN27W1RD.html> (参照日2020年11月17日)
- 朝日新聞デジタル (2021) 「感染者数の下げ止まり懸念」新型コロナで厚労省専門化組織. <https://digital.asahi.com/articles/ASPB5RQ4PBNUBJ001.html> (参照日2021年11月22日)
- Chin, A. W. H., Chu, J. T. S., Perera, M. R. A., Hui, K. P. Y., Yen, H., Chan, M. C. W., Peiris, M., and Poon, L. L. M. (2020) Stability of SARS-CoV-2 in different environmental conditions. *Lancet Microbe*, 1(1): e146. [https://doi.org/10.1016/S2666-5247\(20\)30003-3](https://doi.org/10.1016/S2666-5247(20)30003-3)
- ハインリッヒ:三村起一監(1951) 災害防止の科学的研究. 日本安全衛生協会, pp. 15-69.
- 樋口耕一 (2020) 社会調査のための計量テキスト分析 (第2版). ナカニシヤ出版.
- 星野敏男・金子和正監 (2011) 野外教育における安全管理と安全学習. 杏林書院, pp. 1-18.
- 海保博之 (1996) ヒューマン・エラー:誤りからみる人と社会の深層. 新曜社.
- 椿ちか子・高岡瑞季 (2021) 身体接触を避けた仲間と関わる大学ダンス授業の実践報告. *スポーツパフォーマンス研究*, 13: 269-290.
- 河岡義裕 (2020) 新型コロナウイルスの空気伝播に対するマスクの防御効果. <https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imsut/content/000003662.pdf> (参照日2021年10月23日)
- 国立感染症研究所 (2005) SARS (重症急性呼吸器症候群) とは. <https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/414-sars-intro.html> (参照日2021年11月22日)
- 国立感染症研究所 (2020) 積極的疫学調査実施要領における濃厚接触者の定義変更等に関するQ&A (2020年4月22日). <https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/2484-idsc/9582-2019-ncov-02-qa.html> (参照日2020年4月28日)
- 厚生労働省 (2017) 中東呼吸器症候群(MERS)に関するQ&A. https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansen-shou19/mers_qa.html (参照日2021年11月22日)
- 厚生労働省 (2020a) 海外の状況: 中華人民共和国湖北省武漢市における原因不明肺炎の発生について. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08767.html (参照日2020年4月23日)
- 厚生労働省 (2020b) 新型コロナウイルス感染症への対応について (高齢者の皆さまへ). https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/yobou/index_00013.html (参照日2020年10月10日)
- 厚生労働省 (2020c) 新型コロナウイルス感染症 “いま” についての10の知識. <https://www.mhlw.go.jp/content/000689773.pdf> (参照日2020年11月5日)
- 小山理子・溝上慎一 (2018) 「講義への取り組み方」と「アクティブラーニングへの取り組み方」が学習成果に与える影響. *日本教育工学会論文誌*, 41 (4): 375-383.
- 文部科学省 (2020a) 大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて (周知). https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf (参照日2020年10月18日)
- 文部科学省 (2020b) 令和2年度における大学等の授業の開始等について (通知). https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (参照日2020年10月20日)
- 中川透 (2020) 親子で学ぶニュースとデータ「平均」: 1) 数値ならして、傾向くつきり. 朝日新聞. <https://digital.asahi.com/articles/DA3S14894052.html> (参照日2021年5月5日)
- 奈須正裕 (2020) 個が自律的に学ぶ学習で3密を避ける. *教職研修*, 8: 24-25.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・谷本英彰・福地豊樹・上條隆・鬼澤陽子・中雄勇人・木山慶子・新井淑弘・小川正行 (2015) テキストマイニングによる大学体育授業の主観的恩恵の抽出: 性および運動・スポーツ習慣の差異による検討. *体育学研究*, 60: 27-39.
- 野田 衛 (2020) 新型コロナウイルスの基礎知識, 集団予防および生存性・不活化 (緊急特集版 新型コロナウイルス感染症(COVID-19): 防菌防黴の観点から). *日本防菌防黴学会誌*, 48 (9): 459-466.

大阪体育大学 (2021) 現在の活動制限一覧表.

<https://www.ouhs.jp/wp/wp-content/uploads/211019katsudouhyou.pdf> (参照日2021年11月23日)

Perlmutter, L. C., Monty, R. A., & Kimble, G. A. (1971) Effect of choice on paired-associate learning. J. Exp. Psychol., 91: 47-53.

参議院 (2020) 議案情報: 予防接種法及び検疫法の一部を改正する法律案.

<https://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/gian/203/meisai/m203080203001.htm> (参照日2020年12月10日)

鉄道総合技術研究所 (2020) 窓開け等による車内換気効果に関する数値シミュレーション (試算) (その2).

<https://www.mlit.go.jp/tetudo/content/001381148.pdf> (参照日2020年11月25日)

坪倉誠 (2020) 室内環境におけるウイルス飛沫感染の予測とその対策.

<https://www.r-ccs.riken.jp/outreach/formedia/200824Tsubokura/> (参照日2020年9月20日)

渡辺徹也・水藤弘史・杉浦春雄 (2020) 緊急事態宣言発令

下の保健体育教職過程における専門実技の開講形式の工夫. スポーツパフォーマンス研究, 12: 766-785.

WHO (2020) COVID-19 and food safety: guidance for food businesses.

<https://apps.who.int/iris/rest/bitstreams/1274400/retrieve#:~:text=Recent%20research%20evaluated%20the%20survival,24%20hours%20on%20cardboard> (参照日2020年10月25日)

全国大学体育連合 (2010) 大学体育の効果. 体育系学術団体からの提言2010: 21世紀の高等教育と保健体育・スポーツ (資料編).

<https://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/2da1b90b7e73d31340d5b614b30cdde5.pdf> (参照日2021年11月23日)

Zimmerman, B. J. (1989) Models of self-regulated learning and academic achievement. In: B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.) Self-regulated learning and academic achievement: Theory, research, and practice. Springer-Verlag. Pp. 1-25.

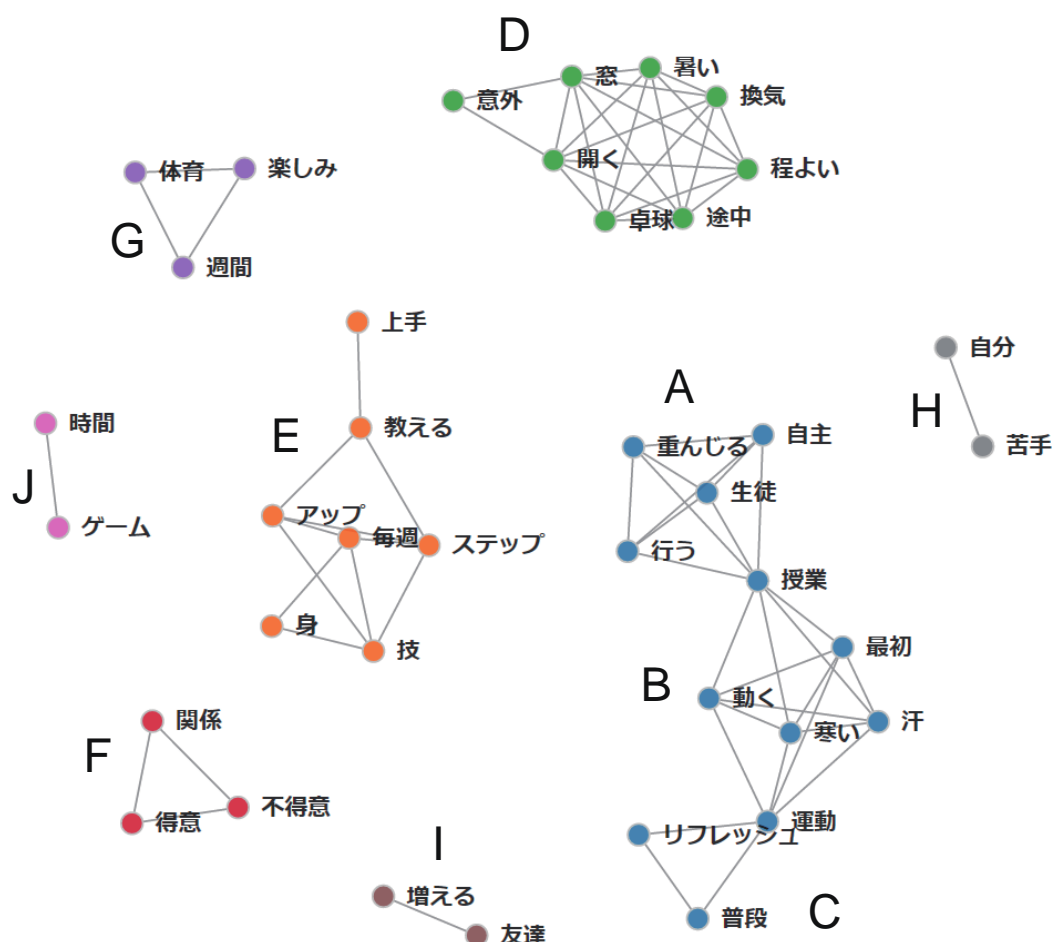


図5 学生による授業評価における自由記述の共起ネットワーク. アルファベットAからJについては本文参照.

Isoroku Yamamoto's military strategy in the outbreak of the Pacific War

Toba National College of Maritime Technology, Department of General Education

Associate Professor Takeshi Hashiyama

【あらまし】

1941(昭和16)年12月8日、日本時間午前3時19分(ハワイ時間の12月7日午前7時49分)、第1次攻撃隊がハワイオアフ島にある米軍基地攻撃を開始し、続く午前3時22分には、攻撃隊長淵田美津雄中佐が「トラトラトラ」(「われ奇襲に成功せり」の意味)を発信する。第1次攻撃隊が停泊中の米軍戦艦群や地上基地の航空隊などに痛打を与えた後、第2次攻撃隊が殺到して、追い打ちをかけた。この山本五十六が計画した真珠湾攻撃は、戦略・作戦的には、米太平洋艦隊主力の撃破と南方作戦への介入阻止という目的を達成し、戦術的には極小の損害で最大の成果を得た。ちなみに、この真珠湾奇襲攻撃の訓練は、鹿児島県の錦江湾を中心に、鹿児島県内各地で行われていた。

山本五十六が連合艦隊司令長官になる前、海軍次官を務めていた時代に、対米戦争につながる可能性が強い独伊との軍事同盟締結の動きに、徹頭徹尾反対していたことはよく知られている。しかし、海軍大臣及川古志郎大將は、元帥伏見宮博喬恭王軍令部総長の権威を借り、山本の疑義を無視して、海軍の総意は三国同盟承認であると押し切ってしまう。

その後、アメリカ艦隊の出撃を受けて立つという伝統的な戦争方針を根本から変えたのが山本案であった。真珠湾奇襲作戦の事実上の承認は、昭和16年9月24日に、あるいはそれ以前から徐々に、なし崩し的に行われていたのであるが、9月24日の特別討議に伝えられた山本の言葉によって、急速に実現へ向けて動くことになった。しかし、10月4日から2日間にわたって行われた鹿児島県鹿屋海軍航空隊での図上演習は、軍令部と連合艦隊の間の合意によって、開戦予定日は「アメリカ時間12月7日」、という想定で行われていた。

一方、戦争決意表明について近衛文麿首相が逡巡を見せた時、陸軍大臣東条英機は、会見を申し込んで態度の明確化を求めた。また、天皇を補佐し、海軍作戦決定の最高権限を持つ軍令部総長永野修身大將の発言から、その考え方の変化をたどり、開戦へ向かう経緯をみると、第1回御前会議の時とは違って、永野にとっての日米関係解決の唯一の道は、真珠湾攻撃によってアメリカ太平洋艦隊を撃滅することであった。ただ、9月6日の御前

会議で裁可されたのは、対米英蘭戦争を念頭に置いて「南方要域」確保の準備を進めると同時に、期限を定めてアメリカとの外交交渉を行うということであった。

他方、山本の主張は、当時の日本の生産力ではとうてい不可能な要求を突きつけることにより、対米戦争はその無理を通さなければ実行不可能であるような難事である、そうまでしてやり抜く覚悟が海軍中枢、ひいては政府にはあるのかと、間接的に戦争回避を訴えたのだと解釈されることが多かった。

1941 年 10 月、南部仏印進駐決定後の情勢の説明を受けるため、東京の海軍司令部を訪ねた山本は、及川海相、同年 4 月に伏見宮後任として軍令部総長になった永野修身大将、前年 10 月に航空本部長に就任した井上成美中将に迎えられた。その中での会合によると、戦争が現有兵力のみならず、相争う国民の経済力・生産力の激突となった以上、日米戦争によって、日本海海戦をモデルとするような艦隊決戦は生起しないとみていたのである。最終的に、日本が日米戦争に大きく足を踏み出したのは、1941 年 11 月 5 日の御前会議で「帝国国策遂行要領」が採択された時であった。山本五十六は、9 月 6 日の御前会議における天皇の意向である「外交を優先させよ」という言葉に耳を傾けることはなかったし、10 月 17 日に天皇が東条英機首相に対して示した「戦争計画の白紙還元」のことも気にならなかった。

Introduction

Isoroku Yamamoto (1884-1943)¹ is said to have been opposed to the war with the United States because he had also served as a military attaché in the United States and was familiar with the capabilities of the United States. He was therefore against the Tripartite Pact of Japan, Germany and Italy². However, when US-Japan relations became tense, Yamamoto made a plan to attack Pearl Harbor, the base of the US Pacific Fleet, and made a forcible effort to realize the plan.

This raises the question of whether Yamamoto really wanted peace. On the other hand, he is said to have hoped for peace and made efforts to realize it, but in reality he is also the person who made the utmost efforts toward the realization of the war with the United States.

¹ 日本の海軍軍人。最終階級は元帥海軍大将。第 26,27 代連合艦隊司令長官。ソロモン諸島ブーゲンビル島上空で戦死。新潟県長岡市出身。

² 1940 年 9 月 27 日にドイツのベルリンで調印された日本、ドイツ、イタリアの軍事同盟。ヨーロッパ戦争、日中戦争に参戦していない国（主としてアメリカ）からの攻撃に対する相互援助を確約した。

How was the plan for the attack on Pearl Harbor, which Yamamoto submitted to the Imperial Japanese Navy General Staff, actually adopted this time? When exactly is that? At that time, Osami Nagano (1880-1947)³, who was the chief executive officer of the military command and the president of the Imperial Japanese Navy General Staff, mentioned what role he played. Through this, I will also discuss that if Yamamoto's plan did not exist, or if he was not so obsessed with the realization of the plan, it would have been difficult to realize the war with the United States.

There are many previous studies on the causes of the war between Japan and the United States. However, I think there are still many unclear points about the role played by Isoroku Yamamoto. That is the reason why I wrote this essay on Isoroku Yamamoto's responsibility for opening the war, which was not often mentioned in the past.

1. Yamamoto appealing to avoid the start of the war between Japan and the United States

Before Isoroku Yamamoto became Commander-in-Chief of the Allied Fleet, he often opposed the move to conclude a military alliance with Germany and Italy, which is likely to lead to a war against the United States, when he was the Under Secretary of the Navy⁴.

However, in 1940, this Axis line regained its strength. Needless to say, Germany surrendered the three Benelux countries and France, and won a spectacular victory to expel the British expeditionary force from the continent.

If Japan tied up with Germany, the United States and Britain couldn't make a move, and when the long-desired advance to the south was fulfilled, the government and the commander were inclined to conclude an alliance, and the Navy also compromised.

Isoroku Yamamoto, who was inaugurated as Commander-in-Chief of the Allied Fleet, was also present at the summit meeting held at that time to determine the attitude of the Navy. At that time, Yamamoto brought materials comparing the military strength of Japan and the United States with the supply of strategic supplies. Based on this, he intended to insist that an alliance that would lead to a war with the United States was impossible because Japan's national power had no chance of a war against the United States.

³ 第16代軍令部総長。海軍の連合艦隊司令長官、海軍大臣、軍令部総長をすべて経験した唯一の軍人。千葉工業大学の創設者でもある。A級戦犯の容疑で東京裁判中に急性肺炎で死去。高知県出身。

⁴ 1936年11月25日、日独防共協定が締結された翌月の12月1日に、山本は海軍次官に就任した。

However, the Navy Minister, General Oikawa Koshiro (1883-1958)⁵, borrowed the authority of Gensui Prince Fushimi Hiroyasu (1875-1946)⁶, the President of the Imperial Japanese Navy General Staff, and ignored Yamamoto's doubts, and the Navy's consensus was approved by the Tripartite Alliance. If it is, it will be pushed out.

After the meeting, Oikawa, who was blamed by Yamamoto, explained, "There are unavoidable circumstances, so please forgive me." On the other hand, it is said that there was one act in which Yamamoto screamed, "Is it okay to forgive you?" However, Yamamoto's anger was vain, and on September 27, 1940, the Tripartite Pact of Japan, Germany, and Italy was signed, and a military alliance was formed. By joining the block with the United States and Britain as its potential enemy, Japan went beyond the so-called "irreversible point" and proceeded to the war with the United States.

In fact, the conclusion of the Tripartite Pact has hardened America's attitude. US President Franklin D. Roosevelt (1882-1945)⁷, who won three elections in 1940, will further strengthen his confrontation with Japan, Germany and Italy.

Under these circumstances, it was the invasion of Southern French Indochina (French Indochina) that was carried out on July 28, 1941, that made the confrontation between Japan and the United States decisive. In response to these movements, the United States has put great pressure on Japan's assets in the United States on July 26, as well as the decision to ban oil to Japan on August 1.

If the oil supply can be stopped, the combined fleet in Japan will not be able to move, and the Japanese economy will eventually collapse. Before that, there was a majority in the government and the commander's office that the United Nations should bet on the war.

In such a dangerous flow, Isoroku Yamamoto's concerns only deepened. However, although the Commander-in-Chief of the Allied Fleet is at the top of the field, he does not have the authority to participate in alliance policies or decisions on Japanese warfare. Yamamoto had no choice but to continue to comment, "We should avoid the Japan-US war, which is expected to be defeated."

⁵ 日本の海軍軍人。第 2 次・第 3 次近衛内閣で海軍大臣。第 18 代軍令部総長。新潟県出身。

⁶ 日本の皇族。海軍大臣。艦長や艦隊司令長官を務めるなど、皇族出身の軍人の中では実戦経験が豊富であった。東京都出身。

⁷ 第 32 代アメリカ合衆国大統領（在位：1933-1945）。彼のニューディール政策と第二次世界大戦への参戦による戦時経済は、当時のアメリカ経済を世界恐慌のどん底から回復させたと評価される。

2. Isoroku Yamamoto's military strategy in 1941

Isoroku Yamamoto sent a letter to the Navy Minister Koshiro Oikawa in January 1941. And whether or not America would advance to the vicinity of Japan, instead of waiting forever for the American fleet, ahead, Japan should go to Pearl Harbor. He first clarified these ideas and giving a direct blow, and clarified the method.⁸

The Navy must be in the middle of 1945, when the power of 70% and 5 minutes is still maintained if it is to fight the United States, it is too late in 1942, and the chance of "winning" is far away. These opinions came out. Yamamoto's plan is a water of invitation for these forces in the Navy who had no means, methods, or even ideas when it came to attacking from Japan, fearing that they would miss the opportunity of 70% and 5 minutes. At the same time it was like a ship on the way.

The Army, who saw the surprise attack on Hawaii as necessary to secure the south, began to show interest in it. The Navy will move on to attack the US military base in the Philippines after Hawaii. After the destruction of Hawaii's bases, there are not many forward bases in the Philippines. This should make it even easier to move on to the Dutch East Indies Campaign to secure oil. Even for the Army, which cannot capture the South without the cooperation of the Navy, the plan to seize the Malay Peninsula, Singapore, and the Dutch East Indies Campaign and secure resources in this direction has become concrete.

It was Yamamoto's plan that made the Navy and the Army decide to fight against the United States. Japanese want to secure resources in the south, but Japanese have put an end to the Army's hesitation that the US Navy in the Philippines may interfere if we advance, and calm the anxiety that the Navy may lose 70% and 5 minutes of superiority. It was Yamamoto's idea that gave him "confidence", encouragement, and encouraged action. Above all, it was Yamamoto's proposal that fundamentally changed the traditional war policy of standing in response to the sortie of the American fleet.

Also, US President Roosevelt is overwhelmingly supported by the public in America, Britain will be able to withstand long-term wars, and Germany's invasion of the Soviet Union is not as favorable as Hitler advertises. Ignoring the calm suggestion of the Ambassador to the United States, Kichisaburo Nomura (1877-1964)⁹, that Japan should not rush for a month or two, but wait for a while, and secure the operation itself to the south. It

⁸ 防衛庁防衛研究所戦史室『ハワイ作戦』朝雲新聞社、1967年、82-85頁。

⁹ 昭和初期に活躍した日本の海軍軍人、外交官、政治家。国際法の権威として知られ、第2次近衛内閣の時駐米大使に任命され、真珠湾攻撃の日まで日米交渉に奔走して戦争回避を模索した。和歌山県和歌山市出身。

was Yamamoto's plan to take action anyway, without clarifying its main purpose, whether it was a premise for the United States or the destruction of the US Pacific fleet.

By the way, the de facto approval of the Pearl Harbor surprise attack operation was carried out gradually and in a destructive manner on or before September 24, 1941, but it was reported to the special discussion on September 24. Yamamoto's words made us move rapidly toward realization. It was not decided after discussions at a specific date and time and at a meeting. It seems that it was gradually moving toward implementation before being known to it. This September 24th was the day when the Imperial Japanese Navy General Staff held a special discussion on the adoption or rejection of the Hawaii Operation Plan. The surprise attack plan was not approved in the special discussion on the same day. However, the Imperial Japanese Navy General Staff had already acknowledged the need for a surprise attack on Hawaii at this time. The reason they acknowledged the necessity but did not approve it was because they were concerned about the lack of air power when conducting the Southern operation.

However, due to an agreement between the Imperial Japanese Navy General Staff and the Combined Fleet, the map exercise at the Kanoya Navy Air Group in Kagoshima Prefecture, which was held for two days from October 4, is scheduled to start on "December 7, US time".¹⁰ It was done on the assumption. Also, in the exercises held at Army War College from October 1st to 5th, the start of all military operations was to be carried out in conjunction with Operation Z, a surprise attack on Hawaii.¹¹ In this way, the Navy "decided that the first day of the war would be December 8 by the beginning of October or around the end of September."¹²

In addition, it is probable that Yamamoto started negotiations with the Imperial Japanese Navy General Staff in May 1941, or in fact, at a much earlier time, had already reached out to all directions and started a series of preparations.¹³

By the way, in October, when it was decided to postpone the war start date to December, a general national policy including the war was reexamined. Hideki Tojo, who was appointed Prime Minister on behalf of Fumimaro Konoe on October 17, began to review the policy according to the Emperor's intention to reconsider from a blank slate without being bound by the decisions made so far. Tojo had the items to be reexamined

¹⁰ 『開戦経緯 5』 52 頁。

¹¹ 防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部 2 1941 年 12 月まで』朝雲新聞社、1968 年、47 頁。

¹² 『開戦経緯 5』 98 頁。

¹³ 『開戦経緯 5』 124 頁。

created on the 17th, and from October 19th, the relevant departments were asked to carry out a substantive examination.

However, the General Staff Headquarters and the President of the Imperial Japanese Navy General Staff were against the reexamination. Nagano even says that if it comes to stopping the war, he will "play the war and quit his job."¹⁴

Regardless of the Emperor's intention, the Army announced on October 20th, and the Navy also announced the "Imperial Japanese Navy Operation Plan" including the attack on Hawaii on October 20th, and the attack target and the attack start date and time will not change. It confirmed them each other. Both the Army and the Navy had received that if the reexamination was the Emperor's communication, there was no way to do it, but they were preparing for the start of the war on December 8 so that the operation would not be affected.¹⁵

The conclusions of the reconsideration will be summarized at the conference that began on November 1, where diplomatic negotiations with the United States will be terminated at midnight on December 1, and the war will start in early December as scheduled. ¹⁶It was accepted. In addition, Osami Nagano spoke to the Emperor on November 3 to explain for the Gozen Kaigi on November 5, and announced that the plan for the air raid on Hawaii and its implementation date would be December 8, Japan time.

In this way, the Pearl Harbor surprise attack plan had begun to run on the track laid by Isoroku Yamamoto. If there is no record of debate over the pros and cons of a surprise attack and you are specifically asked when this plan was approved and approved, it would be appropriate to answer "unknowingly." In other words, the war with the United States was decided "unknowingly" by Yamamoto's efforts.

On the other hand, when Prime Minister Fumimaro Konoe (1891-1945)¹⁷ showed a patrol about expressing his determination to war, the Minister of the Army Hideki Tojo (1884-1948)¹⁸ applied for a meeting and asked for a clarification of his attitude. It is a

¹⁴ 軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌』上、錦正社、1998年、171頁。

¹⁵ 『開戦経緯5』184-217頁。

¹⁶ 『開戦経緯5』244頁。

¹⁷ 日本の政治家。第34・38・39代内閣総理大臣。1945年服毒自殺により死去。東京都出身。

¹⁸ 日本の陸軍軍人、政治家。第40代内閣総理大臣（在位：1941-1944年）。1944年から陸軍大臣と参謀総長も兼任。その後、連合国によって行われた東京裁判を経て、1948年絞首刑で死去。

meeting at the Prime Minister's Office on October 7, which leads to the resignation of the guard. Tojo told Konoe at this time, "Especially in the war against the United States, there are many expectations for the initial surprise attack operation," not only being aware of the existence of the Hawaii surprise attack operation, but also implementing it. He points out the importance.

On the other hand, Konoe only made an unclear remark, "It is called a surprise attack, but the surprise attack may not be possible." At the Gozen Kaigi meeting on September 6, one of the Japanese battles was decided on October 15, and in the case of a battle, around November 15 was set as the opening day, but the deadline for making that decision is imminent. Konoe says it is short of time and he may not be able to do it. Tojo replied, "No, I still have the chance. Never give it up." ¹⁹Tojo, who is as eloquent and has a firm belief as Isoroku Yamamoto, is working hard to realize the Navy's operations under the influence of Yamamoto. In other words, Tojo emphasized that the whole country had to make an effort to realize the chance of a surprise attack on Pearl Harbor.

3. Influence of the remarks of Osami Nagano, President of the

Imperial Japanese Navy General Staff

From the remarks of General Staff Osami Nagano, who assists the Emperor and has the highest authority to decide on naval operations, I will follow the changes in that way of thinking and see how the war began.

Nagano was appointed to the Imperial Japanese Navy General Staff as President on April 9, 1941. In a report prepared on June 5, the same year, Nagano concluded that "the Navy should decide to war against the United States and, based on that determination, advance into Thailand and Southern French Indochina."²⁰In other words, the military need to advance into the southern part of French Indochina was agreed with the Army, and in the Cabinet decision on July 1, in order to achieve the plan with the main purpose to the south, "Nagano's basic idea of "eliminating any obstacles" was included. In addition, at the Gozen Kaigi meeting on July 2, Nagano acknowledged that the advance to the south could lead to a battle with the United States, and then strengthened preparations "with the determination to quit the battle." He explained like this.²¹

On the one hand, Navy Minister Koshiro Oikawa also believes that even if the Japanese

¹⁹ 『開戦経緯 5』 106-107 頁。

²⁰ 『大本営陸軍部 2』 283 頁。

²¹ 『開戦経緯 4』 191-196 頁。

army advances to the French Indochina, it will not develop into a war with the United States, and Shinichi Tanaka (1893-1976)²², the chief of the operations department of the Army General Staff, also said. He predicted that even if Japan advanced to the south, the US Navy would not make every effort to arrive.

On the other hand, Nagano's idea is basically to emphasize "attacking battle". It's a little different from the idea of Isoroku Yamamoto. He believed that he should add a surprise on the base of the US Navy which has not taken any apparently hostile armed action against Japan.

In Japan at that time, the atmosphere that a war with the United States was inevitable became rich. Because the United States does not understand Japan's position. Not only Nagano, but also military personnel and the general public felt that the limit of patience was approaching for the "domineering" of the United States.

As time goes by, the Japanese side becomes even more inferior. For Nagano, who insists that "if you fight, it is now", Isoroku Yamamoto's plan was a concrete indication of the method.

It cannot be clearly pointed out when Nagano will be inclined toward Yamamoto's plan to attack the United States. Although it is not clear whether Nagano's words which he had given to the people around him after the Gozen Kaigi, "The war between Japan and the United States has already been decided," refers to the Philippines or Hawaii, it seems that Nagano was paying attention to Yamamoto's Hawaii attack plans which had already submitted to the Imperial Japanese Navy General Staff.

On September 6, 1945, at the 2nd Gozen Kaigi, Nagano told the emperor that he was determined not to lose his chance.²³ Unlike at the time of the first Gozen Kaigi, Nagano's only way to resolve US-Japan relations was to destroy the US Pacific Fleet by attacking Pearl Harbor. However, what was approved at the Gozen Kaigi on September 6 was to prepare for securing the "Southern Key Area" with the Anglo-Dutch War in mind, and at the same time, set a deadline for diplomatic negotiations with the United States.

However, at this September 6th Gozen Kaigi, Emperor Showa broke the precedent and appealed for the idea of Emperor Meiji, who emphasizes peace between countries, and there was a prospect that the direct talks between Konoe and Roosevelt may improve US-Japan relations. Since diplomacy and war preparations were to proceed in parallel, even Nagano could not completely shift to Yamamoto's plan, ignoring the international situation.

However, shortly after, around the end of September 1941, the possibility of solving the problem through discussions with the US side was far away due to the unsuccessful proposals

²² 大正・昭和時代の「陸軍軍人。最終階級は陸軍中將。北海道出身。

²³ 『大本營陸軍部2』422-433頁。

for the Japan-US summit and the proposals for the summit meeting between the two countries, which had been continued since spring.²⁴By this time, the attack on Pearl Harbor had emerged as the only realistic alternative to the Japan-US reconciliation, not only for Nagano but also for his military command.

4. Yamamoto's anguish

Yamamoto has not entirely taken any steps in the battle against the United States, which has finally become a reality. Since he was in the post of Chief of Aviation Headquarters and Deputy Secretary of the Navy, he has been preparing for total war, such as deep-depth air power development through the promotion of civil aviation.

From that point of view, it is said that he had requested the central government to own 1,000 fighters and 1,000 medium-sized attack aircraft immediately after the formation of the Tripartite Pact. Traditionally, Yamamoto's claim is that the war against the United States is a difficult task that cannot be carried out without overdoing it by imposing demands that were impossible with Japan's productivity at that time. It was often interpreted as an indirect appeal for war avoidance, as if the Navy was prepared to do so.

However, looking at the exchanges with the Navy Central after the invasion of Southern French Indochina, it seems that Yamamoto was serious.

It is almost impossible to have 2,000 fighters and medium-sized attack aircraft, but no matter how hard you try, you will have that much air power. Then, in the critical period from 1940 to 1941, the odds of a war against the United States will be very small.

Above all, Yamamoto thought that if Japan had that much air power, it could expect a deterrent effect against the United States, and hopefully it could block the entry into the war in the United States.

But, Yamamoto soon learned that his hope was not recognized at all.

In October 1941, Yamamoto visited the Navy General Staff in Tokyo to receive an explanation of the situation after the decision to move to Southern France. And in April of the same year, Yamamoto was greeted by Okikawa, the Navy Minister, Osami Nagano who became the president of the Imperial Japanese Navy General Staff as the successor to Prince Fushimi, and Nakamasa Inoue (1889-1975)²⁵who became the general manager of the Aviation Headquarters in October of the previous year. Inoue gave a desperate answer to Yamamoto, who asked about the current state of aviation armament, which is an urgent issue.

²⁴ 『開戦経緯 5』 4 頁。

²⁵ 日本の海軍軍人。最終階級は海軍大将。日本の海軍で最後の海軍大将に昇進した二人の軍人のひとり。宮城県仙台市出身。

"The Aviation Headquarters is working hard, but it doesn't go as planned, and to be honest, there has been little progress to be seen since the time of Secretary Yamamoto's deputy minister, such as aerial torpedoes and armor-piercing bombs."

Yamamoto had to realize that he could not be given the air power he had envisioned and was ordered to carry out the Japan-US war with the existing battleships and aircraft. For Yamamoto, it is nothing but a defeated war.

Despite Yamamoto's concerns, Japan is on the road to the start of the war against the United States. As Commander-in-Chief of the Allied Fleet, Yamamoto also had to think about how to fight this worst scenario.

Until then, the so-called "declining interception" strategy has been pursued for many years as a measure that the Japanese Navy should take in the case of a war against the United States. By submarines and aircraft, it gradually destroys the U.S. fleet moving westward in the Pacific Ocean, and if possible, when it becomes advantageous to the Japanese side, the main force intercepts in the sea near the mainland and it aims to destroy the US. fleet in the Battle of Tsushima fleet decisive battle.

However, Yamamoto didn't think it would succeed. In the document "Matters of Warfare Training Operation Policy, etc." that he created on January 7, 1941, such a situation is pointed out nakedly.

「作戦方針に関する従来の研究は、これまた正常堂々たる迎撃主作戦を対象とするものなり。しかし、図上演習等の示す結果を觀るに、帝国海軍はいまだ一回の大勝を得たことなく、このまま推移すれば恐らくじり貧に陥るに陥るにあらずやと懸念せらるる情勢において演習中止となるを恒例とせり」²⁶

In addition, Yamamoto did not think that the outcome of the war could be determined by the victory of the fleet decisive battle in the era of "total war".

The recruitment system has allowed a large number of troops to secure a huge supply of weapons and supplies due to increased productivity-in other words, the war is not only the current troops, but also the economic power and production of the competing people. Since it was a clash of forces, it was thought that the Japan-US war would not cause a fleet decisive battle modeled after the Battle of Tsushima.

5. After meeting on November 5, 1941

Japan made a major step into the US-Japan war when the "Imperial Policy Implementation Guidelines" were adopted at the Gozen Kaigi on November 5, 1941. Until

²⁶ 大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書 堀悌吉資料集』、第一巻、大分県教育委員会、2006年。

then, the national policy had some sort of loophole in its determination to fight the United States, but this national policy had a clear deadline when it would be armed if diplomatic negotiations were not established by December 1.

Why was this national policy decided? The Hideki Tojo Cabinet, which was formed on October 18, conducted a national policy review throughout October and reached a conclusion at the liaison meeting held on November 1. On the day of the event, three options were prepared: (1) Wo-Wood, (2) Immediate decision to open the war, and (3) If diplomatic negotiations were not established, the war was opened, and (3) was selected.

So was Japan likely to win the war? Osami Nagano, the president of the Imperial Japanese Navy General Staff, explained that there is no reliable solution, so it will be a long-term battle, and the game will be determined by the total war of the nation and the transition of the world situation. It is clear that the Japan cannot win the US in terms of physical quantity, and in short, it depends on spiritual strength and Germany. It is hard to imagine entrusting the fate of the nation to such a thing. In fact, Nagano gave a similar explanation to the Emperor in the news of the freeze on Japanese assets in the United States at the end of July 1941, but Emperor Showa criticized Nagano's ideas.

However, at the Gozen Kaigi meeting in November, no one disagreed with Nagano's explanation. That was because options other than war could not envision a brighter future than war. The war against the United States was chosen not because it was pursued for that purpose, but because it was better than other plans. In order to enable a long-term battle of occupying the south such as Indonesia and transporting the resources obtained there to Japan to cultivate the force, a transportation route must be secured. It was also necessary for the international environment to improve, that is, Germany's victory, at least undefeated, and the maintenance of Soviet neutrality. If any one of them is wrong, the undefeated myth will collapse, but in reality, all of them have the opposite result to Japan's desire.

On the other hand, the military insisted, "The import of goods has stopped, and after a year and a half, the oil will run out and the Japanese army will be stuck. If Japan is blamed at that time, there will be no lumps." But is America really attacking? Nagano pushed through with "unknown" to the relentless question of Okinori Kaya (1889-1977)²⁷. Kaya and Foreign Minister Shigenori Togo (1882-1950)²⁸ argued that "the United States is unlikely to attack, so there is no need to start a war immediately." In response, Teiichi Suzuki, President of the

²⁷ 日本の大蔵官僚。政治家。退官後も東条内閣でも大蔵大臣を務めており、戦時財政を担った中心人物の一人。広島県広島市出身。

²⁸ 日本の外交官、政治家。太平洋戦争開戦時及び終戦時の日本の外務大臣。鹿児島県日置市出身。

Planning Institute (1888-1989)²⁹, said, "I tried to convince the two who oppose it with the wishful thinking that war would improve in terms of materials. If they had continued to oppose it, the decision to open the war would not have been possible."

However, as Foreign Minister Togo entrusted his hopes for a solution in diplomatic negotiations, the situation began to turn. The biggest barrier to negotiations was the principle of withdrawing troops from China. The Army insisted that "withdrawal would shake the backbone of Japan's continental policy," and forced the former Konoe Cabinet to collapse. Japan dominates the Chinese market because of its military power, and if the United States principle of open doors and equal opportunity is applied, Japan will be expelled from the Chinese market. However, Foreign Minister Togo argued that withdrawal would be economically better. In light of Japan's economic development after the war, Togo has a share, but it did not break the common sense of the surroundings.

In conclusion

Isoroku Yamamoto told the Imperial Japanese Navy General Staff twice on September 24th and October 19th, 1941, that he would "bet a job" for the surprise attack on Pearl Harbor. The President of the Imperial Japanese Navy General Staff twice accepted the request, saying that he was so "firmly determined".³⁰

It is no exaggeration to say that the realization of the Japan-US war was Yamamoto's "firm belief", but his "firm belief" can be summarized in the following two points according to a letter addressed to Navy Minister Oikawa. First, he thought that if the attack were to be realized, the United States would be in a difficult situation for the time being and could demoralize the American people. The second belief is that destroying the US Pacific Fleet must be able to prevent air raids on mainland Japan.³¹

This first "decline in American morale" did not actually occur. The attack on Pearl Harbor rather helped to unite American national opinion. US President Roosevelt said in a speech to Congress the day after the attack and to the public two days later, "The war with Japan will be long-term and will expand on a global scale. Yamamoto's plan for a short-term decisive battle was destroyed when he said "this outlook" and called for "let's aim for the final victory no matter how difficult it may be."

²⁹ 日本の軍人、陸軍中将。東条英機側近の一人。A級戦犯として起訴された人物としては、唯一平成まで存命した最後の生き残りであった。千葉県出身。

³⁰ 防衛庁防衛研究所戦史室『ハワイ作戦』朝雲新聞社、1967年、107頁。

³¹ 『ハワイ作戦』534頁。

The second of Yamamoto's beliefs, that is, the large-scale bombing that burns down the cities of Japan, has secured ground bases in Saipan and Guam, and the United States has continuously dispatched a total of 30,000 B-29s. It was only possible after that. In other words, it was rather Yamamoto who made the excuse for "burning out the big cities."

By doing this, it can be seen that Yamamoto's "belief" consisted of unfounded and wishful thinking. As a remorse for the military commanders at that time, "The Navy did not have a grand strategy. Therefore, it was just swept away by the flow. The situation was Yamamoto's only push, and the war went on."³²I look back. In any case, it can be said that the tactical success of the attack on Pearl Harbor must be said to be a strategic blunder.

Isoroku Yamamoto did not listen to the Emperor's intention to "prioritize diplomacy" at the Gozen Kaigi on September 6, and on October 17, the Emperor told Prime Minister Hideki Tojo. Yamamoto didn't care about the "return of the blank sheet of the war plan" shown above. However, Yamamoto does not say, "If Japan carries out a surprise attack on Pearl Harbor, it will beat the United States." If so, what is the reason for dare to provoke the United States for Yamamoto's "firm belief" that is unfounded and has no prospect of victory? One of the reasons, which may sound paradoxical, is that it was something that Japan knew was going to lose. In other words, we won't be able to rule out the possibility that the United States would have been planning to fight back if Japan took the first step.



山本五十六元帥海軍大将



F.D.ローズヴェルト
第32代米国大統領

³² 戸高一成編『証言録 海軍反省会2』PHP 研究所 2011年、21頁。



永野修身軍令部総長



東条英機陸軍大臣兼首相



近衛文麿首相

【参考文献】

- ・ 防衛庁防衛研究所戦史室『ハワイ作戦』朝雲新聞社、1967 年。
- ・ 防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部 2 1941 年 12 月まで』朝雲新聞社、1968 年。
- ・ 防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯 4』朝雲新聞社、1974 年。
- ・ 防衛庁防衛研究所戦史室『大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯 5』朝雲新聞社、1974 年。
- ・ 日本国際政治学会 太平洋戦争原因研究部編『太平洋戦争への道 開戦外交史』、新版、全 8 巻、朝日新聞社、1987-1988 年。
- ・ Chapman, John W(ed.&tr.), *The Price of Admiralty. The War Diary of the German Naval Attach in Japan, 1939-1943*, Vol.4, Ripe, 1989.
- ・ 麻田貞雄『両大戦間の日米関係 海軍と政策決定過程』、東京大学出版会、1993 年。
- ・ 軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌』上、錦正社、1998 年。
- ・ Morison, Samuel Eliot, *History of United States Naval Operations in World War II, Vol.III, The Rising Sun in the Pacific: 1931-April 1942*, reprint-ed, Edison, NJ, 2001.
- ・ 大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書 堀悌吉資料集』、第一巻、大分県教育委員会、2006 年。
- ・ 戸高一成編『証言録 海軍反省会 2』PHP 研究所 2011 年。
- ・ 「歴史読本」編集部編『日米開戦と山本五十六 日本の論理とリーダーの決断』、新人物往来社、2011 年。
- ・ 工藤美知尋『山本五十六の真実 連合艦隊司令長官の苦悩』、潮書房光人社、2015 年。

研究活動記録

2020年10月1日から2021年9月30日までに発表した研究活動記録

- 〔著〕 著書（翻訳書を含む）
- 〔論〕 論文（研究報告・総説・報告・解説を含む）
- 〔学〕 学会発表（学会及び講習会にかかる概要・要旨・予稿集を含む）
- 〔外〕 学外各種委員会研究（研究会にかかる概要・要旨・予稿集を含む）

和泉充

- 〔論〕 “Double armature HTS bulk synchronous machine,” Takei S, Izumi M, Yamaguchi K, Ida T and Shaanika E : 2021 Journal of Physics: Conference Series, 1975, 6pp, Article number 012034. DOI:10.1088/1742-6596/1975/1/012034
- 〔論〕 “Waveform control pulsed magnetization of GdBaCuO bulk using negative feedback at 60 K,” Caunes A, Watasaki M, Izumi M, Ida T : 2021 IEEE Transactions on Applied Superconductivity, 31, Issue 5, August 2021, 5pp, Article number 9372771. DOI:10.1109/TASC.2021.3064545
- 〔論〕 “Investigating the flux jump behavior during single waveform control pulsed field magnetization of GdBaCuO superconducting bulk,” Caunes A, Ida T, Watasaki M, Izumi M : 2021 Journal of Physics: Conference Series 1975, 6pp, Article number 012018. DOI:10.1088/1742-6596/1975/1/012018
- 〔学〕 Takei S, Izumi M, Yamaguchi K, Ida T, Shaanika E : “Double armature HTS bulk synchronous machine,” 15th European Conference on Applied Superconductivity (EUCAS2021), ID# 408, On-line presented September 5-9, Moscow (Russia) 2021.
- 〔学〕 Ida T, Caunes A, Imamichi H, Kawasumi N, Izumi M : “Waveform control pulsed magnetization of GdBaCuO bulk at operating temperature of superconducting rotating machine,” 15th European Conference on Applied Superconductivity (EUCAS2021), ID# 464, On-line presented September 5-9, Moscow (Russia) 2021.
- 〔学〕 Caunes A, Imamichi H, Kawasumi N, Izumi M, Ida T : “Simulation of the waveform control pulse magnetization a high temperature superconducting bulk with negative feedback,” 15th European Conference on Applied Superconductivity (EUCAS2021), ID# 417, On-line presented September 5-9, Moscow (Russia) 2021.
- 〔外〕 和泉充：公益社団法人低温工学・超電導学会「高温超伝導バルク材の基礎と応用調査研究会」

商船学科

小田真輝

〔学〕大原順一，西田哲也，嶋岡芳弘，小田真輝，江口好希，池上康之：「バイナリー発電における作動流体の性能評価」，第 90 回マリンエンジニアリング学術講演会，320，2020 年 10 月 27 日

〔学〕松村哲太，藤野俊和，小田真輝，田中健太郎，岩本勝美：「軸受特性数が表面テクスチャリングの潤滑特性に及ぼす影響」，トライボロジー会議 2020 秋別府，E40，2020 年 11 月 13 日

情報機械システム工学科

江崎修央

〔学〕服部魁人，江崎修央，佐伯元規，高橋完，坂本竜彦：海面養殖の自動給餌実現のための深度推定による魚体測定，映像情報メディア学会技術報告 ITE Thechnical Report Vol.44, No.6 MMS2020-1, ME2020-29, AIT2020-1, pp.1-5, 2020

〔学〕佐伯元規，江崎修央，服部魁人，高橋完，坂本竜彦：海面養殖のための自動学習による活性判定器の構築，映像情報メディア学会技術報告 ITE Thechnical Report Vol.44, No.6 MMS2020-2, ME2020-30, AIT2020-2, pp.7-11, 2020

増山裕之

〔論〕増山裕之：矩形音源による反射点位置探索－探索結果を改善するための音源要素配置に関する検討－，超音波 TECHNO, 33, 2, 56-59, 2021.2

〔学〕Hiroyuki Masuyama: Investigation on Improving Search Results in Reflection Point Search Using Rectangular Sound Source, Proc. Symp. on Ultrasonic Electronics, 41, 3Pb2-4, 2020.11

一般教育科

鈴木聡

〔論〕鈴木聡：辞書のネーミングとロゴに関する一考察，鳥羽商船高等専門学校紀要 (43)，15-29，2021 年 3 月

〔論〕鈴木聡，瀬田広明，今井康之：CEFR に準拠した海事英語教育手法の構築と教材開発，鳥羽商船高等専門学校紀要(43)，101-103，2021 年 3 月

中平希

〔著〕中平希（分担執筆）：第 3 章 1 都市国家から領域国家へ，齊藤寛海編著『世界歴史体系イタリア史 2：中世・近世』，山川出版社，2021

栢山剛

〔論〕栢山剛：「1930年代から1941年12月8日太平洋戦争勃発までのアメリカの極東アジア政策」，鳥羽商船高等専門学校紀要 第43号，30-44頁，2021年3月

〔論〕栢山剛：「1968年におけるアメリカのベトナム戦争政策—米国大統領選挙とのかかわりの中で—」，鳥羽商船高等専門学校紀要 第43号，45-64頁，2021年3月

〔論〕栢山剛：“Process for the realization of the Paris Peace Accords on May 13,1968”，鳥羽商船高等専門学校紀要 第43号，65-87頁，2021年3月

〔学〕栢山剛：「1968年におけるアメリカのベトナム戦争政策—米国大統領選挙とのかかわりの中で—」，2020年度日本比較文化学会九州支部・中国四国支部・関西支部3支部合同例会（於：同志社大学今出川キャンパス），2020年12月19日

深見佳代

〔論〕Kae Okoshi, Kayo Fukami, Yasuko Tomizawa: Analysis of Social Policy and the Effect of Career Advancement Support Programs for Female Doctors, Women's Health Reports 2(1) 337-346, 2021Aug

〔論〕深見佳代：女性医師の診療科偏在と地域偏在に関する医療圏分析，京都大学 経済論叢 195(1)，125-139，2021年3月

〔学〕大越香江，深見佳代：女性消化器外科医が生き延びることは可能か，第82回日本臨床外科学会総会，2020年10月

ANNUAL REPORTS
OF
NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY, TOBA COLLEGE
No.44
March 2022

CONTENTS

About the influence of the Tonga submarine volcanic eruption in Training ship “Toba Maru”	Toshikazu SAISHIN Chie KOJIMA	1
A Study on the Personnel of Teachers in Higher Education Institutions from the Prewar to Early Postwar Period.....	Satoshi SUZUKI	5
Book Review.....	Satoshi SUZUKI	19
A Translation of “The Garden Party” by Katherine Mansfield	Satoshi SUZUKI	28
Practical research for physical education class at university with prevention of infectious diseases to COVID-19	Takehito HIRAKAWA Keiichi Ooba Hideo YAMADA	46
Isoroku Yamamoto's military strategy in the outbreak of the Pacific War	Takeshi HASHIYAMA	60
A List of Research Activities.....			75